

上新バイパス関係発掘調査報告書 III

はぎ し みず
萩 清 水 遺 跡

さん ほん ぎ しん でん
三本木新田B遺跡

1997

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上新バイパス関係発掘調査報告書 III

はぎ し みず
萩 清 水 遺 跡

さん ほん ぎ しん でん
三本木新田 B 遺跡

1997

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上新バイパスは、国道18号の上越市と新井市の市街部の慢性的な交通渋滞と冬期間の降雪による交通障害を解消するため建設された全長24.6kmの大規模バイパスです。本バイパスの建設にともない行われた発掘調査によって、縄文時代をはじめ、それまで遺跡の存在すら知られていなかつた奈良・平安時代の遺跡が調査され、当地のみならず、越後の古代史の大きな展望を開く成果が得されました。

本書は上新バイパス建設にかかる発掘調査のうち、昭和60年度と61年度に調査された新井市の萩清水遺跡と三本木新田B遺跡の発掘調査報告書です。

萩清水遺跡では縄文時代前期の陥穴状土坑列のほか、前期後葉の住居跡が1基検出されました。三本木新田B遺跡では縄文時代前期中葉の住居跡が検出され、そこから出土した有尾式土器は当時の県内ではあまり類例を見ないものであり、当該期の研究に貴重な資料を提供しました。

この報告書が縄文時代に限らず、歴史を解明するための資料として広く活用され、広い意味での文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いります。

最後に、本書の刊行までの間、多大なご協力とご援助を賜った地元の人々、ならびに新井市教育委員会をはじめ、高田工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成9年3月31日

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例　　言

1. 本報告書は新潟県新井市三本木新田字萩清水9-1他に所在する萩清水遺跡、同市三本木新田字長峯559他に所在する三本木新田B遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は一般国道18号上新バイパスの建設に伴い、新潟県が建設省から受託して実施したものである。
2. 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする。）が主体となり、昭和61年度および昭和62年度に実施した。
3. 整理および報告書にかかる作業は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする。）が県教委の委託を受けて平成8年度に実施した。
4. 本書の作成は寺崎裕助（埋文事業団調査課第二係長）、立木（土橋）由理子（同文化財調査員）が当たった。執筆分担は第Ⅰ章1・2A、第Ⅲ章4A・5B（1）、第Ⅳ章4A・5B（1）が寺崎、ほかは立木（土橋）である。編集は立木（土橋）が担当した。
5. 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は萩清水遺跡を「萩」、三本木新田B遺跡を「三本B」として出土地点・層位等を併記した。
6. 各遺跡における遺物番号は土器・石器ごとに通し番号を付した。図版と写真図版の番号は一致している。
7. 各遺跡の遺構番号は調査現場で付されたものをそのまま使用した。
8. 遺構図版のエレベーション図は調査現場で作成された平面図と、そこに記入されている標高値から作成したものである。
9. 挿図・遺構図版の平面図の方位はすべて磁北を表す。
10. 引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を文中に（ ）で示し、巻末に一括して掲載した。
11. 萩清水遺跡の新井市調査分に関して、新井市教育委員会高橋勉氏および日本考古学協会員小島正巳氏より資料の提供を受けたほか、多大なご教示・ご助言を賜った。
12. 遺跡の層序については早津賢二氏よりご教示を賜った。
13. 国家座標については博田純氏よりご教示を賜った。
14. 写真図版33の萩清水遺跡表面採集品は清水作次郎氏の所有物であり、氏のご厚意により、ここに掲載させていただいた。
15. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

小熊博史 小島正巳 佐藤雅一 鈴木徳雄 関根慎二 高橋勉 谷藤保彦
野村忠司 博田 純 早津賢二 綿田弘実

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査と整理	2
A. 発 墓 調 査	2
(1) 調査 経 過	2
(2) 調査 体 制	3
B. 整 理 作 業	4
(1) 整理 経 過	4
(2) 整理 体 制	4
第Ⅱ章 遺 跡 周 辺 の 環 境	5
1. 周辺の地形と地質	5
2. 周辺の遺跡	6
3. 新潟県内の縄文時代前期中葉・後葉の遺跡分布	6
A. 縄文時代前期中葉の遺跡分布	6
B. 縄文時代前期後葉の遺跡分布	8
第Ⅲ章 萩清水遺跡	10
1. 調査の概要	10
A. グリッドの設定	10
B. 記録の方法	10
2. 基本層序	10
3. 遺構	11
A. 坪穴住居	12
B. 陥穴状土坑	12
C. その他の遺構	13
(1) 焼土 遺構	13
(2) 土坑・ピット	14
4. 遺物	14
A. 土器	14
(1) 分類	14
(2) 遺構出土の土器	15
(3) 遺構外出土の土器	16
B. 石器	17

(1) 遺構出土の石器	17
(2) 遺構外出土の石器	19
5. まとめ	20
A. 遺構	20
(1) 堪穴住居	20
(2) 陥穴状土坑	20
B. 遺物	21
(1) 土器	21
(2) 石器	22
 第IV章 三本木新田B遺跡	28
1. 調査の概要	28
A. グリッドの設定	28
B. 記録の方法	28
2. 基本層序	29
3. 遺構	29
A. 堪穴住居	29
B. 陥穴状土坑	31
C. 土坑	31
4. 遺物	32
A. 土器	32
(1) 概略	32
(2) 分類	32
(3) 遺構出土の土器	33
(4) 遺構外出土の土器	34
B. 石器	37
(1) 遺構出土の石器	37
(2) 遺構外出土の石器	38
5. まとめ	39
A. 遺構	39
B. 遺物	40
(1) 土器	40
(2) S I 7の石器組成について	41
要約	46
引用・参考文献	47

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 周辺の縄文時代の遺跡	7
第3図 新潟県における縄文時代前期の遺跡分布	9
第4図 萩清水遺跡 グリッド設定図	10
第5図 萩清水遺跡基本層序	11
第6図 石器の計測法	18
第7図 A群1類土器の分布	21
第8図 萩清水遺跡の砂岩および剥片石器の重量構成	22
第9図 擦切石器集成図	23
第10図 筋砥石集成図	24
第11図 三本木新田B遺跡 グリッド設定図	28
第12図 三本木新田B遺跡基本層序	29
第13図 三本木新田B遺跡遺構配置図(一次調査)	30
第14図 三本木新田B遺跡の剥片石器の重量構成	41

表 目 次

第1表 縄文時代前期の遺跡地名一覧	8
第2表 不定形石器分類表	17
第3表 萩清水遺跡 遺構観察表	25
第4表 萩清水遺跡 石器観察表	26
第5表 萩清水遺跡 石器組成表	27
第6表 有尾式期の住居の石器組成	41
第7表 三本木新田B遺跡 遺構観察表	42
第8表 三本木新田B遺跡 石器観察表	43
第9表 三本木新田B遺跡 石器組成表	45

図版目次

図面図版

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 図版1 萩清水遺跡 遺構(1) | 図版13 三本木新田B遺跡 遺構(2) |
| 図版2 萩清水遺跡 遺構(2) | 図版14 三本木新田B遺跡 遺構(3) |
| 図版3 萩清水遺跡 遺構(3) | 図版15 三本木新田B遺跡 縄文土器(1) |
| 図版4 萩清水遺跡 遺構(4) | 図版16 三本木新田B遺跡 縄文土器(2) |
| 図版5 萩清水遺跡 遺構(5)・全体図 | 図版17 三本木新田B遺跡 縄文土器(3) |
| 図版6 萩清水遺跡 縄文土器(1) | 図版18 三本木新田B遺跡 縄文土器(4) |
| 図版7 萩清水遺跡 縄文土器(2) | 図版19 三本木新田B遺跡 縄文時代の石器(1) |
| 図版8 萩清水遺跡 縄文時代の石器(1) | 図版20 三本木新田B遺跡 縄文時代の石器(2) |
| 図版9 萩清水遺跡 縄文時代の石器(2) | 図版21 三本木新田B遺跡 縄文時代の石器(3) |
| 図版10 萩清水遺跡 縄文時代の石器(3) | 図版22 三本木新田B遺跡 縄文時代の石器(4) |
| 図版11 三本木新田B遺跡 全体図 | 図版23 三本木新田B遺跡 縄文時代の石器(5) |
| 図版12 三本木新田B遺跡 遺構(1) | 図版24 三本木新田B遺跡 縄文時代の石器(6) |

写真

萩清水遺跡

- 図版25 S I 1土層 S I 1遺物出土状況 S I 1完掘 S I 1完掘（近景） S I 1砥石出土土坑裁割
S I 1砥石出土状況 SK 5半截・完掘 SK 7半截・完掘
- 図版26 SK 11半截・完掘・裁割 SK 13裁割・半截・完掘 SK 26半截・完掘 SK 27半截・完掘
- 図版27 SK 33半截・完掘 調査区全景（南側から） SK 3完掘 SK 6半截・完掘
SK 10半截・完掘 SK 12半截・完掘
- 図版28 SK 24半截・完掘 SK 36半截・完掘 SK 28半截・完掘 SK 29半截・完掘
SK 32半截・完掘
- 図版29 SK 4半截・完掘 SK 25半截・完掘 SK 34半截・完掘 SK 35半截・完掘
SK 37半截・完掘
- 図版30 SK 38半截・完掘 陥穴状土坑列完掘状況 陥穴状土坑列完掘状況 SK 8半截・完掘
SK 16半截・完掘 SK 18半截・完掘
- 図版31 SK 39半截・完掘 SK 31半截・完掘 SK 1半截・完掘 SK 1遺物出土状況
SK 1周辺 SK 14半截・完掘
- 図版32 SK 17半截・完掘 SK 30半截・完掘 SK 2完掘 SK 21完掘 Pit 2半截 Pit 23完掘
遺跡遠景 遺跡完掘
- 図版33 長峰遺跡一次調査 萩清水遺跡近くの湧水 萩清水遺跡表面採集資料
- 図版34 萩清水遺跡の縄文土器(1)
- 図版35 萩清水遺跡の縄文土器(2)・長峰遺跡の縄文土器

図版36 萩清水遺跡の縄文時代の石器(1)

図版37 萩清水遺跡の縄文時代の石器(2)

三本木新田B遺跡

図版38 S I 7土層 S I 7完掘 SK 6半截・完掘 S I 1半截・完掘 SK 2半截・完掘

SK 10半截・完掘

図版39 SK 11半截 SK 12完掘 SK 14半截・完掘 SK 15半截・完掘 SK 5完掘 SK 13半截

遺跡全景 調査風景

図版40 三本木新田B遺跡の縄文土器(1)

図版41 三本木新田B遺跡の縄文土器(2)

図版42 三本木新田B遺跡の縄文土器(3)

図版43 三本木新田B遺跡の縄文土器(4)

図版44 三本木新田B遺跡の縄文時代の石器(1)

図版45 三本木新田B遺跡の縄文時代の石器(2)

図版46 三本木新田B遺跡の縄文時代の石器(3)

図版47 三本木新田B遺跡の縄文時代の石器(4)

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

国道18号は上越市と新井市の市街部の慢性的な交通渋滞と、冬期間の降雪による交通障害に悩まされてきた。建設省はこれらの障害を解消するため、上越市下源入～中郷村市屋に至る全長24.6kmの大規模バイパス、上新バイパスの建設を計画した。このバイパスは、昭和53年度から工事が開始され、昭和60年現在約12.5kmが共用されている。

上新バイパスの建設に先立ち、昭和51年10月4日に建設省北陸地方建設局高田工事事務所（以下「高田工事事務所」とする。）から「建北高調第549号」で新潟県教育厅文化行政課（以下「県教委」とする。）に対し上新バイパス予定法線に関する埋蔵文化財の有無および発掘・保存等についての照会があった。これに対して県教委は、昭和52年3月23日付「教文第828号」で回答したが、この時点では萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田B遺跡の3遺跡はまだ周知されていなかった。^{註1)} 県教委は、昭和54年10月29日～31日にかけて上新バイパス予定法線内において遺跡分布調査を行い、この時の調査で三本木新田遺跡（以後「萩清水遺跡」とする。^{註2)} が発見・周知された。その調査結果は昭和54年12月11日付「教文第1103号」で高田工事事務所に通知された。

昭和59年2月9日、県教委と建設省北陸地方建設局（以下「北陸地建」とする。）との直轄国道改築事業区域内における埋蔵文化財の発掘調査打合せ会議において、萩清水遺跡の発掘調査希望時期が昭和60年度と北陸地建から具体的に示された。同年9月17日の昭和60年以降の調査についての協議の際に県教委は、二本木・関川・新井線の交点から市屋までの遺跡分布調査の必要性を主張し、分布調査を実施した。その調査結果は、同年10月9日付「教文第793号」で北陸地建に回答されたが、確認された新遺跡および要確認調査地域の中に萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田B遺跡の3遺跡が含まれていた。

昭和60年7月30日の直轄国道改築事業区域内における埋蔵文化財発掘調査打合せ会議において、来年度調査希望遺跡として萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田B遺跡の3遺跡が候補にあがるとともに一次調査の早急な実施依頼が行われた。この依頼を受けて一次調査が昭和60年8月19日～23日に実施され、調査結果は同年9月6日付「教文第730号」で高田工事事務所へ通知された。その調査結果は、萩清水遺跡に隣接して縄文～平安時代の遺物が採集されるが、畑地部分は耕作中のため一次調査不可能という内容であった。昭和61年5月14日、萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田B遺跡の3遺跡が所在する矢代川右岸から渋江川までの一次調査の依頼が北陸地建からあった。県教委はこの依頼を受けるかたちで同年8月1日、三本木新田・西福田新田地域遺跡の一次調査の計画を立案し、「教文第442号」で関係諸機関に通知した。それによると遺跡対象地の名称とそれぞれの面積は、萩清水遺跡（5,200m²）・長峰遺跡（3,300m²）・三本木新田B遺跡（19,200m²）であり、調査予定期間は昭和61年8月20日～昭和61年10月25日までであった。そして、調査体制は担当者を戸根主任、調査員を寺崎文化財専門員と池田文化財専門員とした。

註1) 三本木新田遺跡は、平成8年度現在萩清水遺跡として周知され、三本木新田という遺跡名は抹消されている。

註2) ただし地元では付近一帯は遺物が拾える場所として知られており、日向地ひこうちと呼ばれていた。日向地とはアイヌの人々が住んでいた所を意味するという。（清水作次郎氏よりご教示をいただいた。）

2. 調査と整理

A. 発掘調査

(1) 調査経過

萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田B遺跡の調査は昭和61（1986）年度と62（1987）年度に行った。61年度に長峰遺跡の一次調査と萩清水遺跡の一・二次調査、三本木新田B遺跡の一次調査を行い、62年度に三本木新田B遺跡の二次調査を行った。

昭和61年度の調査は8月20日に調査員が現地に入り、21日に現場事務所などの建設を行い、翌22日から調査に着手した。途中調査員の交代が3度あったが、10月20日には予定の調査を終了して撤収した。個々の遺跡の調査の経緯は以下のとおりである。

長峰遺跡は、8月22日に一次調査に着手し、4日後の26日に調査が終了した。一次調査で遺構は発見されず、遺物も縄文土器片が1点（図版35）表面採集されただけだったので、二次調査は不要と判断した。

萩清水遺跡は、8月23日一次調査に着手し、9月上旬までに縄文時代前期の住居跡や十数基の陥穴状土坑などが検出されたことから、一次調査トレンチを拡張する形で二次調査を実施することになった。二次調査は9月8日から一次調査と同様の体制で開始され、陥穴状土坑の発掘調査は、半截～土層断面の観察・写真・実測～完掘～完掘写真～平面・断面実測の手順で行うこととなった。9月30日から全体の実測を開始し、10月3日には住居跡と陥穴状土坑の発掘・完掘写真を終了、平面・断面実測も数基を残し終了した。翌日には、平面・断面実測と全体実測も終了する見込みとなつた。10月4日以降は、陥穴状土坑1基を検出したほかは新たな遺構の検出もなく、陥穴状土坑を半截して底部における小ピットの存在の有無の確認や風倒木を発掘して内部から出土する遺物の検出・採集に努め、10月17日には二次調査を終了した。

三本木新田B遺跡は、8月27日に一次調査に着手し、調査開始後まもなく住居跡らしき落ち込みが検出



第1図 遺跡の位置

された。9月9日から遺構確認、19日には調査範囲と検出遺構の平面実測、24日には土層断面の実測をそれぞれ開始し、26日に一次調査を終了した。縄文時代前期の住居跡等の遺構が確認されたため、二次調査が必要となつたが、61年度中では調査体制が整わず調査期間も足りないことから次年度に二次調査を実施することとなった。

二次調査は、昭和62年8月18日から調査員4名が現地入りして準備を行い、24日から調査員3名の体制で本格的な発掘調査に着手した。当初の主な作業は、重機による攪乱層の除去と除去後の遺構確認作業であった。9月7日に包含層発掘を開始し、翌8日には遺構発掘に着手した。29日には遺構発掘等の日処が立ったため発掘調査体制を縮小した。10月2日以降は、遺構の実測に入り、その後残務整理などを行い、10月20日に二次調査を終了した。

(2) 調査体制

昭和61年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 有磯邦男）		
管 理	総 括	高橋 安	（新潟県教育庁文化行政課長）
	管 理	田中浩一	（ " 課長補佐）
	庶 務	土田 玲	（ " 主事）
調 査	調査指導	中島栄一	（ " 埋蔵文化財係長）
	調査担当	戸根与八郎	（ " 主任）
	調査職員	寺崎裕助	（ " 文化財専門員）
		池田敏郎	（ " 文化財専門員）
	作業員	新井市の有志	
	協 力	新井市、新井市教育委員会、新井市シルバー人材センター	

昭和62年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 田中邦正）		
管 理	総 括	大塚克夫	（新潟県教育庁文化行政課長）
	管 理	田中浩一	（ " 課長補佐）
		矢部 亮	（ " " ）
	庶 務	土田 玲	（ " 主事）
調 査	調査指導	中島栄一	（ " 埋蔵文化財係長）
	調査担当	藤巻正信	（ " 主任）
	調査職員	金沢道篤	（ " 文化財専門員）
		本間桂吉	（ " 文化財調査員）
	作 業 員	新井市の有志	
	協 力	新井市、新井市教育委員会、新井市シルバー人材センター	

B. 整理作業

(1) 整理経過

遺物の水洗・註記などの基礎的な整理作業は発掘調査を実施した昭和61年度・62年度に発掘調査と並行して行った。報告書作成に関わる本格的な整理作業は、発掘調査後10年をおいて平成8年度に行った。その間、平成4年に財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が発足し、それまで新潟県教育委員会が行ってきた発掘調査及び整理作業が同事業団に委託されることになった。また、平成8年10月には新潟県埋蔵文化財センターが竣工し、それ以降の整理作業はセンターにおいて進めた。

(2) 整理体制

昭和61年度・62年度の整理体制は各年度の発掘調査体制と同様である。

平成8年度

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

整理 理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）

管理 藍原直木（専務理事・事務局長）

山上利雄（総務課長）

亀井 功（調査課長）

庶務 泉田 誠（総務課主事）

整理指導 寺崎裕助（調査課第二係長）

整理職員 立木（土橋）由理子（同 文化財調査員）

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

1. 周辺の地形と地質

萩清水遺跡・三本木新田B遺跡の所在する新井市は新潟県の南西部に位置し、南は長野県飯山市に、北は上越市に接している。新井市は東を関田山脈、南を妙高山、西を頸城連山に囲まれ、北は日本海に面した頸城平野に向けて開いている。市の中央部には関川と矢代川が北流している。関川は焼山を起源として妙高山の南裾を巡り、関田山脈の裾野を流れて頸城平野に至る。矢代川は妙高山・火打山・容雅山・不動山などの山々から流れ下り、頸城平野に至り関川に合流する。両河川の形成した扇状地や氾濫源は当地に肥沃な土地を提供している。

萩清水遺跡・三本木新田B遺跡は矢代川右岸の火碎流台地の上に位置する。この火碎流台地は妙高火山起源の渋江川火碎流堆積物に規定されており、遺跡付近ではその上位を二本木岩屑流と矢代川岩屑流が薄く覆う形となっている。妙高火山の噴出物はちょうどこの遺跡付近を北限として、関川左岸に幾重にもわたって厚く堆積し、地勢形成に大きな影響を与えていた。

渋江川火碎流堆積物は矢代川と高床山に挟まれた妙高火山北東山腹から山麓一帯に広く分布しており、降下テフラ層を挟み上位には二本木岩屑流堆積物が存在する。二本木岩屑流堆積物は妙高火山の3回の休止期のうち、第Ⅲ活動期と第Ⅳ活動期の間の第Ⅲ休止期に堆積し、おもに矢代川流域と矢代川と高床山に挟まれた地域に分布する。ちなみに、第Ⅲ活動期の活動期間は約7～8万年前から約5～5.5万年前、第Ⅳ活動期は約3.1～3.2万年前のシブタミ川火碎流堆積物とそれに伴う兼俣火山灰層の堆積が始まる。矢代川岩屑流堆積物は大倉山と火打山の間の谷から矢代川に沿って新井市までの約50kmの地域に分布し、矢代川流域では始良・丹沢火山灰層(A.T.)の上位に堆積している(早津1985)。 ^{14}C 年代値は17,900±450y, B.P. (Gak-457)、20,200±800y, B.P. (Gak-456)(妙高團研グループ1989)が得られている。

妙高火山の噴出物のうち縄文時代の遺跡調査の鍵層になるものとして、赤倉火碎流堆積物と大田切川火碎流堆積物がある。

赤倉火碎流堆積物は妙高火山の東麓に広く分布し、北は片貝川から南は池の平までの範囲で認められる。考古遺物からみた噴出時期は、従来縄文時代早期末～前期初頭と考えられてきた。ところが近年、妙高高原町関川谷内A遺跡で赤倉火碎流堆積物が縄文時代前期中葉の有尾式土器を包含する黒色土を覆っているのが確認され(小島1995)、従来の認識を改める必要が出てきた。 ^{14}C 年代値はこれまで5,880±190y, B.P. (Gak-7543) (早津・古川1981)、5,710±140y, B.P. (Gak-11393)(早津1985)が得られていたが、最近妙高村道赤遺跡で5,310±110y, B.P. (I-17,943)が出た。この測定結果と遺物の出土層位との関係から、赤倉火碎流堆積物の噴出時期については従来よりも若干新しい時期、つまり有尾式より新しく、諸磯c式並行期よりは古い時期、実年代では約5,300年前と捉え直すのが妥当と考えられている(早津1995)。

大田切川火碎流堆積物は妙高山の東方から北東にかけての、古二俣川・関川・片貝川流域に分布する。噴出時期は考古遺物との関係では縄文時代中期末～後期初頭が考えられているが(早津・小島1985)、噴出年代は ^{14}C 年代値の測定値にはばらつきがあるため、約4,000～4,500年前という幅をもった値が示されている(早津1985)。なお、前出の矢代川岩屑流堆積物はこれに覆われている。

2. 周辺の遺跡（第2図）

妙高山東麓・関田山脈西麓および頸城平野における縄文時代の遺跡は主に山麓部に分布し、関川などの河川が作り出した冲積面や扇状地にはほとんど分布していない。当地域は妙高火山からの噴出物が関川左岸を中心に広い範囲を覆っている。とくに赤倉火碎流堆積物と大田切川火碎流堆積物は遺跡によっては厚く堆積し、その上位と下位の文化層を明瞭に区別している。その反面、関川左岸の妙高高原町田切から妙高村関山までの間は縄文時代中期末～後期初頭に堆積したと推定される大田切火碎流堆積物が非常に厚く堆積しているためか、縄文時代の遺跡の発見例は少ない。

草創期から早期の遺跡は妙高山東側の山裾に多く分布する。長野県との県境に近い大堀遺跡（立木ほか1996）、関川谷内A・B遺跡（小池1995・滝沢1995）、中ノ沢遺跡（阿部1995）では比較的まとまった量の押型文土器が出土し、これまで空白であった当地の編年を作成する上で貴重な資料を提供している。このほかに押型文土器が検出された遺跡としては、妙高山麓では松ヶ峯遺跡群（小島1993ほか）、高床山周辺の遺跡群（高橋1994）、古塔山西方の盆地地形に位置する中古遺跡（室岡1986b）がある。

前期前葉から中葉の遺跡は、関川谷内A遺跡（小池1995）と今回報告する三本木新田B遺跡などがある。これらの遺跡からは有尾式土器が出土しており、とくに関川谷内A遺跡では赤倉火碎流堆積物の下位から有尾式土器が出土し、従来の赤倉火碎流堆積物の噴出時期を再検討する必要が生じた（小島1995）。

前期中葉から中期前葉の遺跡は、妙高山麓に湯ノ沢遺跡群（新潟県1980）、籠峰遺跡（小池1996・中郷村教委1996）・和泉A遺跡（荒川1994・1995・1996）、横引遺跡（立木1996）、萩清水遺跡などがある。籠峰遺跡・和泉A遺跡では赤倉火碎流堆積物と大田切川火碎流堆積物の間で当時期の遺構・遺物が検出されている。このほか、高床山南方の平坦地に道添遺跡（室岡1994・1995）、柿ノ木町遺跡（親跡1992a）、関川とその支流馬場川によって形成された段丘面上に大貝遺跡（岡本ほか1967）がある。

中期中葉から後期・晩期の遺跡は大田切川火碎流堆積物より上位の土層に遺物包含層をもつ。籠峰遺跡、葎生遺跡（中川ほか1967）、奥の城（西峯）遺跡・二本木西林遺跡（岡本1982）、小丸山遺跡（親跡1990）では石棺状配石遺構が検出されている。石棺状配石遺構は東頸城郡顕聖寺遺跡で検出されたのが県内の初例で（中川ほか1959）、現在妙高山麓のほか頸城平野東縁で検出例がある。このほか、兼俣遺跡A地区（本間1976）で中期後葉から後期前葉、兼俣遺跡D地区（室岡1986a）で後期中葉から晩期、上ッ原遺跡（親跡1992b）で晩期後葉の遺物が出土している。また、和泉A遺跡では晩期終末の配石遺構が検出された（荒川1996）。

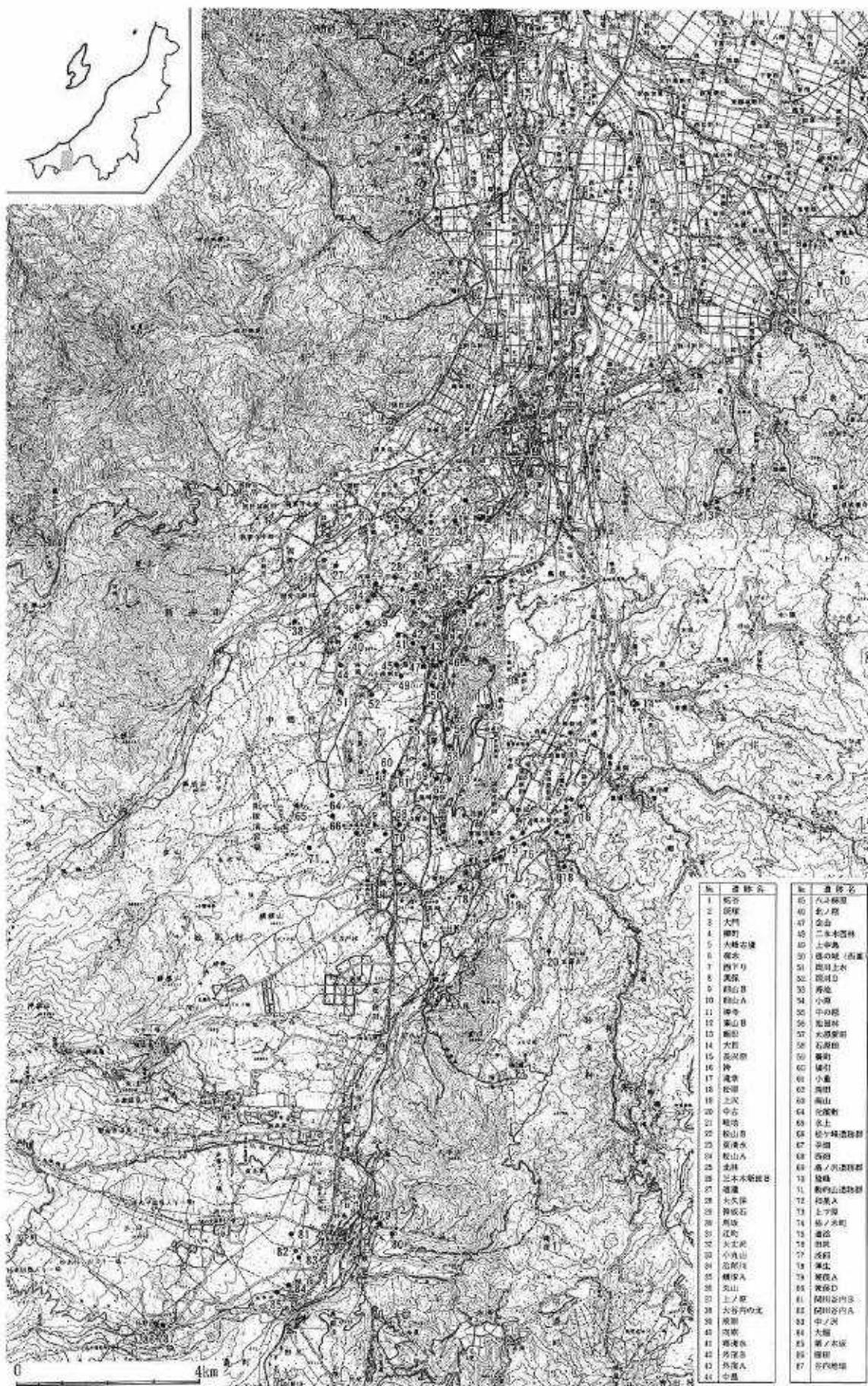
3. 新潟県内の縄文時代前期中葉・後葉の遺跡分布（第1表・第3図）

A. 縄文時代前期中葉の遺跡分布

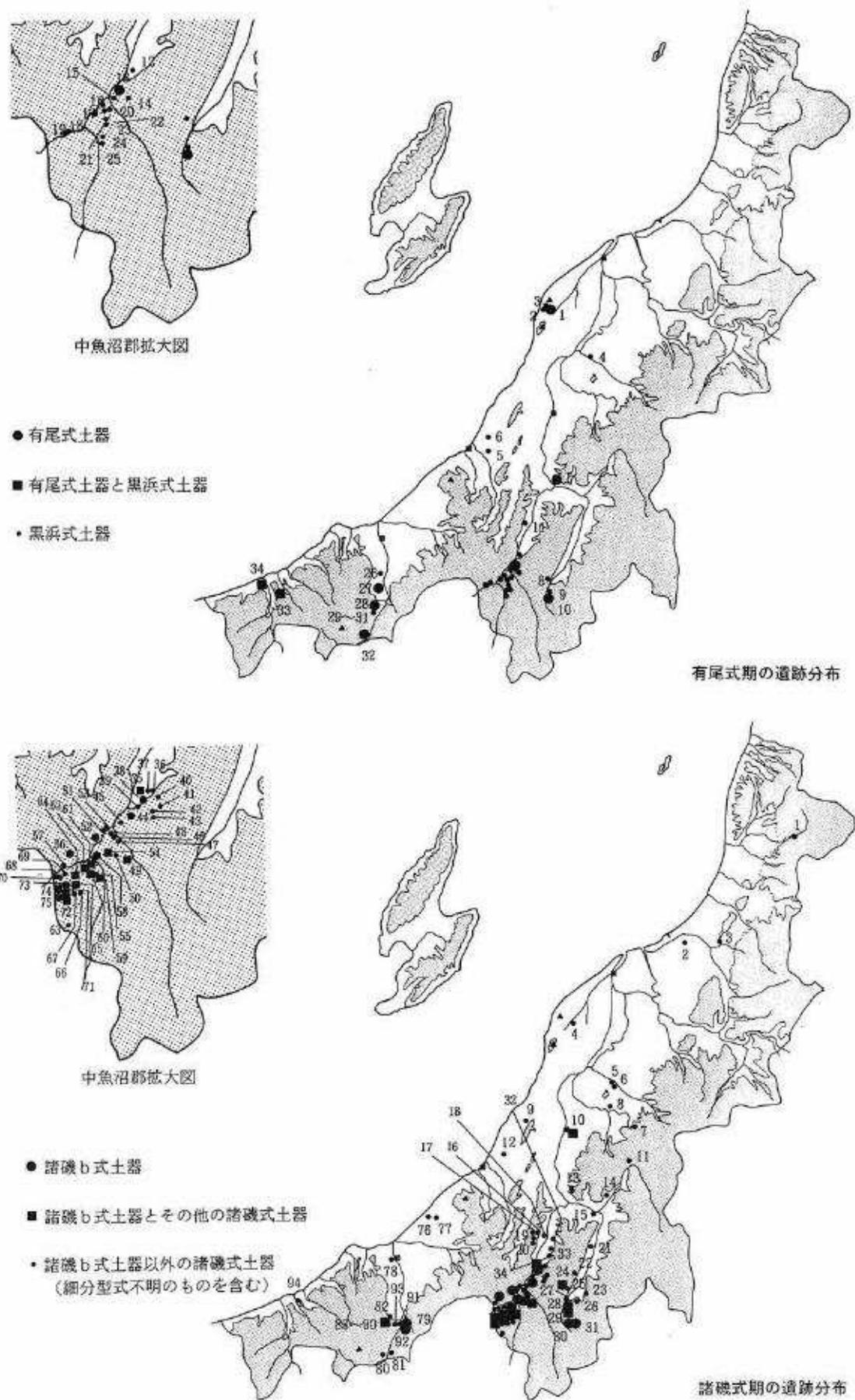
有尾式期・黒浜式期を前期中葉と捉え、その遺跡分布状況を概観する。型式名は報告者の分類による。

有尾式・黒浜式の土器を保有する遺跡は糸魚川市から巻町にかけての海岸部と、中魚沼の信濃川流域、魚野川上流域、関川上・中流域に分布している。遺跡数は有尾式9、黒浜式27であるが、両型式が認められるのは糸魚川市庭平遺跡・青海町大角地遺跡の2遺跡のみである。なお、堀之内町清水上遺跡では前段

II 遺跡周辺の環境



第2図 周辺の縄文時代の遺跡



第3図 新潟県における縄文時代前期の遺跡分布

第Ⅲ章 萩清水遺跡

1. 調査の概要

A. グリッドの設定（第4図）

グリッドはSTA No.334+00の東幅杭とSTA No.335+00の東幅杭を結んだ直線を主軸に設定した。なお、STA No.335+00の国家座標は（X=111648.3421, Y=-23810.9783）である。

グリッドの主軸は真北に対して約9.5° 東偏する。大グリッドは10m方眼とし、南北方向を南から1～10、東西方向を西からA～Jに分けて、「1 A」などのように組み合わせて呼称した。小グリッドは大グリッドを 2×2 m方眼に分けて、各大グリッドの南北隅を起点、北東隅を終点として1～25の番号を付し、「1 A 2」というように大グリッドと組み合わせて呼称した。

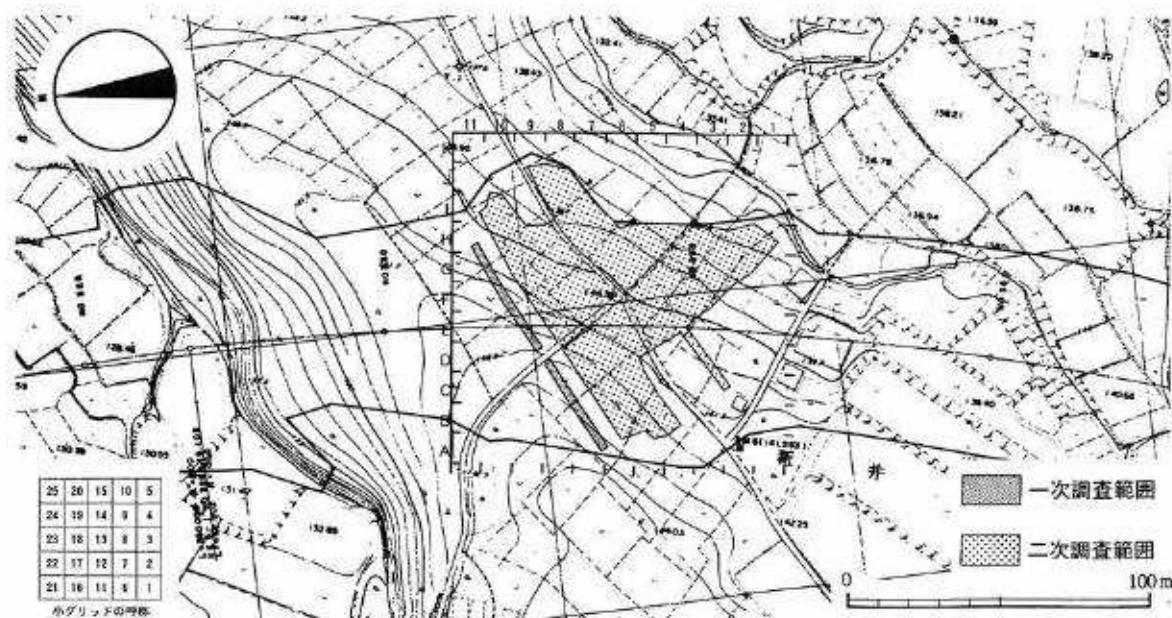
B. 記録の方法

遺物 萩清水遺跡は一次調査の結果、遺構・遺物が検出されたトレンチを中心に拡張していくという調査方法をとった。そのため遺物の取り上げは、遺構出土のものは遺構単位であるが、包含層出土のものについては一次調査のトレンチ単位、あるいは大グリッド単位で行った。

遺構 調査範囲図・遺構平面図は平板測量で作図した。

2. 基本層序（第5図）

調査地は斜面であるが堆積状況に大きな違いはなく、基本層序は次のとおりである。



第4図 萩清水遺跡 グリッド設定図

I層：暗黒色土に赤褐色土ブロックが混じる。現代の耕作土である。

II層：暗黒色土。

III層：暗褐色土に赤褐色土ブロックが混じる。

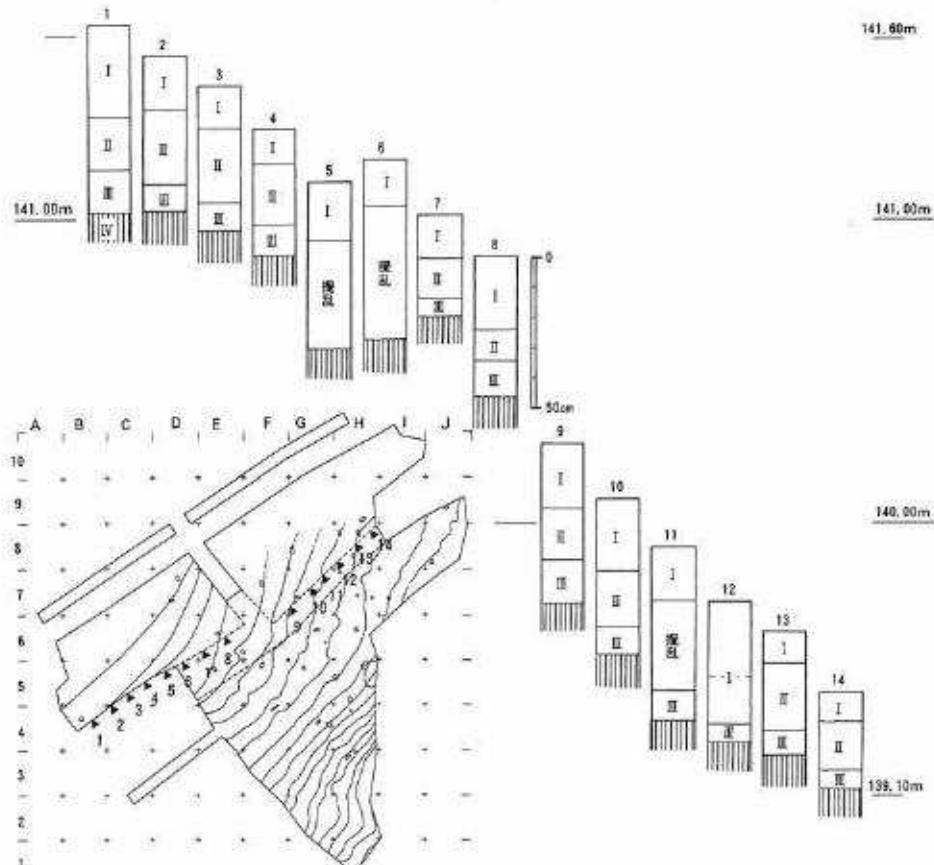
IV層：赤褐色粘土。^{註)}二本木岩屑流堆積物と推定される。

なお、IV層上面の地形は北西から南東に向かって標高を下げる南向きの斜面になっており、標高は141.3～136.2mを測る。

遺物包含層はII～IV層であるが、広い範囲にわたってIV層まで及ぶ攪乱を受けていた。そのため、出土遺物の多くが本来の位置から移動していると考えられる。また、遺構検出はIV層より上位の層が広く攪乱を受けていたため、IV層上面で行った。よって、遺構検出面と掘り込み面は必ずしも一致しない。

3. 遺構

萩清水遺跡では堅穴住居1基、陥穴伏土坑22基、土坑11基、ピット2基が検出された（図版5）。ただし、調査前に包含層と遺構確認面のIV層が広い範囲にわたって攪乱を受けていたために、検出された遺構の多くは上部を破壊されていた。そのため、攪乱深度より浅い遺構が存在していたとしても検出不可能であり、また検出された遺構についても残存部分からその性格を推定せざるを得なかった。



第5図 萩清水遺跡基本層序

註）早津賢二氏のご教示による。

A. 堪穴住居(図版1・25)

堪穴住居は1基検出された。

S I 1 S I 1の東半分は調査範囲外であったため、未発掘である。また、南東側は比較的深くまで攢乱が及んでおり、正確な立ち上がりは残っていなかった。住居の調査部分における長軸は5.95mで、検出面から床面までの深度は40cmである。平面形は隅丸方形に近いと推定される。

床面の施設には周溝とピットがある。周溝は西辺から南隅にかけて掘られている。周溝の幅は約10cm、深度は床面から12cmである。ピットは19基が検出されたが、いずれも小形で浅く配列も不規則なので、柱穴の決定には至らなかった。S I 1-P 9の覆土には炭化物が含まれていたが、形態的に炉跡とは考え難いものだった。これ以外に床面に焼土や炭化物の集中が認められることもなく、炉跡の推定はできなかった。

S I 1の出土遺物には縄文土器と石器がある。石器(図版8・9-1~25)は破損品を含む砥石5点、擦切石器6点、石核2点、石錐1点、不定形石器4点、剝片14点、磨石類1点がある。砥石、擦切石器、石核は質の似る砂岩製である。1の砥石は床面を掘り込んだところに、砥面が床面と同じ高さになるようにして据えられていた。土器(図版6)はA群1類(2~9)・3類(10~12・18)・4類(13~17・19~25)・5類(26~29)とC群2類(1)・5類(30)が出土しており、主体となるのは前期後葉の土器A群である。A群は時期的に諸磯式期に並行することから、住居の構築もその頃と考えたい。

S I 1では食物加工に関わるような石器がほとんど存在せず、石器組成が砥石類に偏ることや、床面に据えられた砥石の存在などから、何らかの研磨作業が行われていたと推定される。ただし、製作された製品や未製品の出土がないので被加工物は明言できない。

B. 陥穴状土坑(図版1~4・25~30)

陥穴状土坑は22基検出された。

分類 分類は本来の形態をとどめていると推定される底部の形態をもとに行つた。検出された22基の陥穴状土坑は、底部の小ピットの有無で2大別、底部の平面形で4細分される。

I類：底部に小ピットを有するもの

II類：底部に小ピットが無いもの

さらにI類、II類は底部の平面形によって、次の4つに細分される。

a類：隅丸長方形を呈するもの

b類：隅丸方形を呈するもの

c類：円形を呈するもの

d類：溝状のもの

上記の分類項目を組み合わせてI a類などと記載する。

I a類は5基(S K 5・7・11・13・26)、I b類は2基(S K 27・33)である。小ピットの数はS K 26が2基であるほかは1基ずつである。

II a類は6基(S K 3・6・10・12・24・36)、II b類は3基(S K 28・29・32)、II c類は5基(S K 4・25・34・35・37)、II d類は1基(S K 38)である。

配列 陥穴状土坑は標高141～137mの北西から南東に緩やかに下る斜面上に分布している。I a類・I b類・II a類は等高線に対してほぼ直行するか平行する向きで並んでいる。II b・II c類は等高線にはば平行して並んでいる。各分類ごとに配列をみると次のようになる（図版5）。

I a類 I a類は北東から南西へ並ぶSK26・7・5の列と北西から南東へ並ぶ13・11の列がある。陥穴状土坑間の距離はSK26とSK7が4m、SK5とSK13が15m、SK13とSK11が27mとばらつきがある。各陥穴状土坑の長軸は列に対してほぼ直行する。

I b類 SK33はI a類の列上、SK5・13の間に存在する。SK27はほかの陥穴状土坑とは離れて単独で4B9に存在する。

II a類 II a類は北東から南西へ並ぶSK6・36の列と、北西から南東へ並ぶSK3・24・10・12の列の2列が認められる。陥穴状土坑間の距離はSK6とSK36が30m、SK3とSK24が12m、SK24とSK10が29m、SK10とSK12が10mである。各陥穴状土坑の長軸は、SK12以外は列にはば直行する方向を向いている。

II c類 II c類は北から南へ並ぶSK28・32・29・37の列と、それに並行する形で10mほど西側に並ぶSK34・35・25の2列が認められる。陥穴状土坑間の距離はSK34とSK35が5mであるほかは、10～15mである。

II d類 II d類のSK38は単独で4F20に存在する。

規模 上部は原形を留めていないので、底部で検討する。

底部の長軸長・短軸長の平均値は次のようなである。I a類76×41.1cm、I b類72.5×52.25cm、II a類77.6×36.1cm、II b類58.3×49.7cm、II c類44.8×39.4cm。深さは現存部分で70～90cmである。なお、I a類の小ピットの深さの平均値は18.8cmである。

I a類、I b類は短軸長で約10cmの差があるが、長軸長はほぼ同じ長さであることが分かる。また、I a類とII a類は長軸・短軸ともほぼ同じ長さである。短軸長で比較すると、II b類はI b類に近い値を示し、II c類はI a類・II a類に近い値を示す。

覆土 残存部の覆土の堆積状況は、各類とも基本的に水平堆積である。覆土はII b類・II c類が暗褐色・褐色系、I a類・I b類・II a類が黒褐色・暗褐色・褐色系であり、そこに二本木岩屑流堆積物由来とみられる黄褐色土あるいは明黄褐色土の入った層が挟在している。

出土遺物 SK13から剝片1点と磨石類1点（図版9-28）、SK26の攪乱部分から縄文土器B群1類（図版6-37）が出土した。

C. その他の遺構（図版2・4・5・30～33）

(1) 焼土遺構

SK16 6G19に位置する。平面形は長楕円形を呈するが、本来は2基の土坑が切り合っていたものと推定される。底面に被熱した土の混じる層が堆積している。

SK18 9J12に位置する。この土坑の北側は調査範囲外であったので発掘したのは南側だけである。底面は被熱しており、底部には炭化物の多量に含まれる土が堆積している。

SK39 8H16に位置する。平面形は楕円形で、掘り形は擂鉢状を呈する。底部に炭化物を含む被熱した土が堆積している。

4 遺 物

S K31 6 G22に位置する。平面形が橢円形を呈する、ごく浅い皿状の土坑である。覆土には被熱した土がブロック状に含まれている。

(2) 土坑・ピット

S K1 7 H13に位置する。平面形は橢円形を呈する。底面から直立する形で1個体分の縄文土器C群2類の下半部(図版6-31)が出土した。土器の下からは石匙(図版9-26)が1点出土した。また、覆土中から剝片、上面から砥石(図版9-27)が出土した。砥石は形態的に新しく、出土位置も土坑上面ということから、本来この土坑中にあったのではなく、後世の混じり込みと推定される。

S K2 5 H20に位置する。平面形は円形で、掘り形は皿状を呈する。S I 1の北西隅に切られている。土器片2点が出土したが、細片のため時期の特定にはいたらなかった。

S K8 9 H16に位置する。平面形が隅丸長方形を呈し、掘り形が擂鉢状を呈する土坑である。検出面での規模・形態が陥穴状土坑II a類に類似する。

S K14 5 H6に位置する。平面形は隅丸長方形で、掘り形は浅い皿状を呈する。縄文土器(図版6)が6点出土し、A群1類(32)やC群5類(33)などに分類される。

S K17 4 G23に位置する。平面形は長楕円形、横断面形はU字形である。縄文土器C群2類が5点(図版6-34~36)出土した。

S K21 7 H22に位置する。平面形は円形で、底面に小さな落ち込みがある。木の根による攪乱の可能性もある。

S K30 5 H3に位置する。平面形は円形を呈し、掘り形は皿状である。縄文土器C群7類(図版6-38)と不定形石器1点(図版9-29)が出土した。

Pit20 9 J17に位置する。覆土に炭化物が含まれている。

Pit23 4 H10に位置する。覆土に焼礫が含まれる。

4. 遺 物

A. 土 器(図版6・7・34・35)

本遺跡からは490点の縄文土器が発見され、その多くは1号住居跡およびその周辺の4~6G・H付近から出土している。時期的には縄文時代早期~晩期のものが認められるが、中心は前期である。胎土中に凝灰岩と考えられる白色で軟質な礫や砂の混入が目立った。器壁の厚みは7~8mmのものが多く、過半数を占める。

(1) 分 類

分類は、以下のように時期ごとにA群・B群・C群に大別し、さらに群内を文様や器種によって細別した。

A群 縄文時代前期後葉の土器

1類 縄文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

2類 無文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

3類 羽状縄文が施文されている深鉢。

4類 斜縄文が施文されている深鉢。

5類 無文の有孔鉢。

B群 縄文時代中期初頭の土器

1類 半截竹管による平行沈線と単沈線で斜格子目文が施文されている深鉢。

2類 縄文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

3類 無文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

C群 その他の土器

1類 縄文時代早期前半の土器

2類 縄文時代前期中葉の土器

3類 縄文時代前期末葉の土器

4類 縄文時代中期後葉の土器

5類 縄文時代後期後半の土器

6類 縄文時代晚期後葉の土器

7類 時期不明の土器

(2) 遺構出土の土器 (図版 6-1~38)

a. S I 1 (1~30)

1はC群2類に分類される。2~9はA群1類に分類され、前期後葉唯一の有文土器である。同一個体の可能性もある。6は焼成良好、2の外面にはスス状炭化物が付着している。10~12・18はA群3類である。10・12は焼成良好、12は内面の整形も丁寧である。また、12の外面にはスス状炭化物が認められる。13~17・19~25はA群4類で、縄文原体は13がL R、16~18がR L、23はLである。13・14は口唇部に刻目状または指頭状の圧痕が認められる。16・20・24・25は焼成良好で、13~15・22は内面の整形が丁寧である。21・22・24は外面にスス状炭化物の付着が認められる。26~29はA群5類である。29は口縁から底部近くまでの破片が出土し、器形の推定復元がほぼ可能な土器である。法量は器高約19cm・口径約28cmと推定され、色調は内外面明褐色で、整形は内外面とも丁寧である。ほかでは26・27が内面の整形が丁寧である。30はC群5類である。縄文が帶状に磨消され、無文部はよく磨かれている。焼成は良好である。以上のように本住居跡からはA~C群土器が出土しているが、その主たるものはA群土器すなわち前期後葉の土器である。

b. SK 1 (31)

C群2類に分類される。底部から胴部下半にかけての大型破片である。底径約16cmを測り、器面全体に羽状縄文が施されている。胎土中に纖維を含むほか、大量の凝灰岩が混入している。このほか補修孔が2か所に穿かれている。

c. SK 14 (32・33)

32はA群1類に、33はC群5類に分類される。32は口縁が波状となり、地文の縄文は羽状である。33は平口縁に小突起が付された深鉢である。無文地に単沈線で横位の平行沈線を引き、沈線間に左下がりと右下がりの単沈線を充填して綾杉状の文様を描出している。凝灰岩を含み、焼成は良好である。

d. SK 17 (34~36)

いずれもC群2類に分類される。34は羽状縄文が施文されている。胎土中には纖維が少量含まれるほ

か、凝灰岩の混入も認められる。外面にはスス状炭化物が付着している。35はわずかに横位の沈線が認められ、以下はLRの繩文が施文されている。胎土中には纖維少量と凝灰岩が混入している。36は羽状繩文が施文され、胎土には纖維を混入する。34・35と同一個体の可能性がある。

e. SK26 (37)

B群1類に分類される。胎土中に金雲母が混入し、内面にスス状の炭化物が付着している。

f. SK30 (38)

C群7類に分類される。LRの繩文が施文された土器で、胎土に凝灰岩が混じる。

(3) 遺構外出土の土器(図版6-39~50、図版7)

39・40はA群1類である。39は胎土に凝灰岩と雲母を含む。40はRLの繩文を地文として施文し、胎土に石英を含み、焼成は良好である。41~45はA群2類である。すべての胎土に凝灰岩を含む。46~58・62はA群3類である。やはり凝灰岩を含むものが目立つ。48・53・55は焼成が良好で、52は内面にスス状炭化物が付着し、53は内外面にスス状炭化物が認められる。48・50は住居跡の付近から出土しており、50は内面の整形が丁寧である。59~61・63~72・113はA群4類である。80はRの繩文、61・65・70はLRの繩文、63・64・68はRLの繩文がそれぞれ施文されている。前述したものと同じく胎土中に凝灰岩を含むものが目立ち、65・69・72は焼成が良好、59は内面の整形痕が顕著である。113の底部は平底であるが、若干丸底気味である。焼成が良好で、内面にスス状炭化物が付着している。底径は約12cmである。73~77はA群5類である。73は焼成良好である。77の内外面には漆のようなものが塗布されている。73~76は外に磨きが認められ、73・76は特に丁寧である。

78~81はB群1類である。凝灰岩に代わって胎土中に雲母が含まれているものが目立つようになる。79~80は焼成が良好である。82~85はB群2類である。雲母の混入が目立ち、82・83は焼成が良好である。82は外面にスス状炭化物の付着が認められる。86~88はB群3類である。86・87は焼成が良好で、86は内面にオコゲ状炭化物、外面にスス状炭化物の付着が認められる。87は外面にスス状炭化物が付着している。

89はC群1類である。山形の押型文が横位帯状施文されており、焼成良好で器壁も薄い。90~93はC群2類である。90は単沈線で綾杉状の文様が施文されている。91~93は全面に繩文が施されているもので、92はRLの繩文が施文されている。91は外面にスス状炭化物が付着している。すべての胎土に纖維が混入しており、凝灰岩の混入も目立つ。94~96はC群3類である。94は「トロフィー形の土器」と呼ばれているものの脚部破片で、背竹管で施文された有節沈線で文様が施文されている。焼成良好で、内面にオコゲ状の炭化物が付着している。95・96は間隔をおいて数条の結節浮線が添付されている。97はC群4類である。キャリパー崩れの器形で、繩文地上に横位の幅広沈線が引かれている。98~105はC群5類と考えられるものである。98はやや幅広の沈線で横位区画を行い、その区画内に同一工具で綾杉状沈線文を充填したものである。焼成は良好である。99・100は繩文を施文したもので、共に住居跡付近から出土している。101~104は無文土器である。102は外面にオコゲ状炭化物が付着し、103~105の外面にはスス状の炭化物が認められる。101は内外面が磨かれている。106はC群6類である。107~112はC群7類である。繩文のみが施されており、時期の特定には無理があるが、108以外の胎土には凝灰岩が含まれていることから前期の可能性が考えられる。109はLRの繩文が施文されている。107・111の外面にはスス状炭化物が付着している。112は底部で、網代痕が認められる。

B. 石器 (図版 8~10・36~37)

萩清水遺跡出土の石器総数は61点である。その内42点は遺構からの出土で、残りは包含層あるいは風倒木痕からの出土である。

主な石器は砥石とその破損品および未製品5点、擦切石器6点、不定形石器7点、石匙2点、石鐵1点、剝片類などがある。石器組成が砥石類と剝片類に偏っていること、石材が砂岩と無斑晶質安山岩に偏っていることが特徴である。

なお、石器の分類は次に示すとおりである。

砥石 断面凹状の砥面や溝状の砥面をもつ石器。溝状の砥面をもつものは「筋砥石」として区別した。

擦切石器 剥片の縁辺にそれと並行する方向の擦り跡をもつ石器を擦切石器として一括した。

石鐵 「矢の先端につける石製の矢じり」(鈴木1991)。

石匙 「一端につまみ状の突起をもち縁辺を刃部とする石器」(田中1991)。

石錐 錐状の突出部をもつ石器。

不定形石器 従来「擣・削器類」・「スクレイパー」・「二次加工のある剝片」・「使用痕のある剝片」・「微細剝離のある剝片」・「不定形剝片石器」などといわれている石器を一括し、細分類は(高橋保雄1990)に従った。

磨石類 「素材となる礫(転石)の正面および側縁に磨痕・敲打痕・凹痕を有するもの」(北村1990)。使用痕の組み合わせで以下の7類に細分類される(高橋保雄1990)。

A類：磨痕。

B類：磨痕+凹痕。

C類：磨痕+敲打痕。

D類：磨痕+凹痕+敲打痕。

E類：凹痕。

F類：凹痕+敲打痕。

G類：敲打痕。

以上の分類に従いながら、記載は実測図の左側を表面(背面)、右側を裏面(腹面)として行う。

(1) 遺構出土の石器 (1~29)

a. S I I (1~25)

S I I からは、破損品を含めた砥石5点、擦切石器6点、石核2点、不定形石器4点、石錐1点、剝片14点、磨石類1点が出土した。このほか、砥石類・擦切石器と同質の砂岩の破碎礫が3点ある。

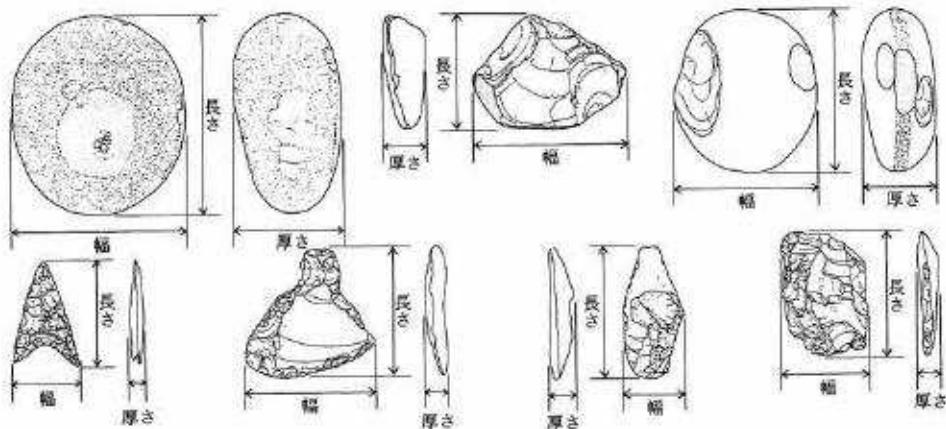
砥石 (1~5) 砥石はすべて砂岩製であるが、目の細かいものと粗いものがある。

分類	刀 鋸 研 状	刃部ライン	材 材	二次加工形態	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離	—	砂岩 砾	削痕と端部 片削痕と端部	A 1種 A 2種
	小型・急角度・連続剥離	研磨	砂岩 砾	片削痕と端部	B 1種 B 2種
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離	外 寶 状	砂岩 砾	底 線	—
	—	研磨	砂岩 砾	片削痕	C 1種
C類	磨削鉢石器 大型・中型・急角度・圓錐状剥離	直 様 状	砂岩 砾	底 線	C 2種
	—	研磨	砂岩 砾	片削痕	C 3種
D類	磨削鉢石器 大型・急角度剥離	直 様 状	厚手	片削痕 (一方の削線は古い) 片削痕と片削痕(両方を 利用する)	D 1種
	—	厚手	厚手	片削痕 (片削痕と底線と同じ) 片削痕	D 2種
E類	磨削鉢石器 大型・急角度剥離	直 様 状	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	D 3種
	—	厚手	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	D 4種
F類	磨削鉢石器 大型・急角度剥離	直 様 状	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	E 1種
	—	厚手	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	E 2種
G類	磨削鉢石器 大型・中型・急角度剥離	直 様 状	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	F 1種
	—	厚手	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	F 2種
H類	磨削鉢石器 大型・中型・急角度剥離	直 様 状	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	F 3種
	—	厚手	厚手	片削痕 (片削痕と底線同じ) 底線	G 類
I類	研磨 (後削痕の複合剥離・使用痕) 小型・急角度剥離	外 寶 状	砂岩 砾	背面は自然面 底面	H 類
	—	研磨	砂岩 砾	底面	I 類
J類	擦加工 (後削痕の複合剥離・使用痕)	—	砂岩 砾	側面 側面	J 類

前 ブラック以外の荷物体は、一般的傾向を表したものが多い。

第2表 不定形石器分類表 (高橋1990)

註) 砂岩の目の細かさの基準は(鈴木1991)によった。



第6図 石器の計測法

1はS I 1の中央の浅い掘り込みの中に表面を上にして据えられていた。(図版1) 全面が敲打され円形に整えられている。側面と裏面には敲打痕が良く残っている。表面は敲打の後、中心付近が砥面とされている。また、砥面のほぼ中央には直径4mmほどの小穴が6個以上開いている。各穴とも先端ほど細くなっているので錐状の工具によりつけられたと推定される。裏面下半には幅広で浅い溝状砥面が2本ある。

2は表裏面に砥面をもつ筋砥石である。表面の砥面には長軸方向の2本の溝状砥面が走り、回転により生じたと思われる直径4mm前後の漏斗状の窪みが3か所ある。裏面の砥面には深さ2~5mm、長さ15~20mmの表面に比べると深くて短い溝が長軸方向に6本、短軸方向に3本走っている。これも研磨作業によって生じたと思われるが、溝底は凹凸があり平滑ではない部分がある。砥面以外の部分には敲打痕が残っている。上下と右側面にある多数の剥離痕は、擦切石器の素材となる剝片が剥離されていた可能性がある。

3は筋砥石の破片で、浅くて短い溝状砥面をもつ。4は砥面はないが表面が敲打されていることから、砥石の未製品と考えた。

5は全面が敲打された後、中央に細長い砥面が設けられている。裏面と上半分を欠くが、下半分を失った際の剥離面の、砥面と接する稜線が掠れて鈍くなっていることから、破損後も使用されていたことが分かる。

擦切石器(6~11) 砥石と同質の砂岩が用いられているが、目の細かさで微粒~極粗粒に分けられる。

擦切石器には側面に筋砥石の溝が残されているもの(6・7)や、砥面が残されているもの(8・9・11)があり、砥石を石核として素材が獲得されていたことが分かる。6に残る3本の溝状砥面は筋砥石の溝状砥面に比べて細くて深い。10のように砥面などがないものは、素材を石核から得ていたか、砥石からの剥離が進んだ段階で得られた剝片を素材としていたものと推定される。

刃部形態は直線的なもの(10・11)と曲線的なもの(6~9)がある。直線的な刃部の断面形は片刃に近い形態で稜線がある。曲線的な刃部の断面形は丸みを帯びたU字形をしている。

石核(12・13) 石核はすべて砂岩製である。筋砥石の素材を作出したものと推定される。

12は表面に敲打面が残り、裏面に研磨された面が残る。13は右側面で大きく分割された後、左側面を作業面として剝片が剥離されている。作出される剝片の大きさに規格性はない。

石錐(14) 剥片の打面部側に錐部を作り出しているが、短く、鋭さに欠ける。

不定形石器(15~18) 15は上半を欠損しているが、剝片の末端に刃部が作出されている。16は右半分が節理面から折断された幅広の横長剝片が素材とされている。末端と左側縁に刃部が作出されている。17は横

長剝片の腹面下端部に微細な調整剝離痕が認められる。素材の打面は礫面を調整して得られた単剝離打面である。18は背面に礫面をもつ厚手の剝片が素材とされている。末端部が大きく剝離された後、微細な調整が背面側に加えられている。

剝片 (19~24) 剥片は14点出土した。使用石材の内訳は無斑晶質安山岩がもっとも多く7点、次いで砥石類と同質の砂岩6点、頁岩1点である。

19・20は無斑晶質安山岩製の剝片で背面を多方向からの剝離痕に覆われている。21~24は砂岩製の剝片で、擦切石器の素材になりそうなものである。21の背面には溝状の砥面が残されており、筋砥石から剝離されたことが分かる。

磨石類 (25) 25はC類で、被熱して帯状にススが付着している。

b. SK1 (26・27)

SK1からは石匙、剝片、砥石が各1点出土した。

石匙 (26) 横形の石匙で、刃部は半月状を呈する。

砥石 (27) S I 1出土の砥石とは異なる凝灰岩製の砥石である。このような板状の砥石は古代以降に類例が見られることから、これも縄文時代のものというよりは古代以降のものが紛れ込んだ可能性が高い。

c. SK13 (28)

SK13からは剝片と磨石類E類(28)1点が出土した。28は表面に2か所の凹みをもち、裏面は節理面から割れている。剝片は背面に砥面とみられる滑らかな面をもつ。

d. SK30 (29)

SK30からは不定形石器J類(29)が1点出土した。29は無斑晶質安山岩製の横長の剝片である。打点は点打点で、腹面下半部が大きくヒンジフラクチャーを起こしている。剝片の上縁に刃こぼれ状の剝離痕が認められる。

(2) 遺構外出土の石器 (30~38)

遺構外から出土した石器には石鎌、笠状石器、石匙、両面調整石器の破損品各1点、磨石類2点、不定形石器2点、剝片9点がある。このほかに水磨した黒曜石の転石2点があるが、石器の素材を獲得できるようなものではない。

石鎌 (30) 無斑晶質安山岩製の凹基無茎鎌である。左脚をわずかに欠く。

笠状石器 (31) 裏面中央部に素材の主要剝離面と見られる部分が残っていることから、素材は厚手の剝片であったと推定される。

石匙 (32) 三角形の石匙で、裏面には素材の主要剝離面が大きく残されている。

両面調整石器破損品 (33) 横方向からの力で器体半分を欠損していることから、製作途中での破損品と推定される。

不定形石器 (34・35) 34は上半分を欠くが、剝片の縁辺部に細かい剝離痕が施されている。35は左側面の礫面を打点とする横長の剝片が素材とされている。左側縁を中心に調整を施し、素材の形状を生かしながら尖頭状に仕上げられている。

剝片 (36) 無斑晶質安山岩製で、礫面を打面としている。

磨石類 (37・38) 37はA類で右側面の稜上とそれに接する表裏面の一部に磨面がある。38はC類で右側面の一部とそれに接する表面の一部分に磨面がある。周縁部には敲打痕が認められる。

5. まとめ

A. 遺構

(1) 壇穴住居

萩清水遺跡で検出された壇穴住居跡はS I 1のみである。S I 1の構築時期は出土土器から諸磯b式期並行期と推定される。

諸磯b式期の住居跡の検出例は新潟県では吉川町古町B遺跡（泰1992）、中里村鷹之巣遺跡（島田1986）があるが、鷹之巣遺跡については出土土器から諸磯c式期にかかる可能性もある。県外では長野県阿久遺跡（戸沢1988）、同県大倉崎遺跡（常磐井1990）、群馬県糸井宮前遺跡（関根1986）、埼玉県東光寺裏遺跡（中島1980）などがあるが、総じてこの時期の住居跡の検出例は少ないようである。

ここで、少ない検出例ではあるが、諸磯b式期の住居について気付く点を2、3挙げておく。

平面形は有尾式・黒浜式の時期にあまり見られなかった円形のものが主体となり、隅丸方形のものは減少する。隅丸長方形のものは影をひそめてしまう。規模は直径約4～9mであり、有尾式・黒浜式期に比べ若干大形化している。周溝をもつものは古町B遺跡で確認されているが、全体では少数になる。柱穴は住居の壁に沿って並ぶようである。炉は地床炉が減り、石囲炉や土器埋設炉が目につくようになる。炉は基本的には住居中央に設置されていたようであるが、糸井宮前遺跡134号住居址では石囲炉や土器埋設炉が1つの住居内に複数存在するため、この限りではない。

さて萩清水遺跡のS I 1だが、東半分が未調査の不完全な資料であるため、わかる範囲で検討してみたい。平面形は隅丸方形、規模は約6mであり、当該期としては中程度の住居である。周溝は存在するが全周しない。炉や柱穴は特定できなかった。なお、S I 1北西隅にあるS K 2については、古町B遺跡例のように壁際に貯蔵穴をもつ例もあるが、ここでは切り合い関係が認められており、同時存在の貯蔵穴とするには問題が残るだろう。

上記のとおり、S I 1は磁石を据えた土坑があるほかは規模・形態とも諸磯b式期の一般的な住居形態であるといえる。

(2) 壇穴状土坑

萩清水遺跡では22基の壇穴状土坑が検出された。これは新井市教育委員会によって調査された隣接地で検出された200基あまりからなる壇穴状土坑列と一連のものと考えられる。よって、ここでは配列については触れず、壇穴状土坑の構築時期の検討を行いたい。

検出された壇穴状土坑は底部の小ピットの有無で2大別、平面形で4大別される。I a・II a類は板倉町峯山B遺跡（泰1986）、湯沢町岩原I遺跡（北村1990）・岩原II遺跡（佐藤1987）で検出されている。峯山B遺跡では住居跡との切り合い関係から、同型のものの構築時期を縄文時代前期前葉以降末葉以前としている。また岩原II遺跡の出土土器の主体が諸磯b式土器であることから、萩清水遺跡のI a・II a類もおよそこれと近い時期に構築されたと考えられる。I b類は岩原Iに類例があるが、時期を推定するような根拠に乏しい。II b・II c類は平面形は円形と隅丸方形で若干異なるが、掘り方は共に筒状である。このような細い筒状の壇穴状土坑の例をみないことから、おそらく漏斗形の壇穴状土坑の上半分が削平されて、筒状になったと推定される。漏斗形の壇穴状土坑の構築時期については岩原I遺跡で早期末葉から

前期前葉、妙高高原町大堀遺跡（立木ほか1996）で早期前葉など、比較的古い時期が当てられている。萩清水遺跡でも少數だが早期の土器が出土しているので、上限を早期として前期前葉ぐらいまでの構築時期を仮定できるのではないか。II d類のような溝状のものは類例も多いが、構築時期は前期前葉から後期初頭までの幅があり形態からだけでは判断は難しい。

次に覆土を見ると、色調で2大別される。暗褐色・褐色系の覆土のII b・II c類、黒褐色・暗褐色・褐色系のI a・I b・II a類である。II b・II c類は前期前葉までの構築時期が仮定されたものであり、I a・II a類は前期前葉以降末葉以前の構築時期が推定されたものである。よって、これらの陥穴状土坑は前期前葉の中で共存していたか、あるいは前期の中でII b・II c類→I a・II a類の前後関係があったものと仮定できるのではないか。また、覆土が共通するということは構築時期の同時性は証明できないが、埋没時期は近いことが推定できる。よって、I b類については構築時期は推定できないものの、埋没時期はI a・II a類に近いと考えられる。

B. 遺 物

(1) 土 器

先述したように当遺跡からは、前期後葉を中心に早期前半～晩期後葉の土器が断続的に出土している。そして、それらの土器は時期や文様・器種によって3群15類に分類されている。しかし、出土量は決して多くはない、1回の発掘調査の出土量としてはむしろ少量の部類に含まれる。それゆえ、分類された土器全体について検討を加えることは無理があり、差し控えたい。そこで、ここでは当遺跡を特徴づけるA群1類土器に限り、その器形・文様、分布、編年的位置などをについて少し検討を加えてみたい。

まずは器形と文様である。両者は、完形品や大型破片が出土していないことから不明な点が多い。しかし、出土している破片から推測してみると次のようなことが言える。器形は、口縁形は平口縁(8)や緩やかな波状(3・32)および小突起(4)をもち、口縁部は直立(4・8・32)または内凹気味(3)、胴部は筒状(40)である。文様は、平行沈線による文様施文は口縁部に限られ、胴部は斜行または羽状の繩文のみが施文されている。口縁部文様は、口縁と頸部に数条の平行沈線が巡って平行沈線帯を作り、それらの平行沈線帯間に数条1組の平行沈線で直線・曲線文様が施文されている。



第7図 A群1類土器の分布

次にその出土遺跡と分布であるが、第7図の様に今のところ県内では当遺跡の他、巻町豊原遺跡（小野・前山ほか1988、小野1994）、刈羽村刈羽貝塚（八幡1958、柏崎市史編さん委員会1987）、吉川町古町B遺跡（泰・小林ほか1992、寺崎1997）、柿崎町鍋屋町遺跡（室岡・寺村1960、寺村・三井田・閑1959）の4か所で、県外では長野県飯山市大倉崎遺跡（高橋・中島・金井1976、高橋ほか1990）の計5遺跡で出土が確認されている。分布は、今のところ本県西部の海岸部を中心に、妙高山麓および長野県の飯山盆地で認められる。これらの土器を概観してみると、器形では口縁形態において、前述したもののほか明確な波状を呈するものが大倉崎遺跡で認められる。文様では施文技法において、縄文地上に平行沈線のみで文様を描くものと平行沈線で文様を描き、その沈線間に同一の半截竹管で爪形を施したものとの2者が存在する。編年的位置付けについては、1号住居跡でA群4類の29が伴うことから諸磯b式に並行することはある程度理解できるが、本遺跡出土のもののみではこれ以上踏み込んで言及することはできない。そこで、同タイプの土器が出土している古町B遺跡、大倉崎遺跡、刈羽貝塚の事例を参考にこの問題を少し考えてみたい。

古町B遺跡では27堅穴住居跡から同タイプの土器が出土している。それによると同タイプの土器と諸磯b式新段階の土器、刈羽式土器、蜆ヶ森式土器が伴出している。この刈羽式土器は、刈羽貝塚の混貝土層出土の刈羽式土器と同タイプである。一方、諸磯b式の古段階に並行すると考えられる5号堅穴住居跡出土の土器の中にはA群1類土器は認められない。大倉崎遺跡では実測図化が可能な大形破片などがB地点1号住居跡から出土しており、やはり諸磯b式新段階の土器が伴出する。刈羽貝塚からは、当遺跡のA群1類土器よりも古手と目される土器が貝層中から、A群1類土器と並行かやや古手と考えられる土器が貝層よりも上位の混貝土層から出土している。また、豊原遺跡では爪形が施されたものは、施されないものよりもやや古いとの所見が述べられている。

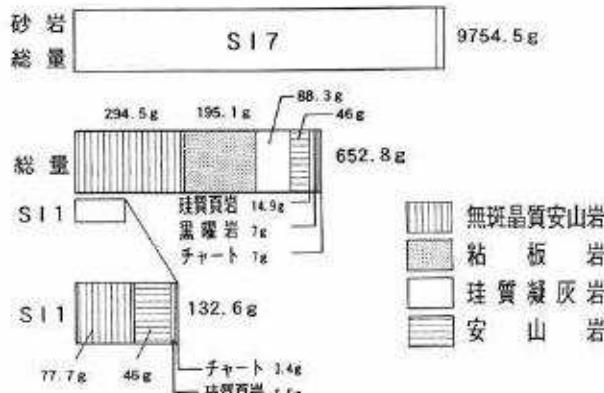
以上のように、A群1類土器は諸磯b式に並行する在地の土器で、時期的には爪形をもたない「新段階」と爪形が施された「古段階」に2分される。当遺跡出土のものは爪形をもたないことから「新段階」に比定され、諸磯b式新段階に並行するものと考えられる。なお、豊原遺跡や刈羽貝塚および古町B遺跡の出土状況を見てみると、同一層位や同一遺構に刈羽式土器が伴出している。これらの状況から、A群1類土器は刈羽式を構成する有文土器の一角を占めるのではないかと考えられる。

(2) 石 器

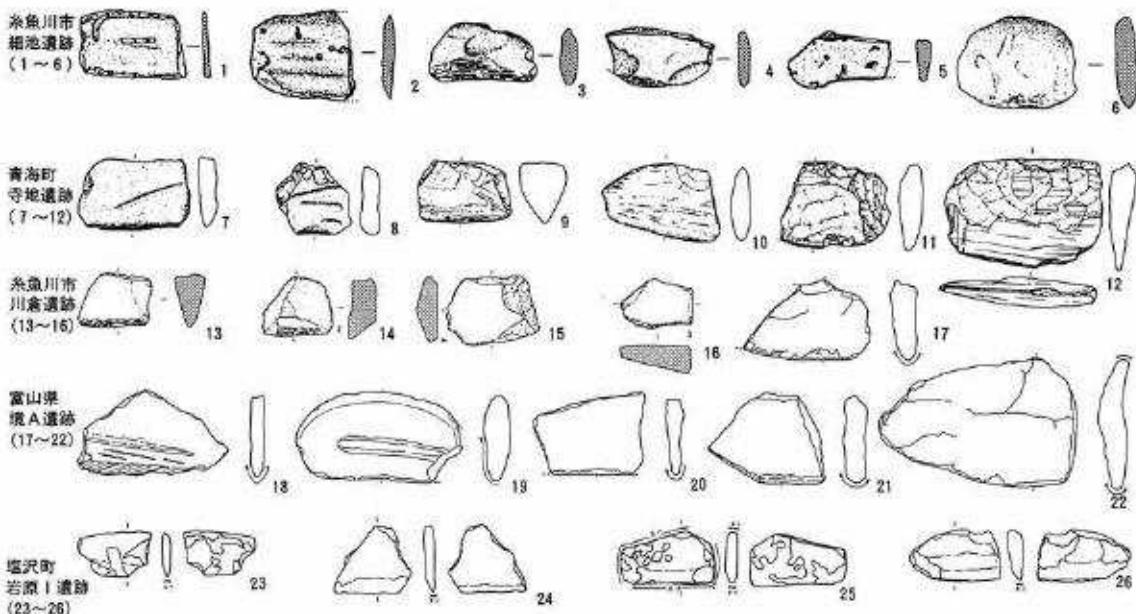
萩清水遺跡S I 1出土の砥石類は、破損品を含めた砥石5点、擦切石器6点、石核2点がある。砥石のうち3点は溝状の砥面がある筋砥石である。ただ、未製品や製作途中で出る屑などが出土していないことから、被加工物は不明である。そのため他遺跡と比較しながら、萩清水遺跡の砥石類、特に筋砥石と擦切石器の対象物を考えてゆきたい。ただし、縄文時代前期の遺跡で、筋砥石や擦切石器が出土した例はほとんど無いので、比較する遺跡は縄文時代前期～晩期の遺跡とした。

a. 擦切石器について

擦切石器が出土した県内の遺跡には湯沢町岩原I遺跡（北村1990）、塙沢町五町歩遺跡（高橋1992）・小千谷市城之腰遺跡（藤巻1991）、



第8図 萩清水遺跡の砂岩および剝片石器の重量構成



第9図 擦切石器集成図

糸魚川市長者ヶ原遺跡（土田ほか1986）・岩野B遺跡・川倉遺跡・細池遺跡（土田1986）、青海町寺地遺跡（寺村ほか1987）がある。近県では富山県境A遺跡（山本1990）・石川県チカモリ遺跡（増山1984・南1984a・b）などがある。

境A遺跡では玉類と磨製石斧が製作されていた。境A遺跡の擦切石器には刃部が直線的なものと、外彎したり内彎したりするものがある。直線的なもの、あるいは外彎するものは擦切技法に用いられた可能性が高いが、内彎したり波状になるものはほかの軟質材料の擦切に用いられたか、別の使用法を考える必要があるとされている（山本1990）。

糸魚川市の4遺跡では青海川の川底から産出した硬玉を原料に玉造が行われていた。そのため、これらの遺跡の擦切石器は主に玉造の工具として使用されていたと推定できる。擦切石器は刃部を下にした場合の最大幅が～9cmほどで、刃部形態は直線的なものと曲線的なものがある。刃部断面形はV字形、U字形、口字形があり、一定ではない。器体の最大厚は0.5～2cmの幅がある。石材は砂岩である。

岩原I遺跡の擦切石器は滑石の原石に残る擦切痕に完全に一致することから、原石を分割するために用いられたと推定されている。刃部は長さが～7cm、断面形は片刃に近いV字状を呈する。

これに対して萩清水遺跡の擦切石器は最大幅～9.7cmで、刃部形態は直線的なものと曲線的なものがある。刃部断面形はU字形あるいは片刃に近いV字形である。器体の最大厚は1～3cmの幅がある。

砥石という石器の性質上、大きさの上のでの厳密な比較はあまり有効ではないと思うが、萩清水遺跡の擦切石器は大きさの点では糸魚川や岩原I遺跡のものに近いといえる。刃部形態も口字形が認められないほかは共通する。以上のように、萩清水遺跡の擦切石器は玉類研磨のための擦切石器に類似するといえる。

b. 筋砥石について

筋砥石の研磨対象については、玉類、磨製石斧のはか骨角器、木製品などが挙げられているが、中でも骨角器の研磨が主体であった可能性が高いと指摘されている（宮下1987）。五丁歩遺跡でも擦切石器と共に筋砥石が出土しているが被加工物の出土ではなく、骨角器が対象として挙げられている。なお玉類と磨製石斧の両方を製作していた境A遺跡では筋砥石の研磨対象は玉類であり、磨製石斧は対象とならないことが指摘されている（山本1990）。磨製石斧の製作址である神奈川県尾崎遺跡（鈴木1977）や新発田市館ノ

内D遺跡（鶴巻1992）にも筋砥石ではなく平砥石のみであり、これを裏付けている。

遺跡から出土した筋砥石を新潟県を主体にまとめたのが第10図である。1～9は玉類の研磨に使用されたと推定される筋砥石であり、10～29は共伴石器に玉類の未製品や敲石が無いことから、玉類の製作に伴わない筋砥石であると考えられる。玉類の製作に伴う筋砥石は溝状砥面の幅が均一かつ直線的であり、溝状砥面が複数ある場合は単位ごとに平行してほぼ等間隔に走っている。これに対して、玉類の製作に伴わない筋砥石の溝状砥面は1本1本が直線的ではなくとぎれとぎれに走っており、幅も一定していない。複数の溝状砥面がある場合は平行せず、不規則に並んでいる。このように、玉類を研磨した筋砥石とそれ以外の筋砥石では、溝状砥面のあり方に違いが認められる。この結果と萩清水遺跡の筋砥石を比較してみる。

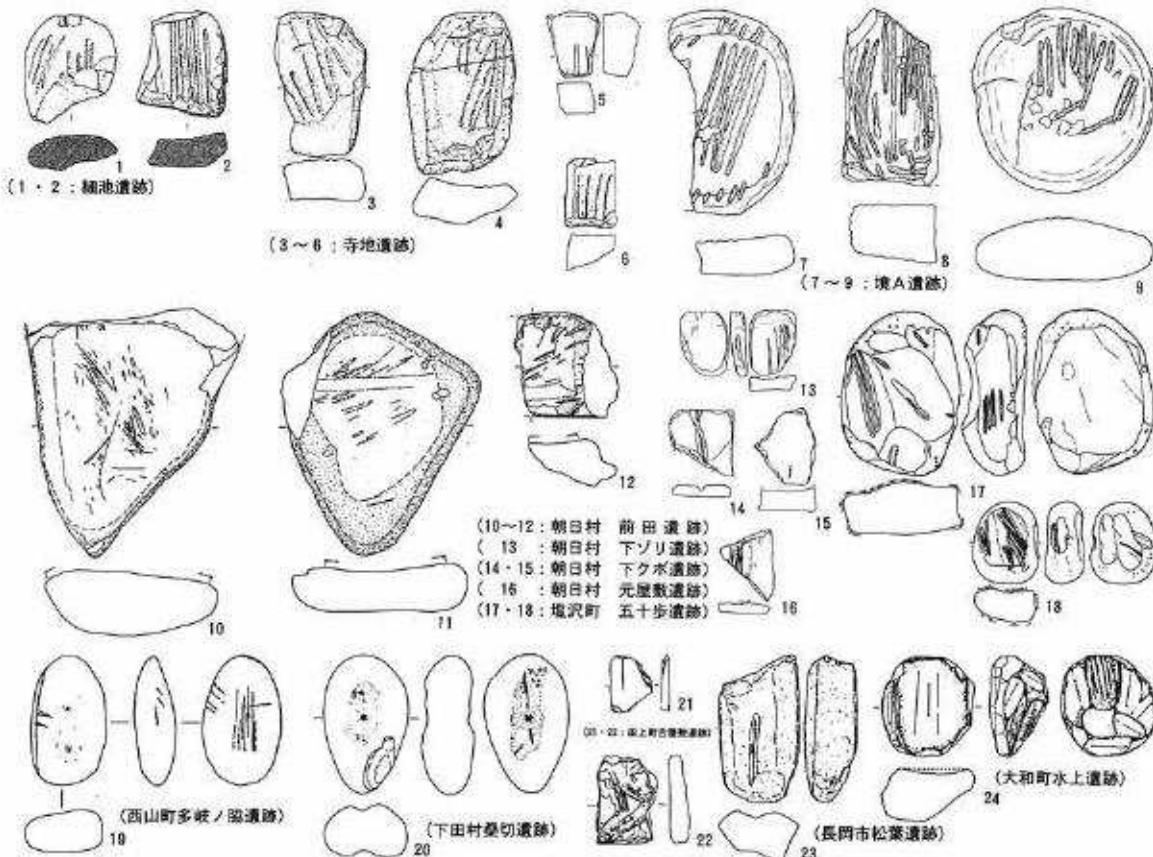
萩清水遺跡の筋砥石の溝状砥面はいずれもごく浅く、幅や走行方向が一定ではない。これは玉類製作用ではない筋砥石の特徴を示している。組成に未製品や敲石が無いことからも萩清水の筋砥石は玉類以外のもの、骨角器など？を研磨対象にしていた可能性が高いといえよう。

c. S I 1における作業内容について

最後にS I 1で行われていた作業内容について検討してみたい。

S I 1の床面には砥石が据えつけられた土坑があった。この砥石は両面に砥面があることから、土坑に据えられたまま常に一定の向きで固定されていたわけではなく、必要に応じて向きを変えて使用されていた可能性が高い。砥石を土坑に保管していたとも考えられるが、土坑の位置が保管のためのものにしては住居の中心に近く、その可能性は低いと思われる。

以上のことから、S I 1では筋砥石や土坑の中に固定された砥石を用いて、ほぼ恒常に骨角器などの研磨作業が行われていたと推定される。擦切石器については玉類の細部加工に用いられたとも考えられるが、判断材料に乏しいので言及は避けたい。



第10図 筋 砥 石 集 成 図

第3表 萩清水遺跡 遺構観察表

遺構名	位 置	長軸方向	上 端		下 端		深度 (cm)	備 考
			長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)		
S I 1	5H18~20 5H22~25	-	(505)	-	(500)	-	40	東半分は調査範囲外のため未発見 整穴住居跡・底石類多數・織文土器
S II-P 1	5H19	-	24	19	14	12	28.7	
S II-P 2	5H19	-	22	19	8	8	6.5	
S II-P 3	5H19	-	27	22	21	15	3.5	
S II-P 4	5H18	-	18	18	9.5	9.5	26.6	
S II-P 5	5H18	-	23.5	19	13	13	27.8	
S II-P 6	5H18	-	20	15.5	11	10.5	19.8	
S II-P 7	5H22	-	24	14	7	6	57.6	
S II-P 8	5H23	-					9.2	東半分は調査範囲外のため未発見 覆土に炭化物が含まれる
S II-P 9	5H23	-	56	32	20	18	22.5	
S II-P 10	5H23	-	19.5	15	8	6.5	14	
S II-P 11	5H23	-	20	12	14	1.5	9.5	
S II-P 12	5H23・24	-	22	13.5	8	7	16.5	
S II-P 13	5H24	-		(56)		(38)	5	一部調査範囲外のため未発見
S II-P 14	5H24	-	16.5	15	7	7	10.5	
S II-P 15	5H24	-	28	(22)	11	11	45	P16に切られる
S II-P 16	5H24	-	33	28	21.5	11	15	P15を切る
S II-P 17	5H24	-	24	21	14	13	21	
S II-P 18	5H24	-	26	22	13.5	13.5	14	
S II-P 19	5H24・25	-	15	13	8	6	10.5	
S K 1	7H12・13	N・72°・E	80	49	46	32	32	織文土器(図版6-31)・石器(図版9-26)・削片・磨石(図版9-27)
S K 2	5H19・20	N・45°・E	156	-	129.5	92	56	織文土器 東側をS11に切られている
S K 3	7D7・12	N・63°・E	84.5	62	68	40.5	78.5	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 4	7D14・15	N・50°・E	80	68.5	26	23	61.5	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 5	7F9・14	N・40°・W	123	93	86	31	74.5	陥穴状土坑Ⅰa類 底面ピット1基
S K 6	8G2・3	N・11°・W	125	62	100	24	75.5	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 7	8H4・5	N・7°・E	114.5	65.5	88	43.5	83	陥穴状土坑Ⅰa類 底面ピット1基
S K 8	9H11~16	N・68°・E	131	62	23	21.5	71	陥穴状土坑Ⅱa類に類似
S K 10	4G18・19	N・58°・E	92	54	84	36.5	76	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 11	3H9・10	N・47°・E	106	74	71	32	70	陥穴状土坑Ⅰa類 底面ピット1基
S K 12	3H15・4H11	N・33°・W	92	65.5	60	41.5	68	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 13	5F10・15	N・42°・E	121	58	78	30	90	陥穴状土坑Ⅰa類 底面ピット1基
S K 14	5H6・11	N・37°・W	112.5	81.5	78	53.5	26	織文土器(図版6-32・33)
S K 16	6G14・19	N・87°・E	132	68.5	23	13	40	焼土あり
S K 17	4G23・24	N・61°・W	165	97	78.5	44	61.5	織文土器(図版6-34~35)
S K 18	9J12	N・18°・W	(86)	(102)	(80)	(91)	31.5	焼土あり
S K 21	7H22	N・35°・E	71	58	44	43	34	擾乱か?
S K 24	6E8・9・13・14	N・32°・E	104	73	75.5	31	77	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 25	7G2・3・7・8	N・55°・E	78.5	65.5	48.5	36.5	86	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 26	8H14・15	N・14°・W	168.5	91.5	139	69	78	陥穴状土坑Ⅰa類 底面ピット2基
S K 27	4B9・14	N・22°・W	92	88	67	55.5	89.5	陥穴状土坑Ⅰb類
S K 28	8J1・2・6	N・19°・W	84	64	55	32	73.5	陥穴状土坑Ⅱb類
S K 29	6H14	N・38°・E	80	66	53	51	89	陥穴状土坑Ⅱb類
S K 30	5G23・24・5H3・4	N・4°・E	114	106	90	86	89	織文土器(図版6-38)・不定形石器(図版9-29)
S K 31	6G17・22	N・83°・W	61.5	45.5	39	30	7	焼土あり
S K 32	7J2・7	N・56°・W	80	73	67	46	78	陥穴状土坑Ⅱb類
S K 33	6E21・6F1	N・47°・W	89	70	78	55	80	陥穴状土坑Ⅰb類
S K 34	8H7・12	N・68°・E	93	86	56.5	55.5	90	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 35	7H5	N・41°・W	73	57	43	34	84	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 36	5E9・10・14・15	N・25°・W	124.5	81	78	43	77	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 37	5G9・10	N・22°・E	74.5	73.5	50	48	66.5	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 38	4F20・5F16	N・62°・E	195	32	147	6	84	陥穴状土坑Ⅲd類
S K 39	8H11・12・16・17	N・42°・W	115	79	39	35.5	81.5	焼土あり
Pit 20	9J17	N・20°・W	33	31	16	14	37	
Pit 23	4H10・15	N・20°・W	36	33	17	14	33	燒土含む

5 まとめ

第4表 萩清水遺跡石器観察表

番号	形 態	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考
1	砥石	S I 1	17.0	14.8	9.3	2,790	砂岩(中粒)	
2	砥石破損品	S I 1 (5T)	22.65	13.0	8.5	2,980	砂岩(粗粒)	
3	砥石	S I 1	5.4	7.05	4.0	143.8	砂岩(粗粒)	
4	砥石未製品	S I 1 (5T)	5.9	8.7	2.6	148.2	砂岩(細粒)	
5	砥石	S I 1	17.4	11.35	5.0	500	砂岩(粗粒)	
6	擦切石器	S I 1 (5T)	6.45	7.5	4.6	192.9	砂岩(極粗粒)	
7	擦切石器	S I 1 (5T)	3.05	4.4	1.3	17.3	砂岩(極粗粒)	
8	擦切石器	S I 1	7.2	9.7	2.7	158.2	砂岩(粗粒)	
9	擦切石器	S I 1	7.6	8.75	3.65	233.7	砂岩(中粒)	
10	擦切石器	S I 1 (5T)	3.9	4.45	1.5	23.0	砂岩(粗粒)	
11	擦切石器	S I 1	2.8	2.6	1.1	8.5	砂岩(微粒)	
12	石核	S I 1	9.35	7.8	5.8	425.7	砂岩(粗粒)	
13	石核	S I 1	11.5	7.4	7.9	581.9	砂岩(微粒)	
14	石錐	S I 1	2.15	2.0	0.8	3.4	チャート	
15	不定形石器	S I 1	8.4	3.9	1.65	46.0	安山岩	B 2 類
16	不定形石器	S I 1	1.9	2.45	0.5	3.2	無斑晶質安山岩	B 1 類
17	不定形石器	S I 1	2.7	4.9	0.9	9.0	無斑晶質安山岩	E 2 類
18	不定形石器	S I 1	5.2	3.6	1.0	20.1	無斑晶質安山岩	H 類
19	剥片	S I 1 (5T)	2.7	2.7	0.7	6.0	無斑晶質安山岩	
20	剥片	S I 1	2.8	4.7	0.9	10.9	無斑晶質安山岩	
21	剥片	S I 1	5.4	7.5	2.2	82.7	砂岩(極粗粒)	
22	剥片	S I 1	3.2	3.65	0.75	10.0	砂岩(中粒)	
23	剥片	S I 1	3.85	5.45	2.65	43.7	砂岩(中粒)	
24	剥片	S I 1	4.05	3.1	0.75	6.8	砂岩(微粒)	
25	磨石類	S I 1	13.7	8.6	5.5	896.7	安山岩	C 類
26	石匙	SK 1	4.6	4.5	1.0	16.0	無斑晶質安山岩	
27	砥石	SK 1 (4T)	3.3	3.75	0.8	11.9	凝灰岩	
28	磨石類	SK 13-5F	10.15	5.9	0.7	165.6	粘板岩	E 類
29	不定形石器	SK 30-5H	2.9	6.7	1.2	20.8	無斑晶質安山岩	J 類
30	石鎌	6F	3.35	2.15	0.45	2.0	無斑晶質安山岩	
31	圓状石器	(3T)	9.0	4.4	2.3	88.3	凝灰岩	
32	石匙	6H	4.1	4.15	0.7	9.4	珪質頁岩	
33	両面調整石器破損品	7H	2.05	2.6	0.8	3.6	チャート	
34	不定形石器	(2+3T)	2.3	4.1	0.5	5.5	無斑晶質安山岩	K 類
35	不定形石器	表採	3.4	5.4	1.3	18.4	無斑晶質安山岩	D 3 類
36	剥片	6H	4.65	3.7	0.8	18.1	無斑晶質安山岩	
37	磨石類	(3T)	13.2	6.05	3.65	867.5	安山岩	A 類
38	磨石類	(4T)	10.35	9.25	4.7	562.9	安山岩	C 類

第5表 萩清水遺跡 石器組成表

出土位置	形態	石材										小計		
		砂岩					無 機 質 安 山 岩	真 岩	チ セ ト	凝 灰 岩	安 山 岩	粘 板 岩		
		極粗	粗	中	細	微								
S I 1	砸石		3	1	1								5	
	擦切石器	2	2	1		1							6	
	石核		1			1							2	
	破碎砾		1	1		1							3	
	石錐							1					1	
	不定形石器						3				1		4	
	剥片	2		3		1	7	1					14	
	磨石類										1		1	
	小計	4	7	6	1	4	10	1	1		2		36	
S K 1	石匙						1						1	
	剥片									1			1	
	砸石(古代?)									1			1	
	小計						1			2			3	
S K 13	剥片		1										1	
	磨石類										1		1	
	小計		1								1		2	
S K 30	不定形石器						1						1	
	小計						1						1	
包含層	石鏟						1						1	
	鏟狀石器									1			1	
	石匙							1					1	
	両面調整石器破損品								1				1	
	不定形石器						2						2	
	剥片			1		5				1	2		9	
	磨石類										2		2	
	転石											2	2	
	小計			1		8	1	1	2	4		2	19	
総計		4	8	6	2	4	20	2	2	4	6	1	2	61

第IV章 三本木新田B遺跡

1. 調査の概要

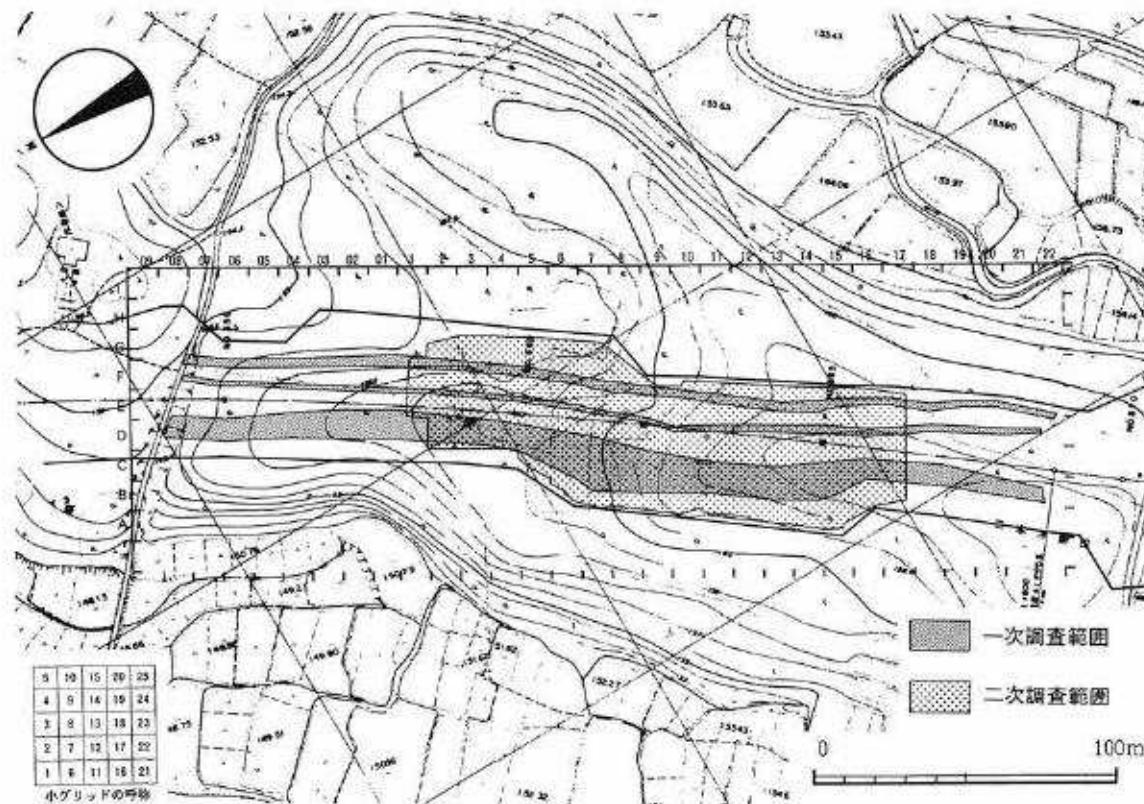
A. グリッドの設定 (第11図)

グリッドはSTA No.362+00 (X=111160.6692, Y=-24029.6921) とSTA No.365+00 (X=111112.6071, Y=-24065.6077) を結んだ直線をX軸、これに直交する線をY軸とし、これを基に方眼を組んだ。X軸は真北に対して約37° 東偏する。大グリッドは10m方眼とし、南北方向を北から1~20、東西方向を西からA~Gに分けて、「1 A」などのように組み合わせて呼称した。小グリッドは大グリッドを 2×2 m方眼に分けて各大グリッドの北西隅を起点、南東隅を終点として、1~25の番号を付し、「1 A 2」のように大グリッドと組み合わせて呼称した。

B. 記録の方法

遺物 遺物の取り上げは遺構出土のものは遺構単位であるが、包含層出土のものは大グリッド単位で行った。

遺構 調査範囲図・遺構平面図は平板測量で作図した。



第11図 三本木新田B遺跡 グリッド設定図

2. 基本層序 (第12図)

三本木新田B遺跡の調査範囲は南西から北東にかけて下る斜面で、標高は約155～162mである。土層堆積状況は層厚に幅があるほかは一様で、以下のとおりである。

I層：黒褐色土。現表土である。層厚10～30cm。

II層：黒褐色土でI層よりやや固くしまりが良い。層厚10～30cm。

III層：黒褐色土。小礫が多く含まれる。層厚20～60cm。

IV層：褐色土。V層への漸移層で場所により拳大～人頭大の礫が含まれる。層厚10～30cm。

V層：明褐色土のロームである。

遺物包含層はII～IV層、遺構確認面はIV層あるいはV層上面である。基本層序の確認は昭和61年度の一次調査時に行ったが、一次調査終了後の埋め戻しに際してII～IV層の土を誤って広範囲にわたり攪乱してしまった。そのため、昭和62年度の二次調査では遺物の出土位置に関する充分な情報を得ることができなかった。



第12図
三本木新田B
遺跡基本層序

3. 遺構

三本木新田B遺跡では縄文時代の竪穴住居2基（3基？）、陥穴状土坑1基、土坑10基が検出された。遺構は北東～南東斜面の標高158.5～159.5mのところに分布する。グリッドでいえば8～9・C～Eのおよそ30m四方にまとまっているが、S I 7が少し外れた13Eにある。SK 6は一次調査時にSTA351付近で単独で検出された。このほか、一次調査時に9D10付近で検出されたSD3があるが、二次調査時に攪乱と判断された（第13図）。

A. 竪穴住居（図版12・13・38）

S I 7 13Eで検出されたが、南東隅は調査範囲外だったので調査できなかった。

後に示すような床面施設のあり方からS I 7を3基の住居跡に分離した。分離した3基の住居跡を北からS I 7a・S I 7b・S I 7cと呼称する。なお、「S I 7」はS I 7a～cの総称である。

S I 7は長軸約11m、短軸約6.5mで、長軸方向はN-12°-Eである。

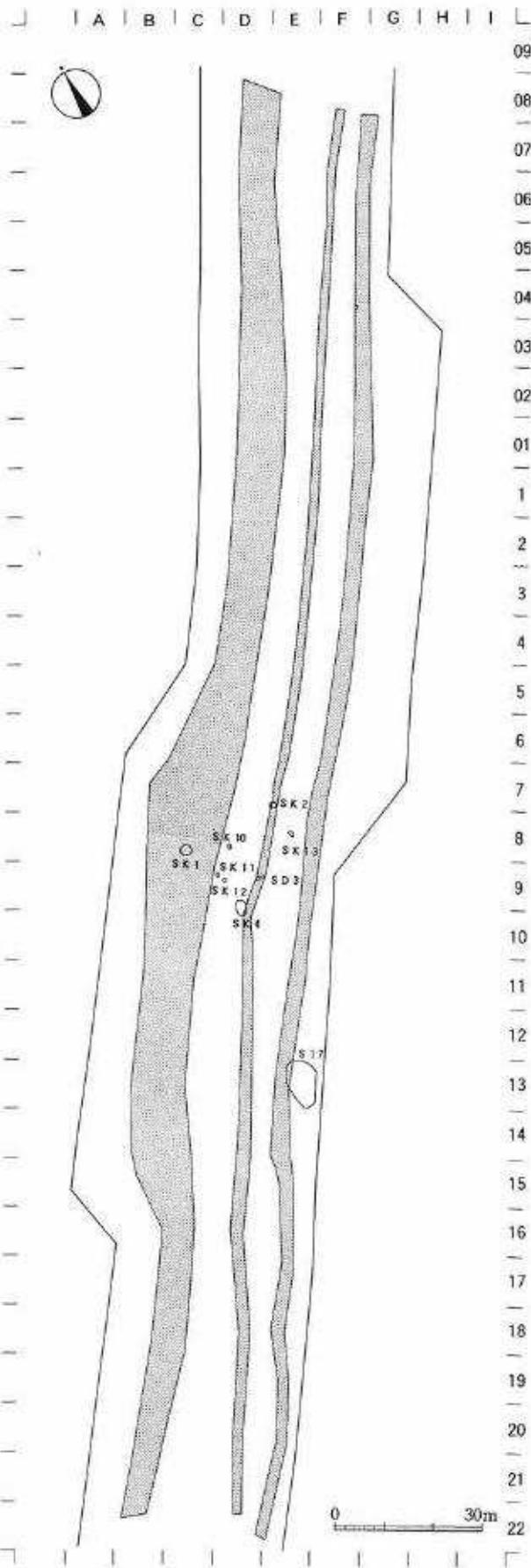
S I 7の床面は張り床・敲き締め・焼き締めなどは行われておらず、凹凸が認められた。北壁・西壁・南壁には周溝がめぐるが、西壁の周溝は壁面中間付近でいったん途切れる。周溝の底面は平滑ではなく、凹凸が激しい。床面からの深さは最大で15cmである。炉は地床炉で、S I 7の中央部から若干北寄りのところが直径80cm・深さ10cmの皿状に掘り窪められており、中から焼土と焼礫2点が検出された。このほかに、P 10の西側に約30cmの範囲で焼土が検出されたが、炉として使用されていた形跡はない。

柱穴と推定されるピットはP 1～11である。平面形は円形のもの（P 1～6・9・10）と隅丸方形のもの（P 7・8・11）がある。大きさは円形のものが直径約40～70cm、隅丸方形のものが長軸長約55～80cmでややばらつきがある。深さは25～50cmである。

西壁の周溝がP 8のところで途切れていること、炉を中心とP 1～8の柱穴がめぐるところから、この範囲を1基の住居跡と捉えS I 7 aとする。この場合、S I 7 aは一边約7mのほぼ正方形の竪穴住居となる。柱穴の配列はP 1～8をひとまとまりと考え、炉を中心とした円形の配列、あるいはP 2とP 7を結んだ線を主軸にP 1-P 3、P 4-P 5、P 6-P 8の3本の横軸が交わる配列が考えられる。

残るP 9～10はS I 7 aを南側へ拡張した住居跡S I 7 bのものと推定される。拡張と考えた理由は、西壁の周溝がS I 7 aの西壁の延長線上にのこと、P 11がS I 7 aの主軸と推定したP 2-P 7のほぼ延長線上にのり、またその場合P 9とP 10を結んだ線はP 1-P 3などの線と同様に主軸に交わる形をとることなどである。炉はS I 7 aのものを使用していたのだろう。なお、拡張に際してS I 7 aの南壁周溝は掘り飛ばされたものと考えられる。S I 7 bはS I 7 aを合わせた大きさで、長軸10.24m、短軸6.48mの隅丸長方形の竪穴住居だったと推定される。S I 7 bの南壁外側から南へ向けて伸びる住居の周溝らしきものとピットが検出されたが、大部分が調査範囲外であり詳細は不明である。一応住居跡と考え、S I 7 cとした。切り合い関係から、S I 7 cの構築時期はS I 7 bに先行すると判断できる。

遺物は、床面から出土したものに縄文土器(図版15)B群1類a(1～3・8)・B群1類b(4～7・9～23)・5類(29～68・76)・B群2類(24～26)・B群3類(70～73)・A類2群(69)・C群2類(74・75)・F群(77・78)・G群(79)と石器があり、石器(図版19・20)には不定形石器G類(4)、磨石類C類(11)・D類(12)・F類(14)、筋砥石15がある。出土位置は壁際や周溝内に偏る。とくに縄文土器54



第13図 三本木新田B遺跡 遺構配置図(一次調査)

～56はS I 7 aの南東隅のS I 7 bとの境付近からまとまって出土した。覆土から出土した縄文土器(図版15～17)はA群、B群1・2・3類、C群2類、E群3類、F群のものがある。石器(図版19)は石匙1点(3)、両極石器1点(5)、剥片類5点(7 b)、石核1点(7 a)、磨石類3点(9・10・14)、磨製石器1点(6)がある。

S I 7 aとS I 7 bの床面出土土器は有尾式期のものに限定されることから、住居の構築・拡張ともこの時期に行われたと考えられる。また、周溝や柱穴の方向が拡張前後ではほぼ共通することなどから、S I 7 aからS I 7 bへの移行は連続するものだったと推定される。

なお、S I 7 b内にあるSK14がS I 7 bの付帯施設なのか後から掘り込んだものなののかは、土層観察で明らかにすることはできなかった。S I 7 a内のSK15は検出面がS I 7 と同一であることから、S I 7より後の掘り込みである可能性が高い。

B. 陷穴状土坑(図版14・38)

SK6 S T A351付近で単独で検出された。確認面はⅢ層である。平面形は隅丸長方形で断面形は漏斗形をしている。底面にピットが1基ある。覆土の堆積状況は底部付近が水平堆積、中間部が壁の崩落とみられる不規則な堆積、上部が水平堆積をしている。1基のみの検出であるため、配列などは不明である。

C. 土坑(図版13・14・38・39)

土坑は分布に規則性がなく遺物量も少ないため、個々の性格や相互の関係は不明である。

SK1 8 C17付近に位置する。直径2.1m、深さ7cmの皿状の土坑で、底面中央部に深さ26cmの円形のピットが1基ある。底面北東部からは縄文土器が多数出土した。出土土器(図版16)はB群1類a(81)・2類(84・85)・4類(80)・5類(82・83・86～88)に分類される。

SK2 7 E21付近に位置する。平面形は隅丸長方形で長軸長140cm、短軸長117cm、深さ34cmである。底面に深さ8cmの小ピットが1基ある。

SK4 9 D23付近に位置する。一辺約3.1mの隅丸方形の皿状の土坑で、深さは20cmである。南壁面中央立ち上がり部分に1基、底面に2基のピットがある。底面中央のピットは浅く、深さ約5cmである。覆土から縄文土器と剥片3点・磨石類1点(図版20-16～19)が出土した。縄文土器(図版16)はB群4類(89)・5類(90・91)、C群3類(92)に分類される。

SK5 10 D23に位置する。平面形は楕円形で長軸長50cm、深さ48cmである。B群5類土器(図版16-93)が出土した。

SK10 8 D18付近に位置する。平面形は楕円形で長軸長115cm、深さ15cmである。

SK11 9 C10付近に位置する。平面形は不整楕円形で長軸長86cm、深さ15cmである。

SK12 9 D 6付近に位置する。平面形は不整楕円形で長軸長110cm、深さ41cmである。掘り形は皿状で壁面の立ち上がりは急である。底面西側に深さ約14cmの小ピットがある。

SK13 8 E 8付近に位置する。南東部分を大きく攪乱されているが、平面形は楕円形だったと推定される。

SK14 S I 7 bの中、13E25付近に位置する。S I 7 bとの切り合い関係を土層で確認することが困難

4 遺 物

だったため、S I 7 bより新しいものかS I 7 bの付帯施設なのか断定しかねる。平面形は円形で直径約170cm、深さ22cmである。遺物はB群5類の縄文土器（図版16-97）と剥片（図版19-8）が出土した。
SK15 S I 7 aの中、13E 4付近に位置する。SK14と同様にS I 7 aとの関係は不明だが、検出面がS I 7 と同一面であったこと、S I 7 - P 1を切っているとみられることからS I 7 a埋没後に掘り込まれた可能性が高い。平面形は橢円形で長軸長は205cm、掘り方は皿状で深さ24cmである。B群5類土器（図版16-96）が出土した。

4. 遺 物

A. 土 器（図版15~18・40~43）

(1) 概 略

本遺跡からは平箱で17箱余りの土器が出土している。出土土器は、縄文時代早期から晩期までとほぼ各時期のものが認められるが、その時期的な内訳は縄文時代前期中葉が圧倒的に多く、次いで同早期末葉、同中期末葉の順である。出土は住居跡からが突出しており、グリッドでは10Dからの出土がやや目立つ程度である。胎土は全体には凝灰岩を含むものが目立ち、縄文時代早期末葉から同前期中葉にかけては当然のことながら纖維を含むものが多い。焼成は、全体的に見て良好なものがやや多い。器壁の厚さは6~8mm位のものが最も多く、中でも7mm位のものが目立った。器壁への炭化物の付着はあまり多くはなく、付着しているものの大半はスス状炭化物であった。

(2) 分 類

分類は、以下のように時期ごとに大別し、ある程度まとまりのある時期をA群からE群、まとまりのないものを一括してF群、時期不明のものをG群とした。そして、さらに群内を文様を中心に類別した。なお、出土した土器はB群3類を省けばほとんどが深鉢である。

A群 縄文時代早期末葉の土器

1類 口縁部を中心に絡条体圧痕等で文様が施文されているもの。

2類 器面の内外面に条痕文や縄文または撚糸文が施文されるもの。1類の胴部破片も含まれる。

B群 縄文時代前期中葉の土器

1類 口縁部～頸部にかけて半截竹箇を施文具とした爪形で文様が施文されているもの。爪形が点列状である「a」と爪形が連続する「b」に2分される。有尾式土器の範疇に含まれる土器である。

2類 口縁部～頸部にかけて平行沈線で文様が描かれているもの。これも有尾式土器の範疇に含まれる土器である。

3類 口縁部だけでなく頸部～胴部にもコンパス文や平行沈線文などが密に施文されている鉢で焼成は良好である。根小屋式土器（寺崎1996）と考えたい。

4類 コンパス文が描かれているもの。内面の整形が丁寧で、焼成も良好なものが目立つ。北陸地方の朝日C式土器の影響を受けていると考えられる。

5類 全面に縄文が施文されているもの。1・2類の胴部破片も含まれる。

6類 上記の分類に当てはまらないもの。

7類 当期に比定される底部。

C群 縄文時代前期末～中期初頭の土器

- 1類 結節状浮線で施文されているもの。
- 2類 半截竹管により平行沈線や爪形、ヘラ状工具により単沈線などが施文されているもの。
- 3類 結び目縄文が施文されているもの。

D群 縄文時代中期末葉の土器

- 1類 縄文地上に微隆帯で区画を施し、区画外の縄文を磨消したもの。
- 2類 沈線で区画し、区画内に縄文を充填したもの。
- 3類 胴部に条線を施文したもの。
- 4類 縄文のみを施文したもの。

E群 縄文時代後期後葉の土器

- 1類 磨消縄文で施文されているもの。
- 2類 単沈線で施文されているもの。
- 3類 縄文のみが施文されているもの。
- 4類 無文のもの。

F群 その他の時期の土器

G群 時期不明の土器

(3) 遺構出土の土器 (図版15、図版16-67~107)

a. S I 7 a・b (1~79)

1~3・8はB群1類aに分類される。1・8は点列状の爪形が巡り、その間は横位平行沈線で満たされている。両者とも胎土には纖維は含まれていない。1はS I 7 aの床面より出土している。2はLRの縄文地上に爪形でユニオンジャック風の文様を施文している。3は無文地上に爪形が施される口縁部～胴部上半の破片で、胴部は縄文が施文されている。4~7・9~23はB群1類bに分類される。4~7は口縁に数条の爪形が巡り、その下位には縄文が施文されている。7の原体はRLである。5・6の胎土には纖維は含まれていない。4・6の外面にはスス状の炭化物の付着が認められる。9~13は頸部～胴部上半の破片である。胴部には縄文が施文され、9の原体はLR、10・12・13は羽状縄文である。14~19は無文地の口縁部に数条の爪形が巡り、それらの爪形間に「D」字状の点列爪形が施されている。19は覆土上層から出土している。焼成は良好なものが多く、器面整形も丁寧である。17の外面にはスス状の炭化物の付着が認められる。20・21は縄文地上に爪形や平行沈線で文様が描かれている。22・23は無文地上に数条の細かい爪形が巡る。両者とも器壁が薄く、23の胎土には纖維が含まれず、外表面の整形も丁寧である。24~26はB群2類に分類される。25は波状口縁で、原体はRLである。26の原体はLRである。27・28・70~73はB群3類に分類される。焼成は良好である。72はS I 7 aの床面から出土している。73は28と同一個体である。29~68・76はB群5類に分類される。29~53・63・66は羽状縄文、54~62・64・65・67・68・76は斜縄文が施文されている。43・47・48・52・53はS I 7 aの床面、50・76はS I 7 bの床面、49はP8上面、29はS I 7 b上層、51・64・66は覆土上層から出土している。54・56・60・65・67・68の原体はRL、55・57・58・66の原体はLRである。29・63・76は胎土中に纖維を含んでいない。50・51の外面と65の内面にスス状炭化物、68の内面にタール状炭化物の付着が認められる。31と32、37と38は同一個体である。61は土器片利用の土製品、67は口縁に細隆帯が巡る。76は、口縁部分が無文帶で胎土中に纖維を

含まず、焼成良好、器壁薄く、内面の整形も丁寧である。時期を後期後葉とするか前期中葉とするか迷つたが、胎土の質感や出土地点が住居跡の床面であることから後者とした。

69はA群2類に分類される。外面に縄文、内面に条痕文が施文されている。胎土中には繊維の他に凝灰岩や石英を含む。74・75はC群2類に分類される。同一個体であり、覆土上層から出土している。77・78はF群に分類される。77は諸磯a式土器で、縄文地上に円形刺突と3本沈線で肋骨文が施文されている。内面の整形は丁寧である。78は晚期後葉に比定され、器面に横位あるいは斜位の条痕文が施文されている。内面にスス状炭化物の付着が認められる。79はG群に分類される。焼成良好で、底径9.2cmを測る上げ底気味の底部である。覆土上層より出土している。

b. SK1 (80~88)

80はB群4類、81はB群1類aに分類される。81の原体はRLである。82・83・86~88はB群5類に分類される。82・83は羽状縄文、86~88は斜縄文が施文されている。87・88は同一個体である。84・85はB群2類に分類される。沈線内に細かい押し引き状の刺突が加えられている。84・85は同一個体である。

c. SK4 (89~92)

89はB群4類に分類される。口縁部にコンパス文が密に施文され、胴部文様との境界には1条の点列状の爪形が巡り、胴部には原体LRの縄文が施文されている。90・91はB群5類に分類される。縄文の原体は共にLRである。92はC群3類に分類される。縦位の結び目縄文が施文されている。

d. SK5 (93)

B群5類に分類される。原体LRの縄文が施文されている。器壁は11mmと厚い。

e. SK14 (97)

B群5類に分類される。胎土中には凝灰岩や繊維の他に礫を含む。

f. SK15 (94~96)

94・95はB群1類bに分類され、同一個体の可能性がある。94は頸部～胴部上半の破片である。胴部には菱形様になる羽状縄文が施文されている。95は、無文地の口縁部に3条の爪形が巡り、爪形間に「D」字状の点列爪形が施されている。胴部には縄文が施文されている。焼成良好で内面の整形も丁寧である。外面にスス状炭化物の付着が認められる。96はB群5類に分類される。原体RLの縄文が施文されている。焼成は良好で、器壁も4mmと薄い。

g. SD3 (98・99)

98・99はF群に分類され、共に晚期後葉に比定される。98は口縁に2条の沈線が巡る鉢形土器である。99は無文で、外面にスス状炭化物の付着が認められる。内外面の整形は丁寧である。

h. 一括土器 (100~107)

12Aから次のような土器が一括して出土した。100はB群4類に分類される。焼成良好で、内面の整形も丁寧である。101~103はB群3類に分類される。共に同一個体で、焼成は良好である。104~107はB群5類に分類される。104・106は羽状縄文、105・107は斜縄文であり、105・107の原体はRLである。

(4) 遺構外出土の土器 (図版16~108~129、図版17、図版18)

A群 (108~130) 108~117は1類に分類される。108・110は5C、109・112は6B、111は13D、113は12B、115は10D、116・117は10Eから出土している。108・113の地文は撲糸、114の地文は縄文である。116・117は同一個体である。

118～130は2類に分類される。118～122は10E、123・124・126・129は5C、127・128は7B、130は6Bから出土している。125は表採である。124の内面にはスス状炭化物の付着が認められる。125は内面に撲糸文、127・129は外面撲糸文・内面条痕文、124・126は外面撲糸文、130は外面縄文・内面条痕文が施文されている。118～120は同一個体である。

B群（131～195） 131～140は1類bに分類される。133は16E、134は12B、135は12E、136は16O、137は12C、138は13A、139は14C、140は8Dから出土している。131・132は表採である。138の原体はLRである。139の胎土には纖維が含まれず、135・137の内外面の整形は丁寧、焼成はほとんどが良好である。

141～143は2類に分類される。141は10D、142は12E、143は13Aから出土している。141は波状口縁の深鉢で胎土に纖維が含まれず、焼成も良好である。142は内面の整形が丁寧で、外面にはスス状炭化物の付着が認められる。143には「ハ」の字状の刺突が認められる。145・146は3類に分類される。146は13Eから出土し、145は表採である。両者とも焼成良好で、145の外面にはスス状炭化物の付着が認められる。144は4類に分類される。内面の整形は丁寧である。

147～175・177～179・181～192は5類に分類される。147は7B、148・176は12B、149～153は2E、154は13D、155・177は9B、156・181は16C、157・164・165・188は14E、158・183は9D、159は14C、160・186は10D、162・163・189は6E、166～169は16D、170・187は12D、167・171～174は14D、175は11B、178～180は8B、182は13C、184は12C、185・195は5C、190は11E、191・192は12Eから出土している。161は表採である。147～160・174・181・182・187・191・192は羽状縄文、これら以外は斜縄文が施文されている。151・161・163・166・170・173・175・184・188・189の原体はRL、162・164・167・169・171・172・186・190の原体はLRである。ほとんどの胎土に纖維を含むが、162には含まれていない。157・186の外面にはスス状炭化物、150の内面にはスス状炭化物・外面にはオコゲ状炭化物、152の内面にはタール状炭化物・外面にはスス状炭化物、151・153・159・168の内面にはオコゲ状炭化物、155・161の外面にはオコゲ状炭化物の付着が認められる。191・192の内面の整形は丁寧である。191には補修孔らしき孔が穿かれている。

176・180は6類に分類される。176は12B、180は8Bから出土している。176は縄文地上に5条の櫛歯状沈線が斜行する。180は外面に条痕が施されているもので、胎土等の様子からB群とした。193～195は7類に分類される。193の原体はRL、焼成良好で器壁も4mmと薄い。194の原体はLRで底径は10cmを測る。195も底径10cm余りで、形状は上げ底氣味である。

C群（196～205） 196～198は1類に分類される。196は13D、197・198は9Dから出土している。197・198は同一個体である。199・200・205は2類に分類される。199は10D、200は14E、205は7Bから出土している。199は波状口縁である。201～204は3類に分類される。201は11E、202～204は10Dから出土している。202～204は同一個体で、原体はRL、底径は15.2cmを測る。

D群（206～218） 206～210は2類に分類される。いずれも9Dから出土しており、同一個体である。充填縄文の原体はLRである。加曾利E IV式土器と考えられる。218は1類に分類される。9Dから出土している。外面にスス状炭化物の付着が認められる。206～210と同様に加曾利E IV式土器またはそれに並行する土器と考えられる。211・212・216・217は3類に分類される。211は16E、212は16D、216は15E、217は17Dから出土している。縦位の波状条線や直線状の条線が施文されている。211の内面と217は外面にはオコゲ状炭化物の付着が認められる。211・212は同一個体の可能性がある。213～215は4類に分類さ

れる。213は10E、214・215は9Dから出土している。214・215は同一個体で、原体はLRである。

E群 (219~228) 221・225は1類に分類される。221は13Dから出土し、225は表採である。221は、やや膨らみのある胴部をもち、そこから口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部には4単位の突起が付けられ、口径は28.5cmと推定される。口縁には2条の沈線が巡り、その沈線間およびその上位には立て刻み状の刺突が2条にわたって加えられている。それ以下の口縁部は1条の沈線によって上下に2分され、上位は羽状縄文が施文されているが下位は羽状縄文が磨消されて無文帯となっている。頸部には3条の沈線が巡り、その沈線間には口縁と同様の施文技法による刺突が2条加えられている。胴部も1条の沈線で上下に2分されるが、上下とも縄文地上に5本1単位の沈線が羽状に施されている。内外面にスス状炭化物の付着が認められる。225は原体RLの縄文が施文され、外面にはスス状炭化物の付着が認められる。219・220・223・224は2類に分類される。219は6D、220は9Dからの出土である。223・224は表採である。219は波状口縁である。瘤が添付される可能性が高い。220は口径24cmを測る浅鉢である。口縁部に三叉状の文様が描かれ、それ以外は無文である。内外面の整形は丁寧である。223は断面形から221に類似する器形を呈するものと推定できる。224はその傾きから壺と考えられる。226は3類に分類され、表採である。頸部付近が無文帯となり、以下には縄文が施文されている。断面形からして223と同一個体である可能性も考えられる。222・227・228は4類に分類される。222は7Bから出土し、227・228は表採である。222は内外面の整形が丁寧であり、227は赤彩されている。

F群 (229~243) 229は13Eから出土し、横位の山形が施されている押型文土器である。232は9B、233は18D、235は5C、234は一次調査の3トレンチから出土している。236は表採、237は出土地点不明である。^(註) 原体はいずれも0段多条の燃糸の可能性がある。前期初頭に比定されるものと考えられる。230・231は10Bから出土している。原体は異なるが、232~237と同時期と考えられる。238は17D、239~243は6Bから出土している。238は原体RLの縄文地上に半截竹管で文様が描かれている。中期前葉に比定されるであろう。239~243は、同一個体である。キャリパー形を呈し、器面全体に縄文のみが施文されている。器形などから中期に比定される可能性が高い。内外面にスス状炭化物の付着が認められる。

G群 (244~255) 244・247・250・254は10D、245は6E、246・249は13D、251・252は15E、253・255は17Dから出土している。248は表採である。244は無文地上に半截竹管を用いた平行沈線で文様が施文されている。胎土中に雲母が含まれている。施文技法や胎土および同一グリッドから中期初頭の土器が出土していることから中期初頭に比定される可能性がある。245は口縁部下位と思われる箇所が無文帯となり、以下には原体Rの燃糸文が横方向に施文されている。246は原体Lの燃糸文が施文されている。248は平口縁の深鉢で、口縁は縄文がなぞられて無文帯となり、以下には原体LRの縄文が施文されている。焼成は良好である。247は原体RLの縄文が施文されている。250は縄文が施文され、器壁は12mmと厚い。254は250と同一個体である。無文で底径16cmを測り、焼成は良好である。底部は外側にやや突出し、胴部との境界は屈曲気味である。249は原体RLの縄文が施文され、内面にスス状炭化物の付着が認められる。251・252は無文で、焼成は良好、整形も丁寧である。253は、体部の立ち上がる角度から見て底径10cmを測る浅鉢と考えられる。焼成は良好、内外面の整形も丁寧で器壁も4mmと薄い。255は底径13cmを測る底部破片で、底部には継代痕らしき痕跡が認められる。

(註) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 谷藤保彦・関根慎二両氏のご教示による。

B. 石 器 (図版19~24・44~47)

三本木新田B遺跡出土の石器総数は112点である。そのうち24点は遺構からの出土で、残りは包含層あるいは攪乱からの出土である。

主な石器には磨石類29点、砥石6点、石皿3点、剥片43点、両極石器10点、不定形石器10点、石鏃4点、石匙2点などがある。

石器の分類・記載の方法は萩清水遺跡と同様であるが、萩清水遺跡に無い形態の石器について以下のように分類基準を示す。

両極石器 両極に打痕・剥離痕のあるものを両極石器とした。2個1対の極をもつものと4個2対の極をもつものがある。

石皿 中央を凹めた皿形の石器 (鈴木1991)

(1) 遺構出土の石器 (1~19)

a. S I 7 (1~15)

S I 7 からは石鏃2点、石匙1点、不定形石器1点、両極石器1点、石核1点、剥片6点、磨石類6点、磨製石器1点、筋砥石1点などが出土した。

石鏃 (1・2) 1は凹基無茎鏃で裏面に素材の主要剥離面が残っている。2は表裏面に素材の剥離面が広く残っていることから、石鏃の未製品と推定される。

石匙 (3) 横形の石匙で打瘤の厚みを除去しながらつまみを作り出している。つまみ上端には素材の剥片の打面が残されている。打面は礫打面である。

不定形石器 (4) 踵面を打面とする板状の剥片を素材としている。左側面は踵面である。右側縁の裏面に剥離を施し刃部が作り出されている。

両極石器 (5) 4極2対の両極石器である。

磨製石器 (6) 表裏面に多方向からの研磨痕が認められる。形態から磨製石斧の刃部と推定される。

石核 (7・7a・7b) 打面部と裏面の一部に礫面が残る石核である。剥片1点(7b)が接合している(7)。7bを剥離する前に下端から両面に比較的浅い剥離が施されている。剥離の順序は表面→裏面の順である。7b表面左側縁の剥離痕はこのときのものである。7bを剥離する際の衝撃で、表面右半分が同時に剝落している。この剥離痕を切る剥離痕が表面にあることから、その後も下端部からの剥離が続けられていたことがわかる。

剥片 (8) 8はS I 7の中のSK14から出土した。複剥離打面の剥片である。なお、石器製作に伴うような調整剥片は出土しなかった。

磨石類 (9~14) C類3点(9~11)、D類1点(12)、E類1点(13)、F類1点(14)がある。13はS I 7内のP 9からの出土である。9は両側縁に3対(4対?)の刻み目が入っている。刻み目の断面形は浅いV字状である。

筋砥石 (15) 表面に非常に浅い数条の溝状砥面が長軸に並行して走っている。右側面は割れ面であるが、稜線が摩耗していることから破損後も使用されていたことがわかる。

b. SK 4 (16~19)

SK 4 からは剥片 3 点と磨石類 1 点が出土した。

磨石類 (16) G 類で、右側面に敲打痕がある。

剥片 (17~19) 17 の打面は礫打面で、背面は対向方向の剥離痕に覆われている。18 は打点が剥離時の衝撃で失われている。19 の背面は多方向からの剥離痕に覆われている。

(2) 遺構外出土の石器 (20~72)

包含層出土の石器には石鎌、石匙、不定形石器、両極石器、剥片類、磨石類、砥石類、石皿などがある。石器組成では磨石類と両極石器が多いのが特徴である。

石鎌 (20・21) 20 は凹基無茎石鎌である。21 は左脚を欠くが、凹基無茎石鎌あるいは平基無茎石鎌と推定される。

石匙 (22) 薄手の横形石匙であるが、平面形は倒卵形をしており、3 のような細身のものとは異なる。素材の剥片は打面側が右側縁になるように置かれている。打瘤は折断などの方法で除去したものと推定される。

不定形石器 (23~31) 不定形石器は 9 点あり、内訳は B 類 3 点 (23~25)、G 類 2 点 (26・27)、J 類 4 点 (28~31) である。

23 は礫面を打面とする剥片を素材としている。背面の両側縁に連続する剥離が施され刃部が作出されている。25 は横長剥片を素材とする。末端部表裏面に階段状の小剥離が施されている。24 は背面が礫面に覆われた剥片を素材としている。腹面側末端部に連続する剥離が施され、弧状の刃部が作出されている。

26 は礫面を打面とする板状の大形剥片を素材としている。右側面は礫面である。背面左側縁に連続する剥離が施され、刃部が作出されている。末端部にも刃こぼれ状の小剥離がある。27 は背面左側縁に刃部が作り出されており、右側縁には使用痕とみられる微細な剥離痕がある。

30 は剥片の右側縁腹面側に微細な刃こぼれ状の剥離が認められる。上半部を欠損している。31 は背面右側縁上半に微細な剥離痕がある。

両極石器 (32~40) 2 極 1 対のもの (32~39) と 4 極 2 対のもの (40) がある。大きさはまちまちで、36 のような 2.6cm のものから 32 のような 6.9cm のものまである。

剥片 (41~44) 剥片は 34 点出土した。18 点が無斑晶質安山岩であるが、1 か所から集中して出土したわけではない。石材は無斑晶質安山岩のほかに砂岩 (41・42)、凝灰岩 (43・44)、滑石? などがある。

磨製石器未製品 (45・48) 45 は薄手の楕円礫で表裏に擦痕がある。一応未製品に分類したが、別に用途をもつものかもしれない。48 は磨製石斧の未製品あるいは磨製石斧破損品の転用品と推定される。刃部は片刃である。上部も刃部同様研磨され、縦断面形は扁平な紡錘形を呈する。

磨石類 (46・47・49~67) 磨石類は 22 点が出土し、内訳は A 類 4 点 (46・47・49・50)、B 類 2 点 (51・52)、C 類 6 点 (53~58)、D 類 4 点 (59~62)、E 類 1 点 (63)、F 類 2 点 (64・65)、G 類 2 点 (66・67)、不明のもの 1 点である。

62 は四角錐状の礫の 5 面が機能面として用いられている。53 は柱状の礫を素材とし、稜上に磨面があることから特殊磨石に分類可能である。

石皿 (68・69) 69 は風化が激しいため不明瞭となっているが、右側面に弧状の彫刻が認められる。68 は掃き出し口側を欠損しているが、残存部には磨面から左側面に 4 本、下縁に 2 本、右側面に 1 本の筋状の彫刻が垂下している。

砥石（70～72）70は角柱状の砂岩を素材とする大形の置砥石である。稜線は敲打されている。上下を欠損するが、下側は割口の稜線にも砥面が及んでいることから、欠損後も使用されていたことが分かる。裏面にはごく浅い円形のくぼみが複数あるが、人為的なものというよりは節理に沿って割れた痕跡とみられる。71は扁平な砂岩の両面に砥面が設けられている。表面には幅5mm、断面U字状の浅い筋状の砥面が2条ある。72は全面が敲打で整えられた後、砥石として使用されている。表面を主要な砥面とし、右側面には狭いが断面V字状に近い砥面がある。

5. まとめ

A. 遺構

三本木新田B遺跡で検出されたS I 7は出土遺物から有尾式期の住居跡と推定される。新潟県内のこの時期の住居跡の検出例は少なく、中里村千溝遺跡（佐藤ほか1994）、青海町大角地遺跡（寺村ほか1979）、堀之内町清水上遺跡（大杉1996）で確認されている程度である。県外では長野県有尾遺跡（戸沢1988）・舅屋敷遺跡（小林ほか1982）・十二ノ后遺跡（樋口ほか1986）、群馬県糸井宮前遺跡（関根1986）・分郷八崎遺跡（柿沼1986）・見立溜井遺跡（都丸ほか1985）などに例がある。

これらの遺跡の住居跡から当該期の住居形態を概観してみることにする。平面形は隅丸正方形か隅丸長方形で多くのものは周溝を有する。規模は一辺の長さ4～8m程度、掘り込みの深さは最大で60cm程度である。床面は糸井宮前遺跡では固いローム層を利用しているが、分郷八崎遺跡では客土し踏み締める、あるいは焼き締めるなどして構築されている。炉は地床炉で、浅い土坑をそのまま、または縁辺の一部に礫が据えられている。炉の位置は住居の中央にある例は少なく、どれか1辺に寄っている場合が多い。主柱穴は住居の大小にもよるが4本あるいは6本が対をなすことが多いようである。

さて、三本木新田B遺跡のS I 7についてみると、規模は拡張前のS I 7aが1辺約7mと標準的な大きさであるのに対して、拡張後のS I 7bの長軸長は約10mであり、この時期にしてはやや大形の住居といえよう。床面は張り床や焼き締めなどはされておらず、固い地山面が利用されている。周溝や炉のあり方はほかの遺跡のあり方と大きく違うものではない。以上のように、有尾式土器の分布の中心地である長野県や群馬県の住居跡とS I 7の形態を比較してみたが、S I 7とそれらの間に、大きな相違点を見出すことはできなかった。

ところで、当遺跡から出土したB群1類bの土器は次のB.(1)で述べるように、b 1類とb 2類に細分される。b 1類は在地化はしつつあるが、まだ有尾式土器の範疇で捉えられる土器、b 2類は有尾式土器と北陸の朝日C式土器の影響下に成立し在地化が進んだ土器である。S I 7の床面から出土したのはb 1類である。

S I 7の床面出土の土器がすべて在地色の薄い有尾式土器であること、住居形態が有尾式土器の分布の中心地のものと類似することなどから、この住居の構築がまだ在地化の進まない有尾式土器を保有する文化の影響下に行われたことが推定できるのではないだろうか。

B. 遺 物

(1) 土 器

当遺跡からは、早期後半・前期中葉・前期末葉～中期初頭・中期末葉・後期後葉の土器がある程度のまとまりを持って出土したが、それらの中でも前期中葉のものが圧倒的に多い。その前期中葉でB群1類bに分類した中で主体を占めているもの、具体的には4～7・14～19・131～137などについて検討を試みたい。

この土器は、器種は深鉢である。器形は、すべて破片資料であることから全体を伺い知ることは出来ないが、17や131などから推定して筒状を呈するものと考えられる。口縁形は、平口縁（4・17・135ほか）と波状口縁（19）および小突起が付されたもの（14）が認められるが、平口縁が多数を占める。口縁部は直立（7・17・131）または緩やかに外傾（4～6・135）するが、内縛気味のもの（16・133・134）もある。文様は、胴部と口縁部とに2分され、胴部には斜縄文もしくは羽状縄文が施文されているのみである。口縁部には2～3条の爪形文が密接して巡るもの（4・5・7）、2～3条の爪形文が間隔を空けて巡りその間に「D」字形ないしは三角形状の刺突が加えられるもの（15～19・134ほか）がある。それらの8割強は胎土中に纖維を含むが、約3割弱が纖維を含まないか含んでも少量である。焼成や整形は6割が良好であるが、その内訳は前者の爪形密接が約4割、後者の爪形と刺突の組み合わせが約8割で、後者の焼成や整形のよさが目立つ。器壁の厚さは平均約7mmであるが、前者の平均が約7mm、後者の平均が約6.5mmと後者がやや薄い。

以上のようにB群1類bで主体を占める土器は、4～7のように口縁部文様が爪形のみで施文されるグループと15～19といったように口縁部文様が前者と同様な爪形と「D」字形ないしは三角形状の刺突で施文され、前者よりも製作技法が繊細なグループに2分できることが明らかになった。仮に前者をb1、後者をb2としてその出自系統と編年的位置を探ってみたい。

まず出自系統であるが、b1は、口縁部に菱形文を構成しない有尾式（谷藤1997、下平・費田1997）に類似し、施文されている爪形文も有尾式土器のそれに近い。また、製作技法も当地域出土の有尾式土器に近似する。b2は、爪形文はb1と同じであるが、「D」字形ないしは三角形状の刺突は他にはほとんど類例がなく、刈羽村刈羽貝塚の最下層に当る黒土層出土の土器（八幡1958）や吉川町古町B遺跡6号穴住居跡出土の土器（泰・小林1992）および石川県小牧大杉谷内遺跡の朝日C式段階の土器（本多・山本・木下・工藤1997）にそれらしきものがわずかに認められる程度である。また、爪形文と刺突文を横位に交互施文する点（本多・山本・木下・工藤1997）や製作技法が繊細な点は、朝日C式土器と共通する。それゆえ、b2は有尾式土器と朝日C式土器の両者の影響を受けて、b1よりも在地化がより進んだものといえよう。一方、b1は在地化はしつつあるが、まだ有尾式土器の範疇で捕らえられるものである。なお、b2のような土器を有尾式土器として捉えるか否かは今後の課題である。

編年的位置については、b1・b2に施文されている爪形文が連続またはそれに近いものであることから、谷藤編年Ⅱ期の後半以降（谷藤1997）に比定されるであろう。むしろここで問題となる点は、まだ不明となっている有尾式土器と朝日C式土器の並行関係である。b2を媒体とした場合、前述した様にb2の文様や製作技法から朝日C式土器は有尾式土器の後半段階（谷藤1997）かそれ以降に並行する可能性が出てきた。この可能性は、今後の資料の蓄積を待って事実関係を把握しかつ証明していかなければならぬ問題である。その場合、妙高山麓や頸城平野といった中部高地と北陸を結ぶ地域が重要な鍵を握っているものと考えられる。これらの地域における発掘調査や整理・報告および資料紹介などといった研究活動の進展を期待したい。

(2) S I 7 の石器組成について

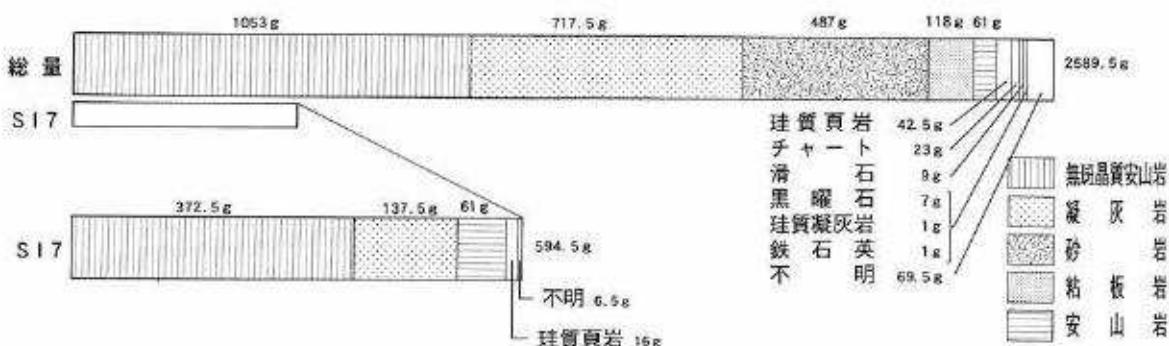
三本木新田B遺跡のS I 7は2基あるいは3基の住居跡が重複しているが、所属時期はいずれも縄文時代前期中葉の有尾式期と推定される。そのため、出土石器は有尾式期の石器組成の一端を表していると考えられる。

有尾式期の住居跡は標識遺跡の長野県有尾遺跡(戸沢1988)のほか、新潟県千溝遺跡(佐藤ほか1994)、群馬県分郷八崎遺跡(右島1986)、加茂遺跡(藤巻1984)、見立溜井遺跡(都丸ほか1985)、糸井宮前遺跡(関根1986)などで検出されている。これらの遺跡の立地はいずれも河川近くの扇状地か台地である。

上記の住居跡の石器組成と三本木新田B遺跡S I 7の石器組成を比較検討してみたい。

半数以上の住居跡で保有しているのが石匙・磨石類・不定形石器(スクレイパーを含む)である。4割程度の保有率まで下げるに打製石斧・磨製石斧・石皿・敲石が入ってくる。よって大振りではあるが有尾式期の標準的な石器組成として石匙・磨石類・不定形石器を主体に、打製石斧・磨製石斧・石皿・敲石が伴うという形を考えておきたい。また、石錘を保有しないのも特徴的である。

三本木新田B遺跡S I 7の石器組成は有尾式期の主体となる器種、石匙・磨石類・不定形石器のほか、石鏃・両極石器・剥片・石核・筋砥石・磨製石器からなる。この内ほかの有尾式期の住居跡あまり見られないものは両極石器と筋砥石である。筋砥石は非常に浅い溝状の砥面の形状から、玉造などの石器製作に伴うものとは性格が異なるものと考えられる。被加工物は木器や骨角器など比較的軟質のものであった可能性が高い。以上のように、S I 7は点数は少ないものの有尾式期としては安定した石器器種組成であったことがわかる。石材組成は第14図に示したとおり無斑晶質安山岩が卓越している。



第14図 三本木新田B遺跡の剥片石器の重量構成

遺跡名	性別	石器	打製	石核	磨石	石鏃	両極	磨斧	石鏡	石鏡	敲石	合石	その他	合計
分郷八崎3号住	群馬		3	4	5	1	1	1	1					
分郷八崎7号住	群馬		2	1	1	2	1			2				
分郷八崎8号住	群馬	2							1	1				
分郷八崎3号住	群馬	3	3	1	5	3	9	2	2	2				
糸井宮前1号住	群馬		1	4		3	1			1				
糸井宮前4号住	群馬		1	1	10	4	0				8			
糸井宮前5号住	群馬		1	3	12	4	0				1			
糸井宮前22号住	群馬	1		8		3	5							
糸井宮前23号住	群馬	3	7		1			1	1	2				
糸井宮前5号住	群馬	2	4			4		1	1	1				
糸井宮前100号住	群馬				1									
糸井宮前111号住	群馬		2	19		5	10	1	1	1	1			
糸井宮前14号住	群馬			1		3								
糸井宮前16号住	群馬	1	2	38		1	11	3	1	3	2	1		
糸井宮前135号住	群馬		1	3		1	3		4	2				
糸井宮前142号住	群馬				1	1					1			
糸井宮前142号住	群馬	2	3	1	3	2			2	2				

第6表 有尾式期の住居の石器組成

第7表 三本木新田B遺跡 遺構観察表

遺構名	位 置	長軸方向	上 端		下 端		深度 cm	備 考
			長 軸 cm	短 軸 cm	長 軸 cm	短 軸 cm		
S 17 a	13E 3~5 7~10	N・12° E	(700)	(630)	?	?	22	
S 17 b	13E 3~5 7~10 19~20 24~25 13E 6~11~16	N・12° E	(1012)	(690)	?	?	22	S 17 aを扒張?
S 17 c	13F21	-	-	-	-	-	18	S 17 bに切られる
S 17-P 1	13E 5~10	N・44° W	54	52	45	32	18.5	
S 17-P 2	13E 4	N・13° E	58	50	22	22	33	
S 17-P 3	13E 8	N・19° W	74	56	10	15	36	
S 17-P 4	13E 10	N・24° E	44	40	16	16	40	
S 17-P 5	13E 13	N・47° E	47	41	14	12	30	
S 17-P 6	13E 15	N・21° E	80	66	52	38	18.5	
S 17-P 7	13E 19~20	N・58° W	58	42	16	16	28.5	
S 17-P 8	13E 19	N・47° E	60	50	36	35	32.5	
S 17-P 9	13P16	N・67° E	80	(64)	18	18	33.5	
S 17 P 10	13E 19	N・45° W	64	53	14	14	49.1	
S 17 P 11	13E 25~13F21	N・38° W	81	51	58	37	14	
S 17 炉	13E 9~14	N・8° E	90	80	61	55	10	燒土・雑穀あり
S K 1	8C17~18~22~23	N・57° E	223	216	218	200	7	底面ピット1基 繩文土器
S K 2	7E16~21	N・39° W	140	117	108	97	34	底面ピット1基
S K 4	9D22~24 10D 2~4	N・37° E	321	287	309	254	20	底面ピット3基
S K 5	10D23	N・64° W	50	30	?	?	48	
S K 6	04F13	N・40° W	106	57	80	42	95	底面ピット1基 路穴状土坑
S K 10	8D16~17	N・38° E	115	92	97	87	15	
S K 11	8C10~9D 6	N・37° E	96	80	76	76	15	
S K 12	9D 6~11	N・39° W	110	90	86	84	41	底面ピット1基
S K 13	8E 8~13	N・57° W	?	70	?	44	(38)	南側を広く擾乱されている。
S K 14	13E 20~25	N・47° W	176	161	153	132	29	土器・石器・S 17 bの付着施設?
S K 15	13E 4~5~9~10	N・13° W	203	158	152	151	24	土器・石器 S 17 bの付着施設?

第8表 三本木新田B遺跡 石器観察表

番号	形態	出土位置	長cm	幅cm	厚cm	重量g	石材	備考
1	凹基無茎石器	S17	2.0	1.45	0.45	1.2	珪質頁岩	
2	石鎌 未製品	S17	3.5	1.9	0.5	4.0	無斑晶質安山岩	
3	石匙	S17	4.0	5.8	11.0	16.0	珪質頁岩	横形
4	不定形石器	S17	7.5	5.5	1.5	54.8	無斑晶質安山岩	G類
5	両極石器	S17	2.3	2.65	0.8	4.5	無斑晶質安山岩	4極2対
6	磨製石器 未製品	S17	3.9	2.2	0.87	6.6	滑石?	耳飾?
7	石核 接合資料	S17	6.0	10.75	3.9	252.9	無斑晶質安山岩	7aと7bの接合資料
7a	石核	S17	6.0	10.75	3.9	228.8	無斑晶質安山岩	7bと接合
7b	剥片	S17	4.8	3.7	1.6	24.1	無斑晶質安山岩	7aと接合
8	剥片	S17 (SK14)	5.7	6.45	1.8	52.5	無斑晶質安山岩	
9	磨石類	S17	12.0	5.0	3.8	333.4	砂岩	C類 彫刻あり
10	磨石類	S17	11.7	7.9	5.6	677.5	安山岩	C類
11	磨石類	S17	12.4	8.8	6.0	829.1	安山岩	C類
12	磨石類	S17	13.6	5.9	3.0	310.8	安山岩	D類
13	磨石類	S17 P9	6.3	5.3	3.0	155.6	安山岩	E類
14	磨石類	S17	14.0	5.5	3.4	325.3	砂岩	F類
15	筋感石	S17	16.4	8.5	6.6	981.1	砂岩	
16	磨石類 破損品	SK4	6.7	6.2	2.4	128.8	砂岩	G類
17	剥片	SK4	2.5	3.4	0.8	4.0	珪質頁岩	
18	剥片	SK4	5.3	4.4	1.1	21.5	無斑晶質安山岩	
19	剥片	SK4	4.3	3.0	0.9	7.0	チャート	
20	凹基無茎石器	表面採集	2.3	1.3	3.0	0.8	珪質頁岩	
21	凹基無茎石器	8D 撤乱	2.3	1.6	0.5	1.6	チャート	左脚欠損
22	石匙	10B	3.4	4.4	0.6	9.0	無斑晶質安山岩	横形
23	不定形石器	SK4西 撤乱	2.9	2.6	0.6	5.7	珪質頁岩	B1類? 下端欠損
24	不定形石器	17D	7.8	8.9	1.7	118.8	粘板岩	B2類
25	不定形石器	表面採集	7.6	3.7	1.4	38.6	無斑晶質安山岩	B1類
26	不定形石器	5C	9.9	7.4	2.5	144.5	凝灰岩	G類
27	不定形石器	14D	6.4	6.7	1.3	48.0	無斑晶質安山岩	G類
28	不定形石器	SK4西 撤乱	2.3	4.5	0.8	6.4	無斑晶質安山岩	J類
29	不定形石器	表面採集	13.2	7.8	2.7	228.9	凝灰岩	J類
30	不定形石器	11B	6.1	4.5	1.4	38.3	無斑晶質安山岩	J類
31	不定形石器	16B	6.1	4.4	1.4	35.3	無斑晶質安山岩	J類
32	両極石器	14D	6.9	2.0	2.0	25.1	無斑晶質安山岩	2極1対
33	両極石器	13D	3.7	2.4	1.0	8.5	無斑晶質安山岩	2極1対
34	両極石器	10D	3.9	2.9	0.55	8.0	チャート	2極1対

5まとめ

35	両極石器	14E	3.7	4.5	1.5	26.7	無斑晶質安山岩	2極1対
36	両極石器	表面採集	2.6	1.7	0.6	2.2	黒曜石	2極1対
37	両極石器	10D	3.4	4.3	0.9	12.1	珪質頁岩	2極1対
38	両極石器	1E 摂乱	6.6	7.5	2.2	109.5	無斑晶質安山岩	2極1対
39	両極石器	8B	4.3	7.0	2.2	85.1	無斑晶質安山岩	2極1対
40	両極石器	12D	4.8	5.5	1.5	37.0	無斑晶質安山岩	4極2対
41	剥片	6B	6.5	9.4	2.0	94.9	砂岩	
42	剥片	16C	5.9	3.6	1.2	23.5	砂岩	
43	剥片	12C	8.6	9.7	1.9	122.7	凝灰岩	
44	剥片	6B	5.1	7.0	2.1	52.9	凝灰岩	
45	磨製石器 未製品	表面採集	4.1	2.3	0.82	12.7	蛇紋岩	
46	磨石類	11D	10.0	8.4	4.1	404.2	安山岩	A類
47	磨石類	14C	12.1	9.0	3.5	605.5	安山岩	A類
48	磨製石器 未製品	14E	4.7	3.4	0.9	24.6	蛇紋岩	磨製石斧の転用品？
49	磨石類	6D	7.2	4.8	8.0	341.3	安山岩	A類
50	磨石類	13B	7.7	5.6	4.6	364.6	安山岩	A類
51	磨石類	15E	14.1	10.6	6.4	910.8	安山岩	B類
52	磨石類	14D	11.2	8.0	5.0	580.2	安山岩	B類
53	磨石類	14D	14.1	5.3	7.4	828.7	砂岩	C類
54	磨石類	5C	17.8	8.1	4.4	852.5	安山岩	C類
55	磨石類	15E	11.8	5.3	4.5	459.7	砂岩	C類
56	磨石類	10D	11.6	11.2	4.9	782.8	安山岩	C類
57	磨石類	12D	18.4	9.4	7.6	1500.0	安山岩	C類
58	磨石類	11A	9.7	9.5	5.1	807.8	安山岩	C類
59	磨石類	12D	9.5	7.2	5.1	389.6	安山岩	D類
60	磨石類	13D	10.5	5.6	3.6	230.2	安山岩	D類
61	磨石類	14D	9.9	7.4	5.3	527.7	安山岩	D類
62	磨石類	12E	9.4	7.6	6.7	460.5	安山岩	D類
63	磨石類	16C	10.8	8.7	3.1	419.1	安山岩	E類
64	磨石類	12B	5.4	6.5	3.1	123.1	安山岩	F類
65	磨石類	12D	9.4	8.7	4.8	847.1	花崗岩	F類
66	磨石類	3T	9.6	8.4	5.6	600.9	安山岩	G類
67	磨石類	13C	9.6	9.3	5.7	759.1	安山岩	G類
68	石皿	12C	14.5	17.0	8.0	1840.0	安山岩	両側面と擇出口に彫刻あり
69	石皿	13E	23.6	17.1	8.1	2320.0	安山岩	右側面に彫刻あり
70	砥石	12C	21.2	11.5	8.0	2770.0	砂岩	
71	砥石	12D	10.6	8.7	3.4	325.3	砂岩	筋あり
72	砥石	14D	18.5	12.3	8.2	2500.0	砂岩	

第9表 三本木新田B遺跡 石器組成表

出土位置	形態	石 材									小計
		無透晶質 安山岩	珪質頁岩	チャート	凝灰岩	黒曜石	粘板岩	安山岩	砂岩	滑石	
S I 7	石鎌	1			1						2
	石匙		1								1
	不定形石器										
	G類	1									1
	両極石器	1									1
	剥片	4			1			1			6
	石核	1									1
	磨石類										
	C類							2	1		3
	D類							1			1
	E類							1			1
	F類							1			1
SK 4	筋砥石								1		1
	磨製石器								1?		1
		8	1	0	2	0	0	5	3	1	20
	剥片	1	1	1							3
	磨石類										
	G類										1
		1	1	1					1		4
	石鎌		1							鉄石英	2
	石匙	1									1
	両極石器	6	1	1		1					9
	不定形石器										
包合層	B類	1	1				1				3
	G類	1			1						2
	J類	3			1						4
	剥片	18	2	2	5	1		1	4	1?	流紋1
	磨石類										
	A類							4			4
	B類							2			2
	C類							5	1		6
	D類							4			4
	E類							1			1
	F類							1		花崗1	2
	G類							2			2
	不明							1			1
S I 7	砥石								4		4
	筋砥石								1		1
	石皿							2	1		3
	磨製石斧?									蛇紋2	2
		30	5	3	7	2	1	23	11	1	5
	総 計	39	7	4	9	2	1	28	15	2	5
											112

要 約

萩清水遺跡

1. 萩清水遺跡は新井市三本木新田字萩清水9-1他に所在する。遺跡は妙高山麓から流れ出て日本海へ注ぐ関川の支流、矢代川右岸の火碎流台地の上に立地する。
2. 発掘調査は国道18号上新バイパスの道路法線内に遺跡が存在したことに起因する。一時調査は昭和61年8月23日から9月7日、二次調査は昭和61年9月8日から10月17日にかけて実施した。調査面積は約4,000m²である。
3. 調査の結果、縄文時代前期の土器・石器や、竪穴住居跡、陥穴状土坑などが検出された。
4. 竪穴住居跡は1基検出されたのみだが、砥石が大量に出土したことや砥石を据えた土坑が存在することなどから何らかの研磨作業が行われていた場所であったと推定される。構築時期は諸磯式期とみられる。
5. 陥穴状土坑は22基検出されたが、台地を全面的に調査したわけではないので、全体の配列などは明らかにすることはできなかった。構築時期は形態から縄文時代前期前葉から末葉までの可能性が高い。
6. 出土土器は前期後葉を主体として早期前半から晩期後葉のものが断続的にある。

三本木新田B遺跡

1. 三本木新田B遺跡は新井市三本木新田字長峯559他に所在する。遺跡は妙高山麓から流れ出て日本海へ注ぐ関川の支流、矢代川右岸の火碎流台地の上に立地する。
2. 発掘調査は国道18号上新バイパスの道路法線内に遺跡が存在したことに起因する。一次調査は昭和61年8月27日から9月26日、二次調査は昭和62年8月18日から10月20日にかけて実施した。調査面積は約8,650m²である。
3. 調査の結果、縄文時代前期の土器・石器や、竪穴住居、土坑などが検出された。
4. 竪穴住居跡は前期の有尾式期に構築されたと推定され、拡張の痕がみられた。
5. 土器は前期中葉を主体に早期後半・前期中葉・前期末葉～中期初頭・中期末葉・後期後葉のものがある程度のまとまりをもって出土した。

引用・参考文献

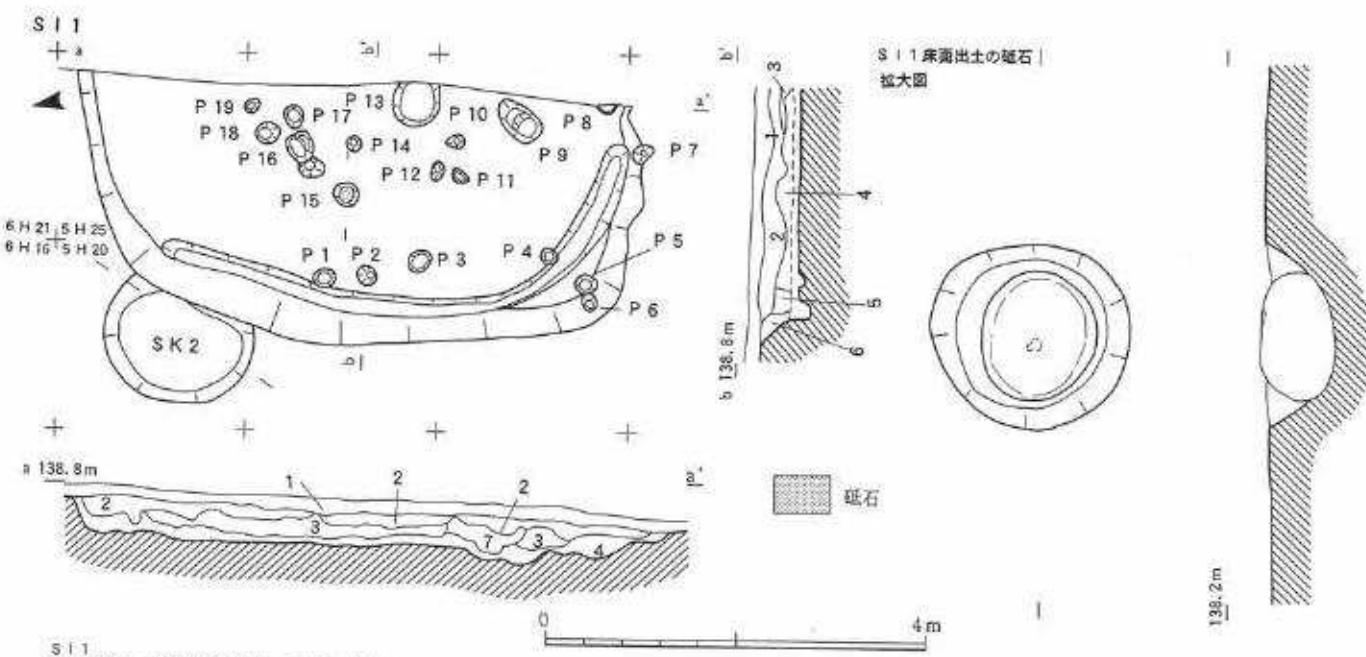
- 阿部朝衛 1987 「第6章 磨製石斧生産の様相」『史跡 寺地遺跡』新潟県西頃城郡青海町寺地遺跡発掘調査報告書 青海町
- 阿部雄生 1995 「中ノ沢遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 1994 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成5年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 1995 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 1996 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成7年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀 1995 「第V章5 石器」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書IV 元屋敷遺跡I』朝日村教育委員会
- 今村啓爾 1973 「霧ヶ丘遺跡の土坑群に関する考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団
- 池田亨・細谷菊治 1990 「第V章第2節 石器」『水上遺跡』新潟県南魚沼郡大和町名木沢、水上遺跡発掘調査概報 大和町埋蔵文化財調査報告第4号 大和町教育委員会
- 宇佐美篤美・高橋保 1987 「赤坂遺跡」『柏崎市史資料集 考古篇 1』柏崎市史編さん委員会
- 大杉真実 1996 「第IV章6・A遺構」『清水上遺跡II』関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 岡本郁栄・宮腰公健・小島幸雄 1982 「奥の城(西峯)遺跡 第二次調査該報—昭和56年度—」中郷村教育委員会
- 岡本勇ほか 1967 『新井市史第二次調査報告』新井市史編修委員会
- 小熊博史 1994 「IV 3(2)石器」『松葉遺跡—中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う発掘調査—』長岡市教育委員会
- 小野 昭・古川知明ほか 1982 『原通ハツ塚』新井市教育委員会
- 小野 昭・前山精明ほか 1988 『巻町豊原遺跡の調査』『巻町史研究』IV 巷町
- 小野 昭 1994 「豊原遺跡」『巻町史』 巷町
- 柿沼恵介 1986 「III 2(2)住居跡」『分郷八崎遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 群馬県北橘村教育委員会
- 川上貞雄 1985 「III 遺物」『多岐ノ脇遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会
- 北村 亮 1990 「岩原I遺跡 上林塚遺跡」関越自動車道関係発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 新潟県教育委員会
- 楠本政助 1987 「4. 骨角貝器 製作・用法実験」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 小池義人 1995 「関川谷内A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1996 「第IV章 籠峰遺跡」『横引遺跡 籠峰遺跡 柳平遺跡』上信越自動車道関係発掘調査報告書I 新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林康男 1982 「舅屋敷」塩尻市教育委員会
- 小林義広 1988 「5. 遺物」『桑切遺跡発掘調査報告書』下田村文化財調査報告書第26号
- 小島正巳・早津賢二 1992 「妙高山麓松ヶ峰No.237遺跡採集の押型文土器一日計式の波及ー」『長野県考古学会誌』64 長野県考古学会
- 小島正巳 1993 「妙高山麓松ヶ峰No.237遺跡の縄文時代早期土器」『新潟考古』第4号 新潟県考古学会

- 小島正巳 1995 「妙高山麓における最近の考古学事情」『妙高火山研究所 年報』第3号 妙高火山研究所
- 小日向正 1976 「第4章 第1節(2)石器」『古屋敷遺跡』田上町文化財調査報告書第2輯 田上町教育委員会
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1984 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(1)」『長岡市立科学博物館研究報告』第19号
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1985 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(2)」『長岡市立科学博物館研究報告』第20号
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1986 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(3)」『長岡市立科学博物館研究報告』第21号
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1987 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(4)」『長岡市立科学博物館研究報告』第22号
- 駒形敏朗・小熊博史 1988 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(5)」『長岡市立科学博物館研究報告』第23号
- 駒形敏朗・小熊博史 1989 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(6)」『長岡市立科学博物館研究報告』第24号
- 齊藤基生 1972 「V2 石器」「羽黒遺跡」新潟県見附市羽黒遺跡発掘調査報告 見附市教育委員会
- 佐藤雅一 1987 『岩原Ⅱ遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告書第7輯 湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一・石坂圭介ほか 1994 『中里村文化財調査報告書第6輯 千溝遺跡』県営圃場整備事業桔梗原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(その1)
- 島田靖久 1986 『鷹之巣遺跡』新潟県中魚沼郡中里村文化財調査報告書第3集 中里村教育委員会
- 下平博行・贊田 明 1997 「長野県における前期中葉の土器群について」『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 鈴木次郎 1977 「第VI章第2節 石器」「尾崎遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告13 神奈川県教育委員会
- 鈴木道之助 1991 『図録 石器入門事典 縄文』柏書房
- 関根慎二 1986 「第I章 検出された遺構と遺物」「糸井宮前遺跡Ⅱ」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 群馬県教育委員会
- 高橋 桂・中島庄一・金井正三 1976 「北信濃大倉崎遺跡調査報告」『信濃』28-4 信濃史学会
- 高橋 桂ほか 1990 『上野遺跡・大倉崎遺跡』小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ 飯山市埋蔵文化財調査報告書第21集 飯山市教育委員会
- 高橋 勉 1985 「II 地理的・歴史的環境」「月岡遺跡 範囲確認緊急調査報告書」新井市教育委員会
- 高橋 勉 1989 「第II章 遺跡の位置及び周辺の遺跡」「杉明遺跡 発掘調査報告書」新井市教育委員会
- 高橋 勉 1994 「高床山遺跡群」「新井市遺跡確認調査報告書」新井市教育委員会
- 高橋保雄 1990 「第IV章2節 石器」「清水上遺跡」関越自動車道関係発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 新潟県教育委員会
- 高橋保雄 1992 「第IV章B 石器類」「五丁歩遺跡 十二木遺跡」関越自動車道関係発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 1995 「関川谷内B遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度」(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 靖 1988 「第V章第6節2. 出土石器について」「原山遺跡 大塚遺跡」北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書IV 新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集
- 田中 靖 1991 「第IV章2C d 石匙」「城之腰遺跡」関越自動車道関係発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 新潟県教育委員会
- 谷藤保彦 1997 「北関東地域における前期中葉土器群の実相」『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 親跡喬 1990 『図録 小丸山遺跡』中郷村教育委員会

- 親跡 喬 1992 a 「図録 柿ノ木町遺跡」妙高村教育委員会
- 親跡 喬 1992 b 「上ッ平遺跡発掘調査 概況報告書」妙高村教育委員会
- 土田孝雄 1986 「糸魚川市史 資料集－考古編－」糸魚川市役所
- 鶴巻康志 1992 「Ⅲ 6. 石器・骨角器』館ノ内遺跡D地点の調査』新発田市教育委員会
- 寺崎裕助 1988 「刈羽式土器について(予察)』『新潟県考古学談話会会報』第1号 新潟県考古学談話会
- 寺崎裕助 1995 「新潟県における中期初頭の土器－関東・中部高地系土器を中心として－』『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1996 「縄文時代前期前半の土器について』『清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 勘新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1997 「吉川町古町B遺跡について』『新潟考古学談話会会報』第17号 新潟考古学談話会
- 寺村光晴 1987 「第3章 硬玉工房址と攻玉技術－寺地遺跡の硬玉生産をめぐって－』『史跡 寺地遺跡』新潟県西頸城郡青海町寺地遺跡発掘調査報告書 青海町
- 寺村光晴・三井田忠・関 雅之 1959 「新潟県中頸城郡柿崎町鍋屋町遺跡概報」『上代文化』第29輯 國学院大学考古学会
- 寺村光晴・安藤文一・千家和比古 1979 「大角地遺跡－飾玉とヒスイの工房址－』青海町教育委員会
- 田海義正 1993 「第IV章 5 石器』『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 前田遺跡(下ゾリ・下クボ遺跡道路部分)』朝日村教育委員会
- 富樫秀之 1990 「第IV章 2 B 石器』『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 下ゾリ遺跡』朝日村教育委員会
- 富樫秀之 1991 「第IV章 5 石器』『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 下クボ遺跡』朝日村教育委員会
- 常磐井智行 1990 「第3編第2章 1 遺構』『上野遺跡・大倉崎遺跡』小沼湯竈バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ 飯山市埋蔵文化財調査報告書第21集 飯山市教育委員会
- 戸沢充則 1988 「IV 2 縄文時代の住居と集落』『長野県史』考古資料編全1巻(4)遺構・遺物 長野県
- 都丸 肇・茂木允視 1985 「見立 滝井遺跡 見立大久保遺跡－関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書KC-V-』群馬県勢多郡赤城村教育委員会
- 立木(土橋)由理子 1996 「第Ⅲ章 横引遺跡』『横引遺跡 瓢峰遺跡 柳平遺跡』上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ 新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集 勘新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木(土橋)由理子ほか 1996 「大堀遺跡』一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 新潟県埋蔵文化財調査報告書第75集 勘新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中川成夫・岡本 勇・小松芳男・泰 繁治 1959 「顯聖寺遺跡』浦川原村教育委員会
- 中川成夫・岡本 勇・加藤晋平 1967 「葎生遺跡』『頸南』新潟県教育委員会・頸南地区総合学術調査会
- 中郷村教育委員会 1987 「籠峰遺跡発掘調査概報」
- 中郷村教育委員会 1988 「籠峰遺跡発掘調査概報Ⅱ」
- 中郷村教育委員会 1989 「縄文人の心と手－籠峰遺跡発掘調査概報Ⅱ」
- 中郷村教育委員会 1996 「籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ』遺構編
- 中島 宏 1980 「V 1.(1)住居跡』『伊勢塚・東光寺裏遺跡』上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書IV 埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集 埼玉県教育委員会
- 野村忠司 1996 「第Ⅱ章 篠峰遺跡の環境』『篠峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ』遺構編 中郷村教育委員会
- 新潟県 1980 「新潟県遺跡地図』新潟県教育委員会
- 新潟県 1983 「新潟県史 資料編Ⅰ 原始・古代一 考古編』新潟県
- 秦 繁治 1986 「V 4 陥し穴状遺構』『峯山B遺跡』新潟県中頸城郡板倉町峯山B遺跡発掘調査報告書 板倉町埋蔵文化財調査報告第1 板倉町教育委員会
- 秦 繁治 1992 「IV 2. 縄文時代の遺構』『古町B遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会
- 秦 繁治・小林義広 1992 「古町B遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会

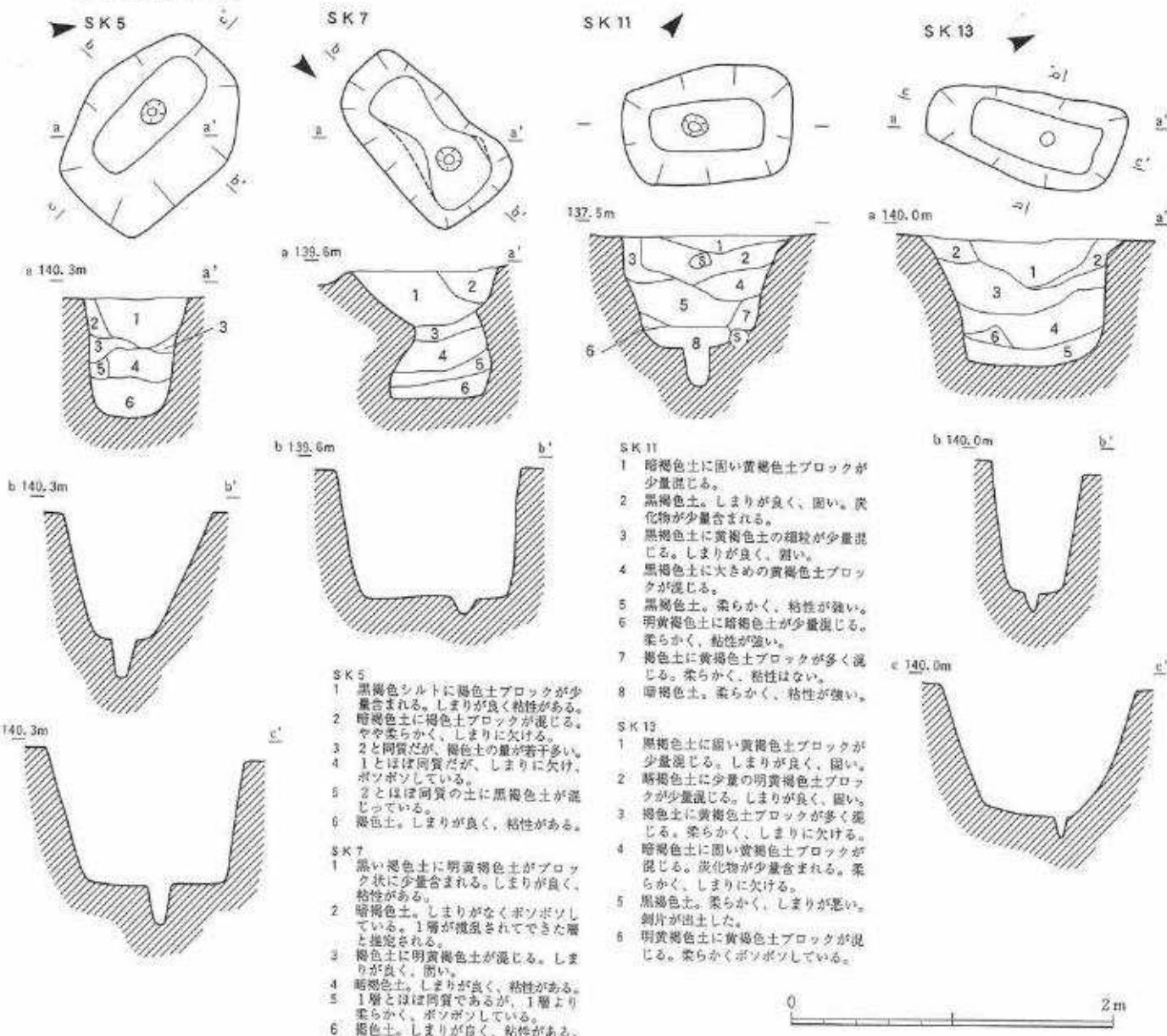
- 早川正一 1987 「3. 石器Ⅱ 磨製石斧」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 早津賢二 1985 「妙高火山群－その地質と活動史－」第一法規
- 早津賢二 1995 「妙高火山－赤倉火碎流の¹⁴C年代」『道添遺跡Ⅱ』妙高村教育委員会
- 早津賢二・古川成光 1981 「妙高火山赤倉火碎流堆積物と田口泥流堆積物の¹⁴C年代」『第四紀研究』20
- 早津賢二・小島正己 1985 「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」『妙高火山群－その地質と活動史－』第一法規
- 樋口昇一ほか 1986 十二之后遺跡『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市その4－』長野県教育委員会
- 藤巻正信 1991 「第IV章C 1) r 砧石・u 擦切具等」『城之腰遺跡』関越自動車道関係発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 新潟県教育委員会
- 藤巻幸男 1984 『加茂遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 星奈津子 1996 「第Ⅱ章 2. 周辺の遺跡」『横引遺跡 篠峰遺跡 柳平遺跡』上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集 助新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 本田秀生・山本正敏・木下哲夫・工藤俊樹 1997 「北陸における縄文時代前期中葉の土器様相」『第10回 縄文セミナー 前期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 本間信昭・室岡博 1976 『兼俣遺跡』妙高高原町文化財調査報告書第1集 妙高高原町教育委員会
- 前山精明 1987 「卷町伏部採集の擦切石斧」『まきの木』第37号 卷町郷土資料館友の会
- 増山仁 1984 「13 擦切石器」『金沢市新保本町チカモリ遺跡－石器編－』金沢市教育委員会
- 右島和夫 1986 「III-2 (石器)」「分郷八崎遺跡」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 群馬県北橘村教育委員会
- 南久和 1984 a 「12 有溝砥石」『金沢市新保本町チカモリ遺跡－石器編－』金沢市教育委員会
- 南久和 1984 b 「縄文時代後晩期の木器・骨角器及び北陸の石器組成の諸問題について」『金沢市新保本町チカモリ遺跡－石器編－』金沢市教育委員会
- 宮下健司 1987 「3. 石器Ⅱ 有溝砥石」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 宮下健司 「縄文時代の道具 砧石」『長野県史』
- 妙高団体研究グループ 1969 「妙高火山の形成史と山麓の水理地質－新潟県の第四系・そのX-」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』No.14
- 室岡 博 1986 a 『兼俣遺跡(D地区)』妙高高原町文化財調査報告書第7集 妙高高原町教育委員会
- 室岡 博 1986 b 『中古遺跡』妙高村教育委員会
- 室岡 博 1994 『道添遺跡I』妙高村教育委員会
- 室岡 博 1995 『道添遺跡II』妙高村教育委員会
- 室岡 博・寺村光晴 1960 『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会
- 八幡一郎 1958 『刈羽貝塚』新潟県教育委員会
- 山本暉久 1982 『堅穴住居』『縄文文化の研究』第8巻 社会・文化 雄山閣
- 山本正敏 1990 「II 石器各説」「境A遺跡－石器編－(本文)」北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編 5 富山県教育委員会

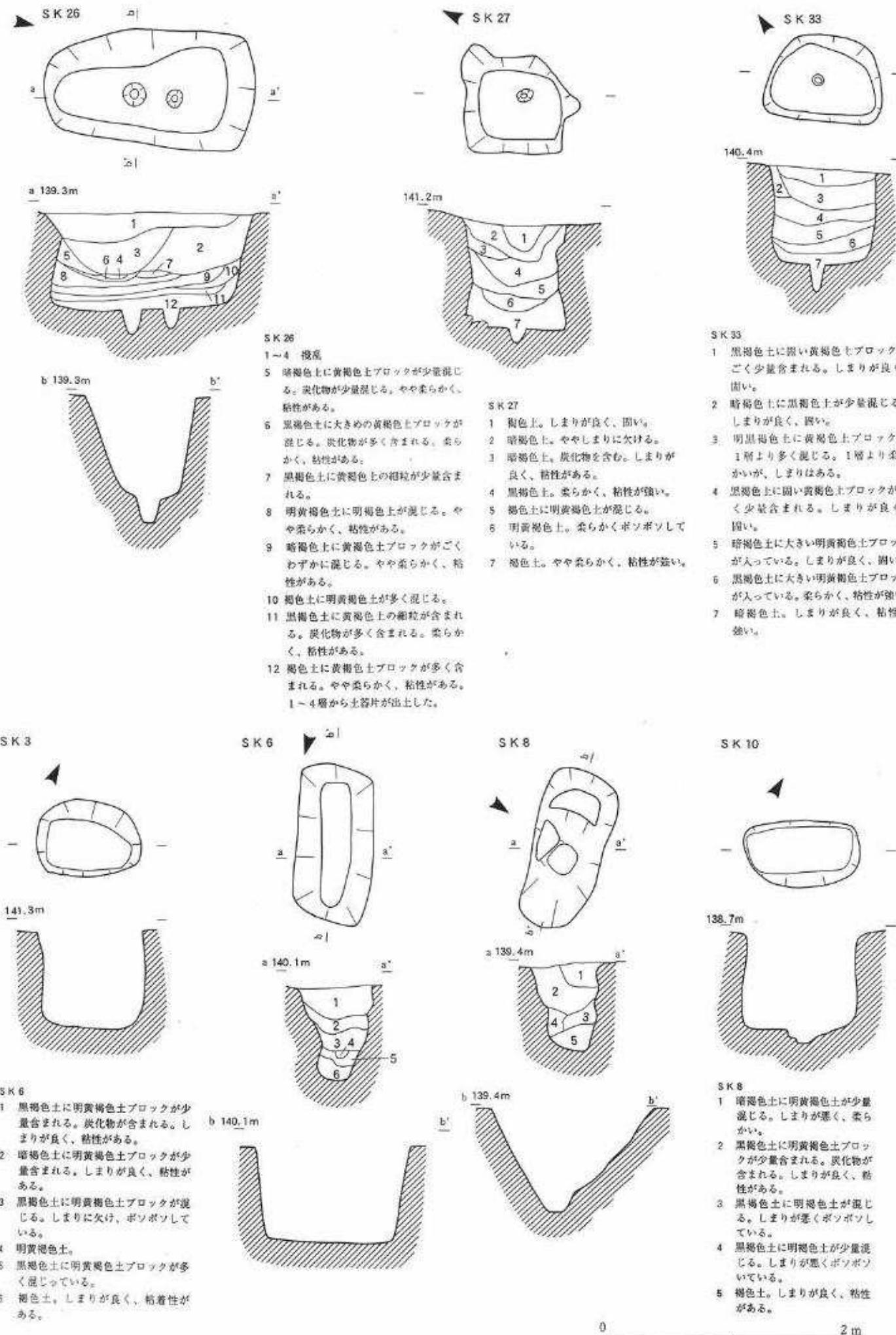
図 版



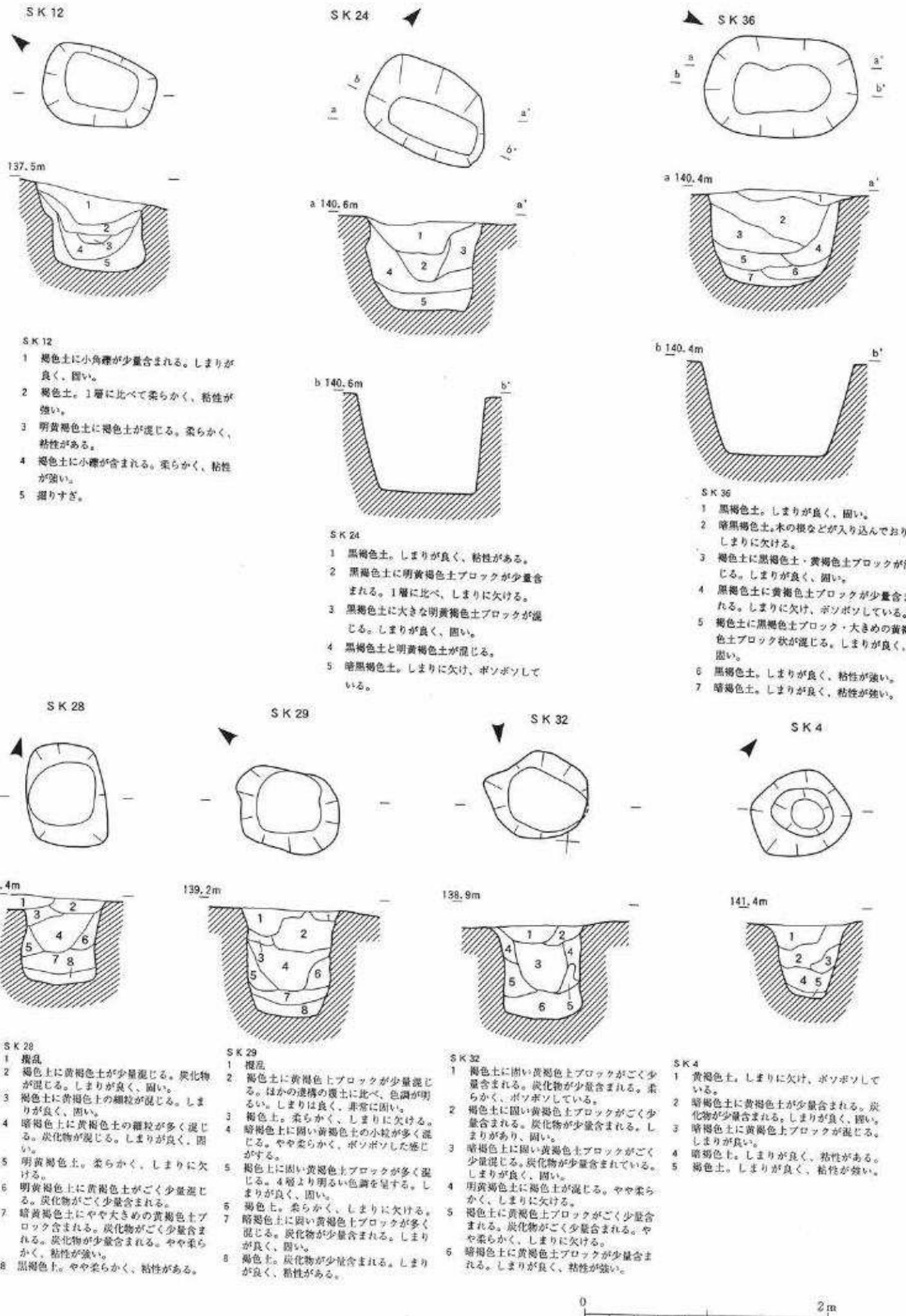
S 11
1 棕色土。炭化物が少量混じっている。しまりに欠け、さらさらしている。遺物が最も多く含まれている層である。
2 暗褐色土に小礫が少量混じる。炭化物も1層より多く含まれている。しまりが良く、固い。
3 黒褐色土に明黄褐色土の小粒が混じっている。炭化物が最も多く含まれている層である。しまりが良く、固い。
4 棕色土に明黄褐色土ブロックが混じる。小礫が少量含まれている。しまりが良く、固い。遺物は含まれていない。

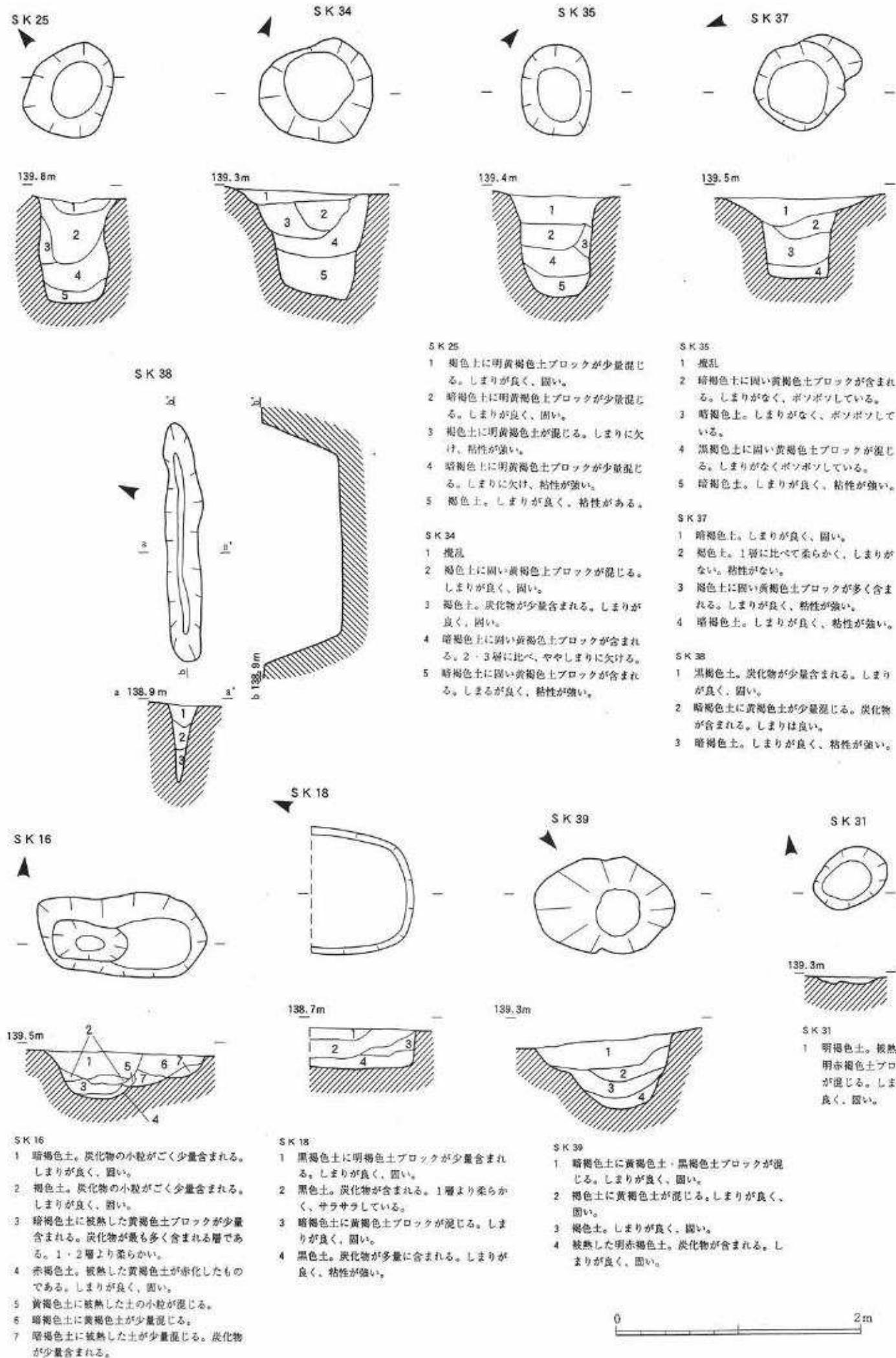
5 棕色土に明黄褐色土ブロックが混じる。明黄褐色土ブロックの割合が4層より多い。小礫が少く含まれる。しまりが悪い。
6 明黄褐色土に褐色土が混じる。炭化物が少く含まれる。しまりが良く、固い。
7 明黄褐色土に少量の黄褐色土ブロックが含まれる。小礫が多く含まれる。しまりが良く、非常に固い。



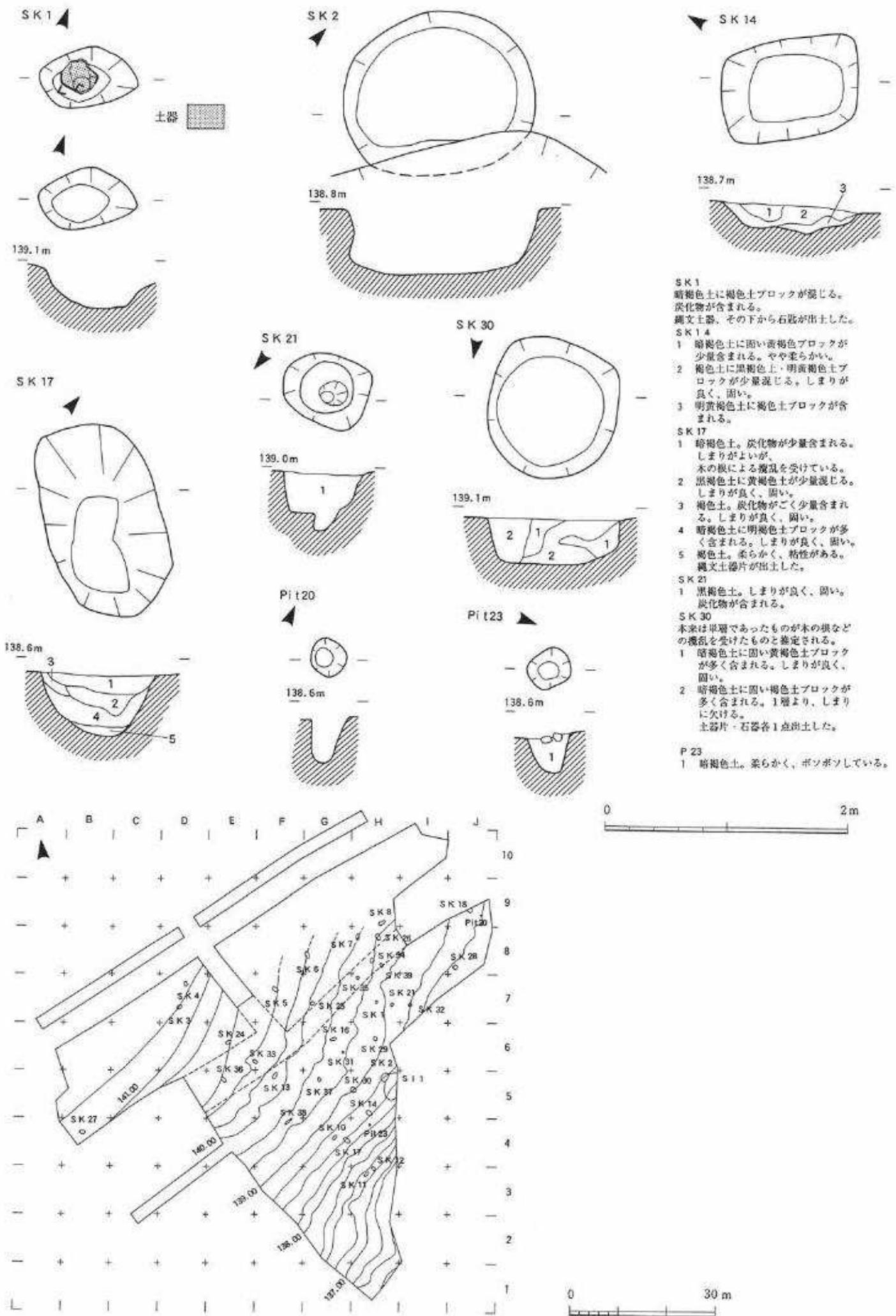


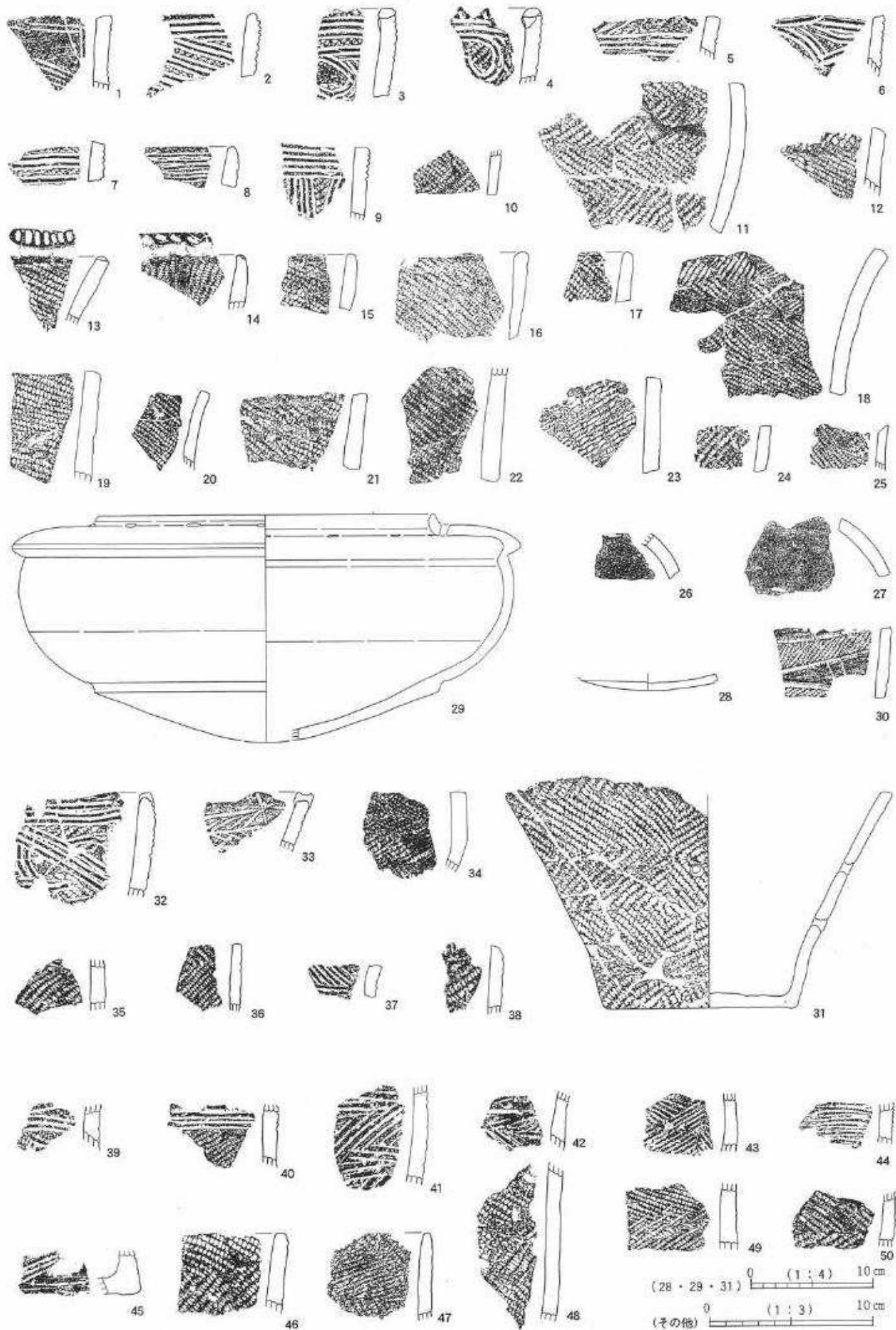
0 2 m



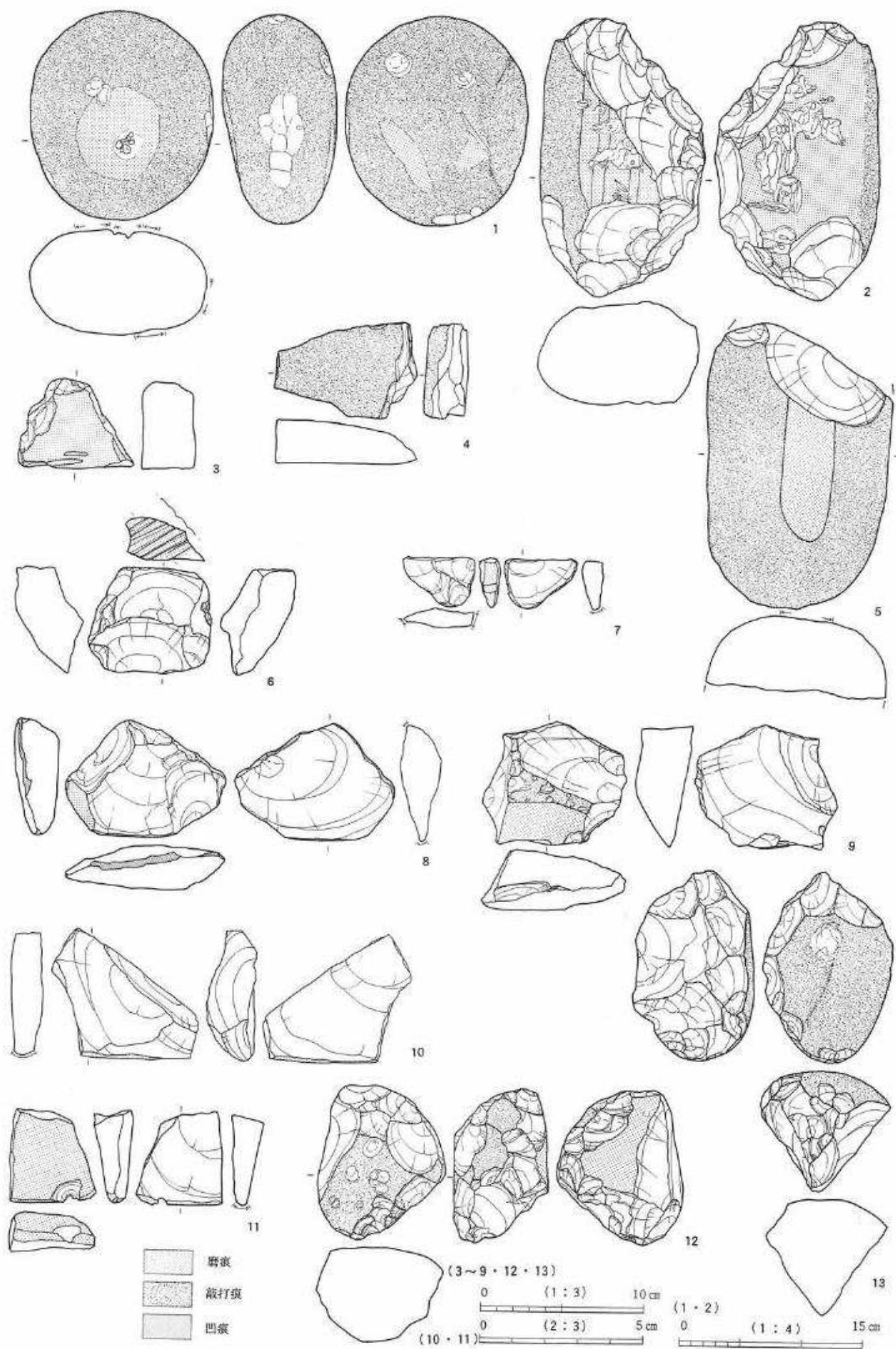


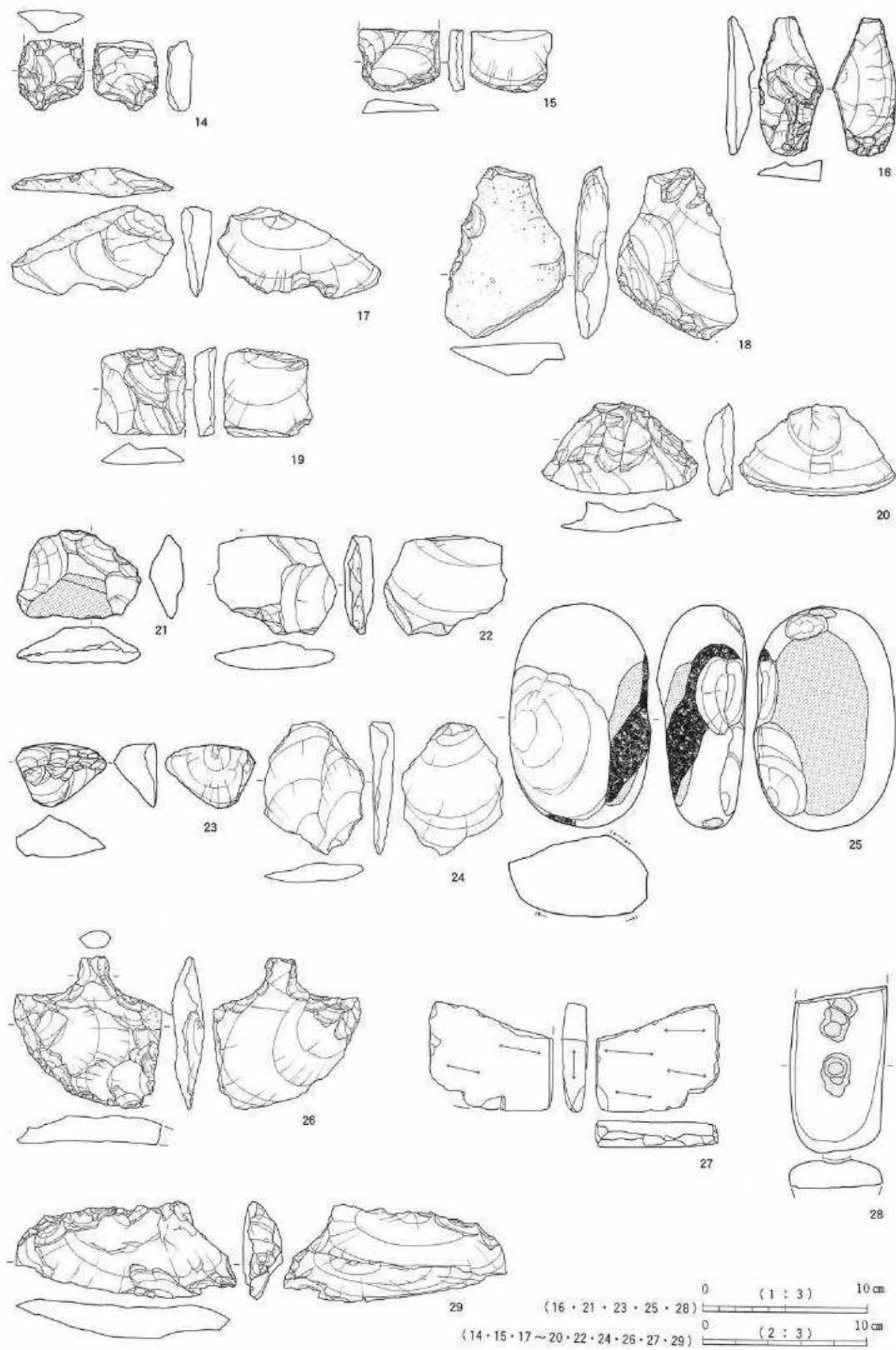
0 2m

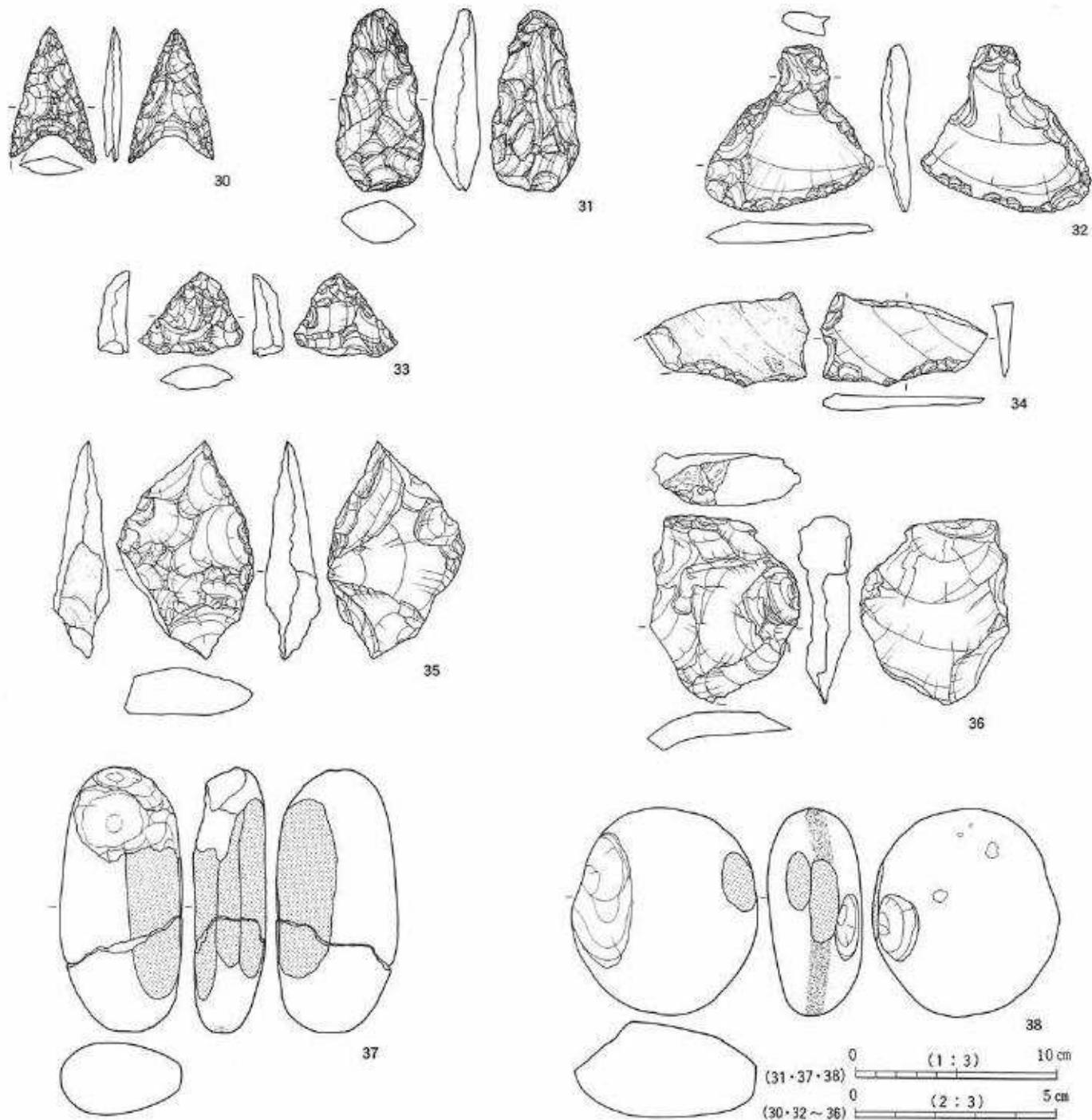


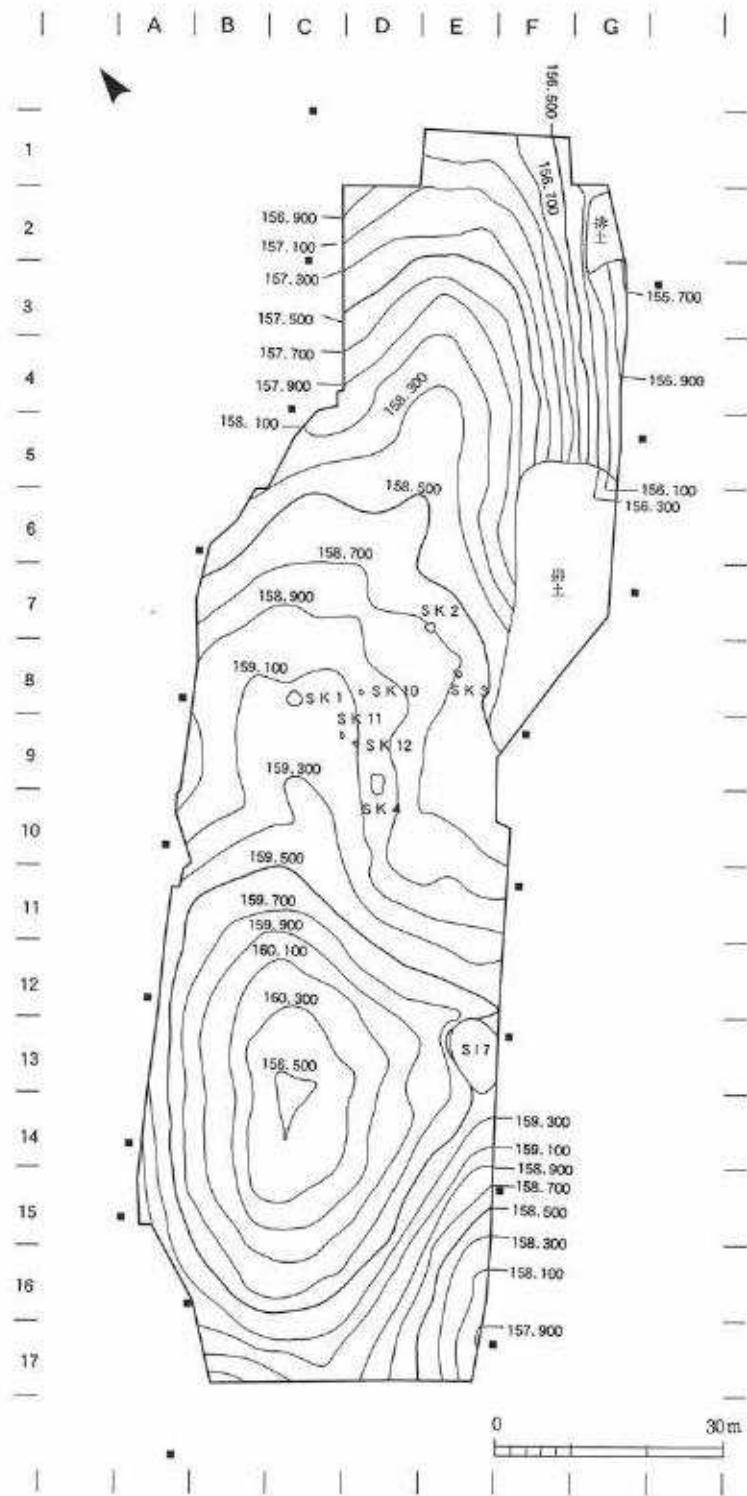


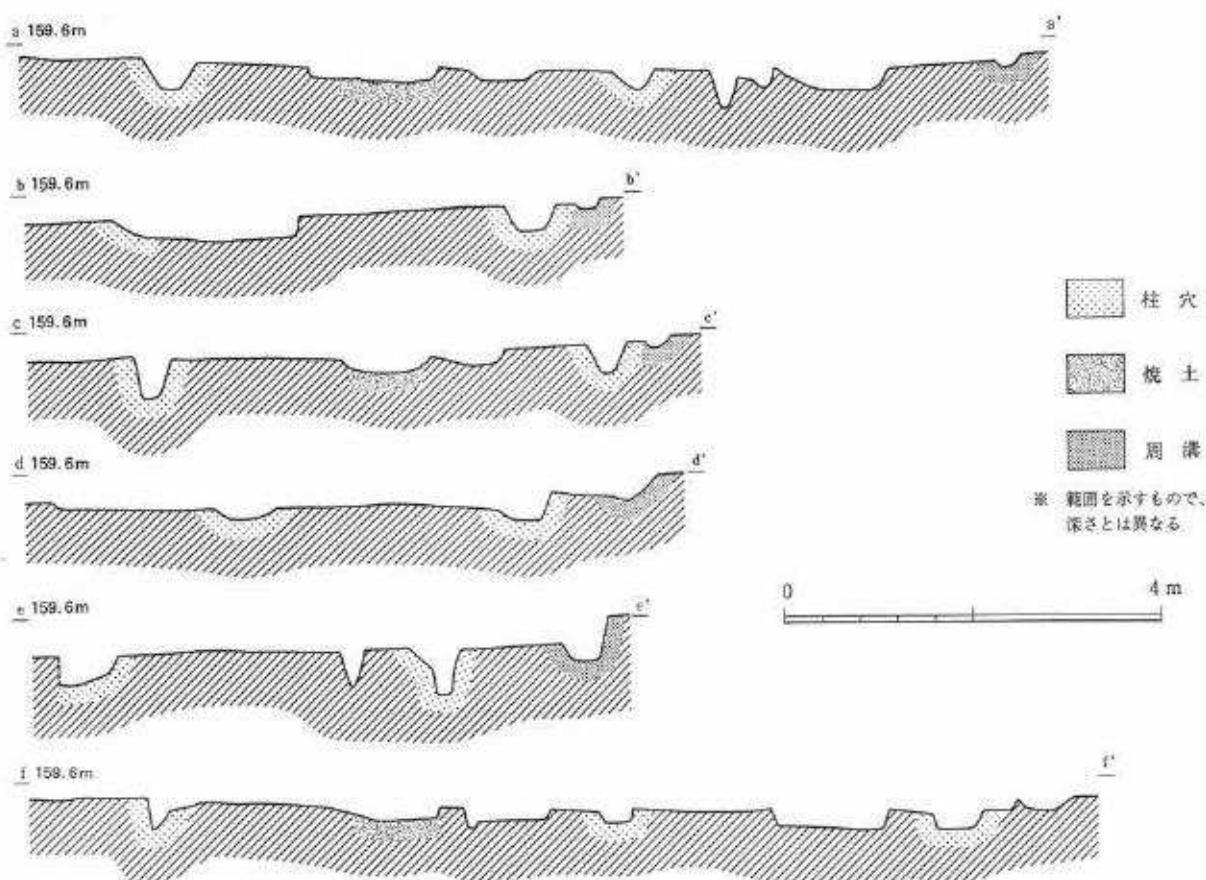
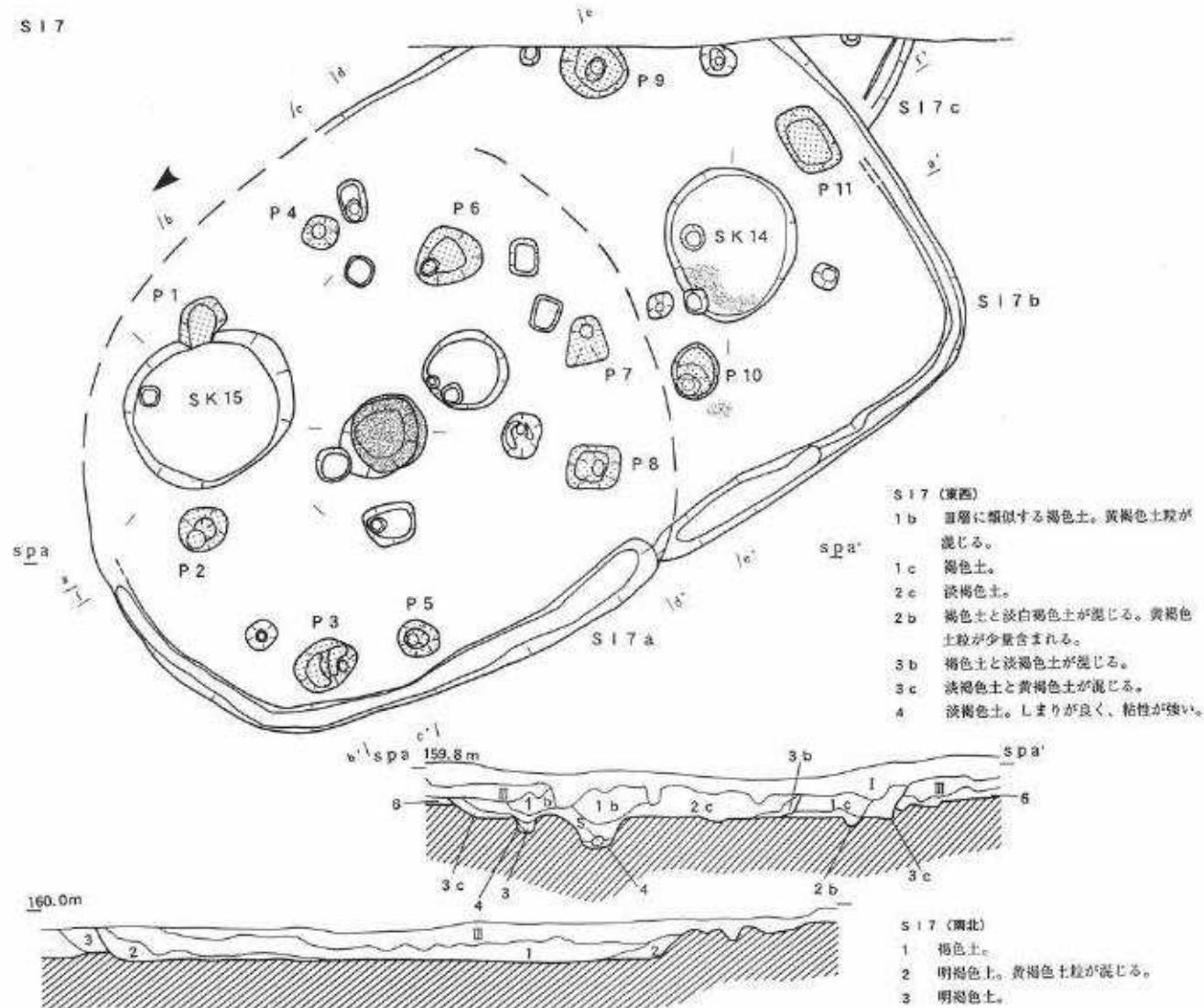


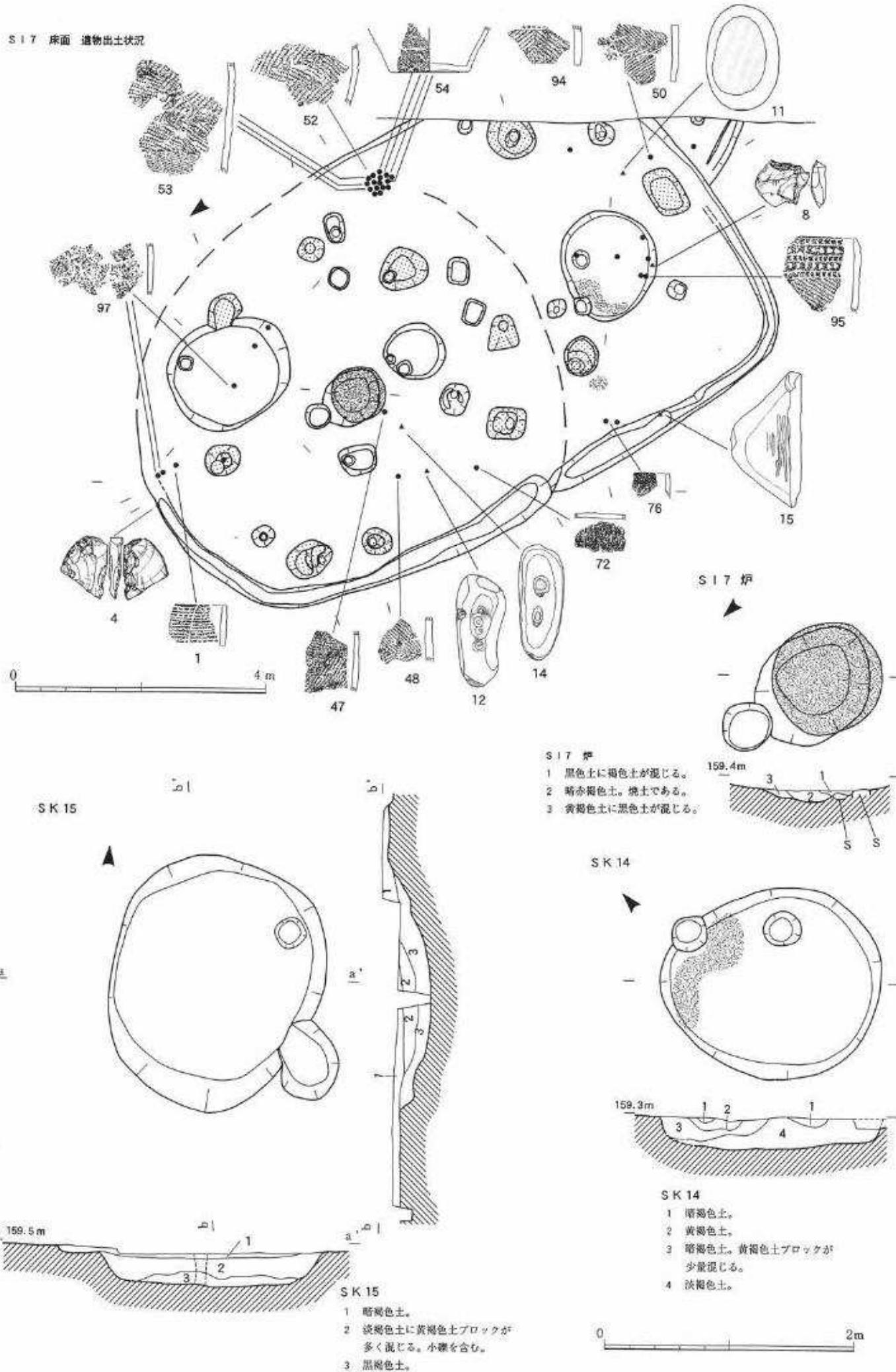


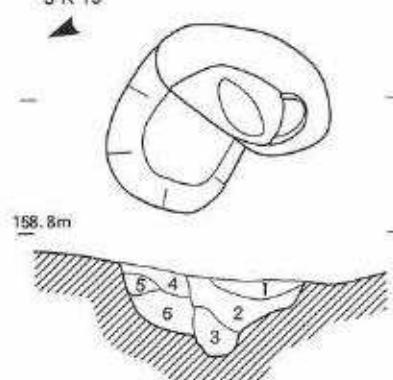
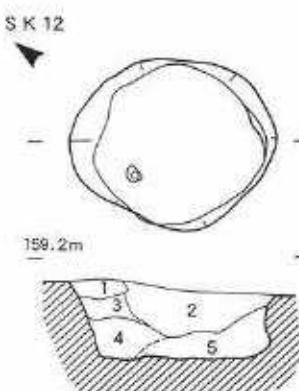
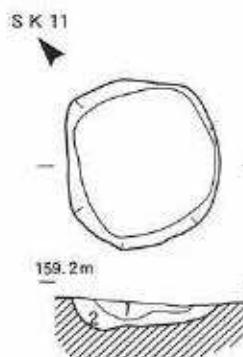
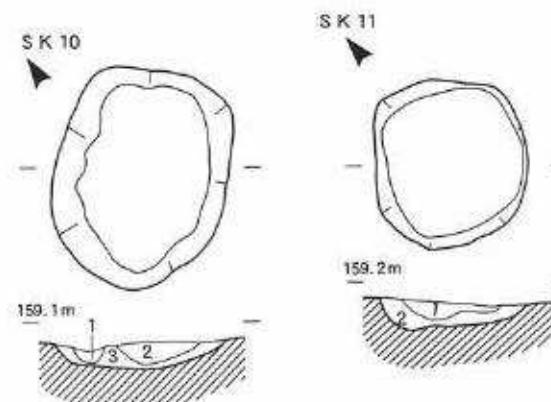
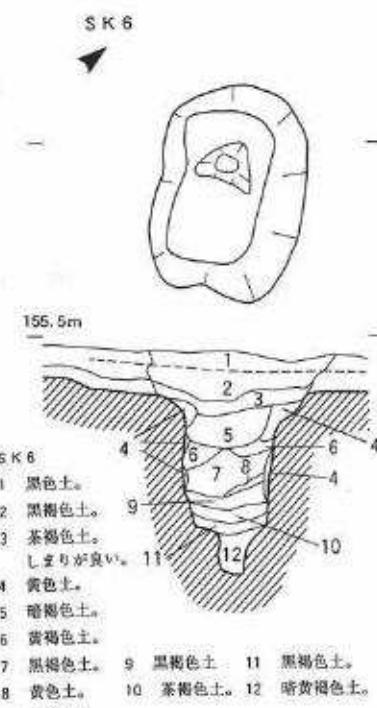
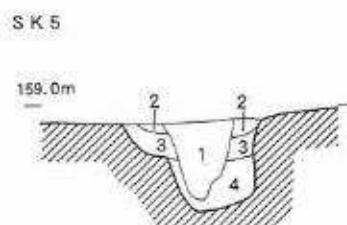
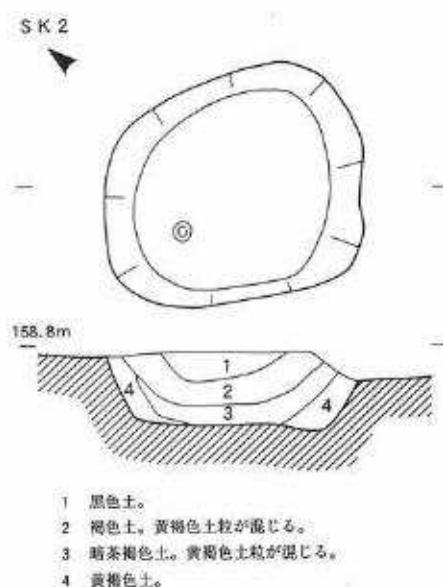
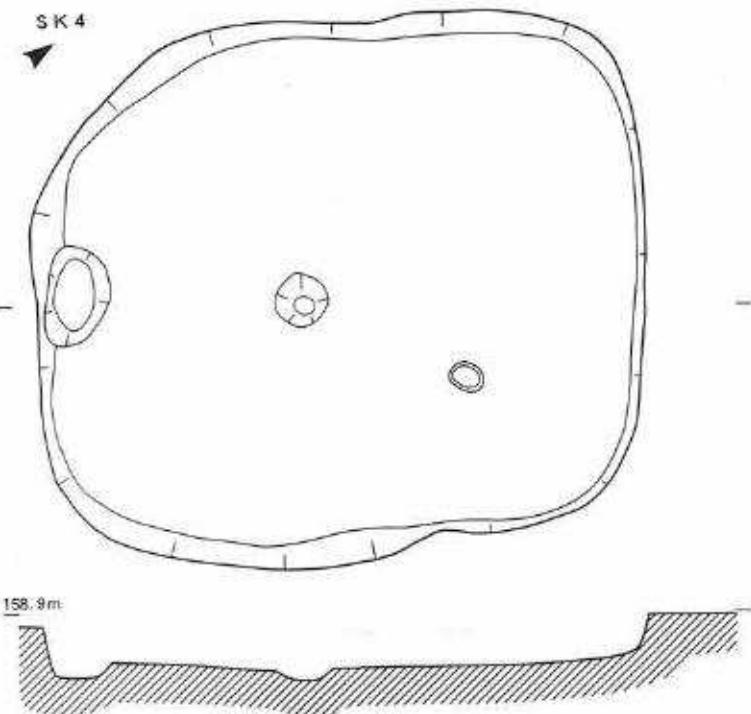
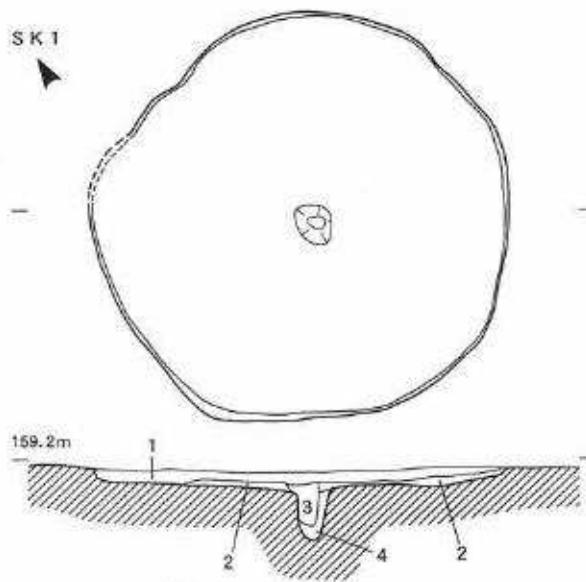




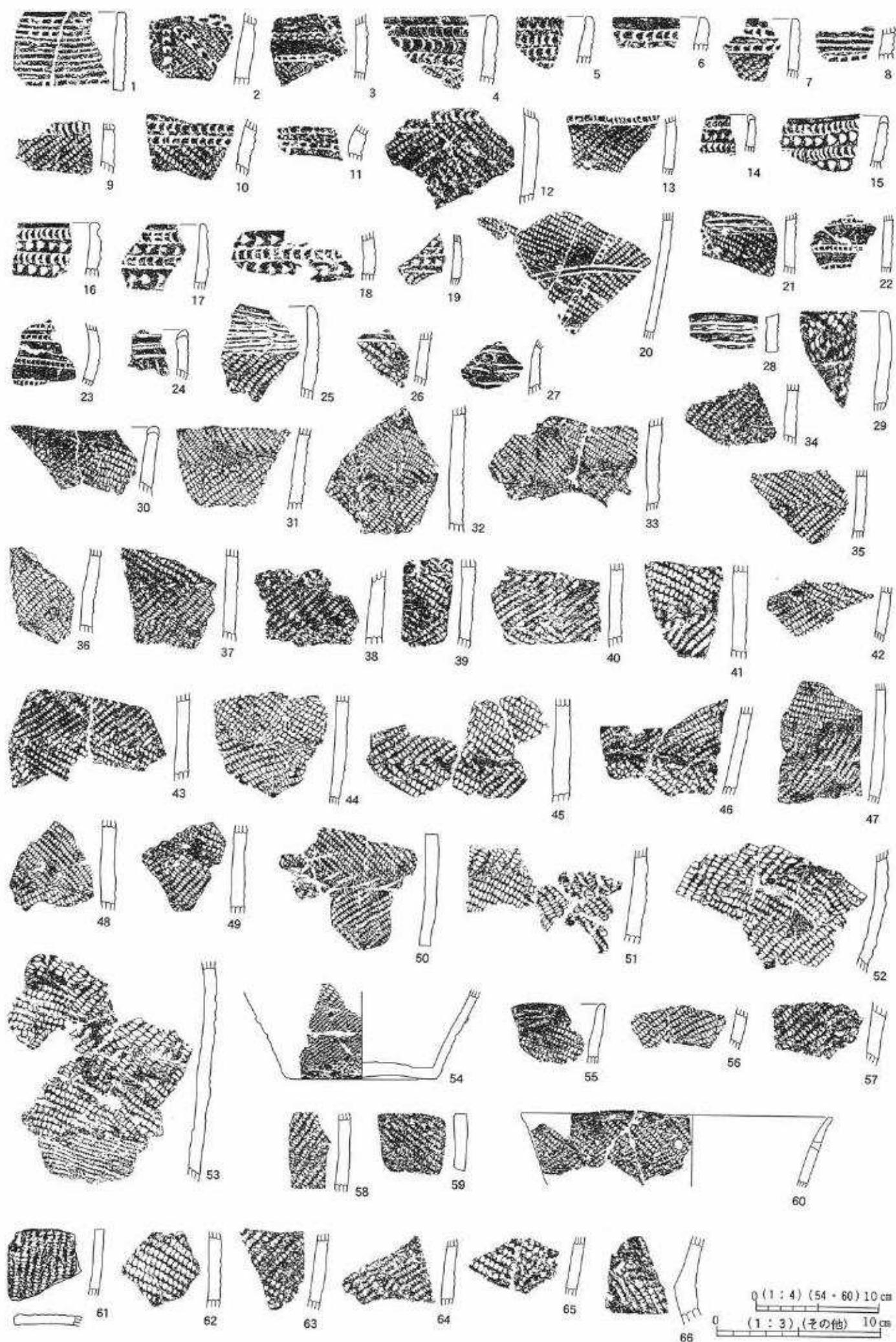


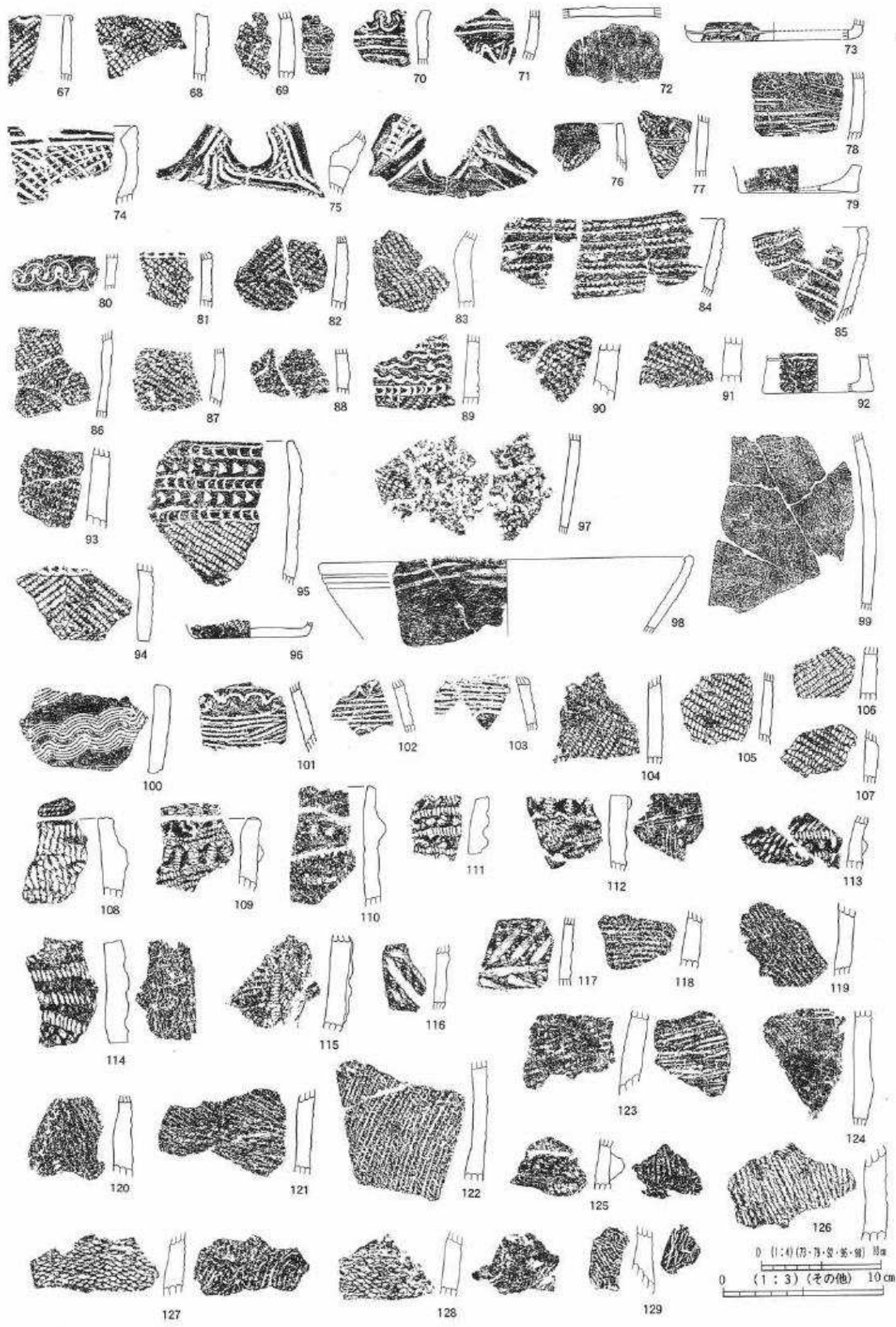


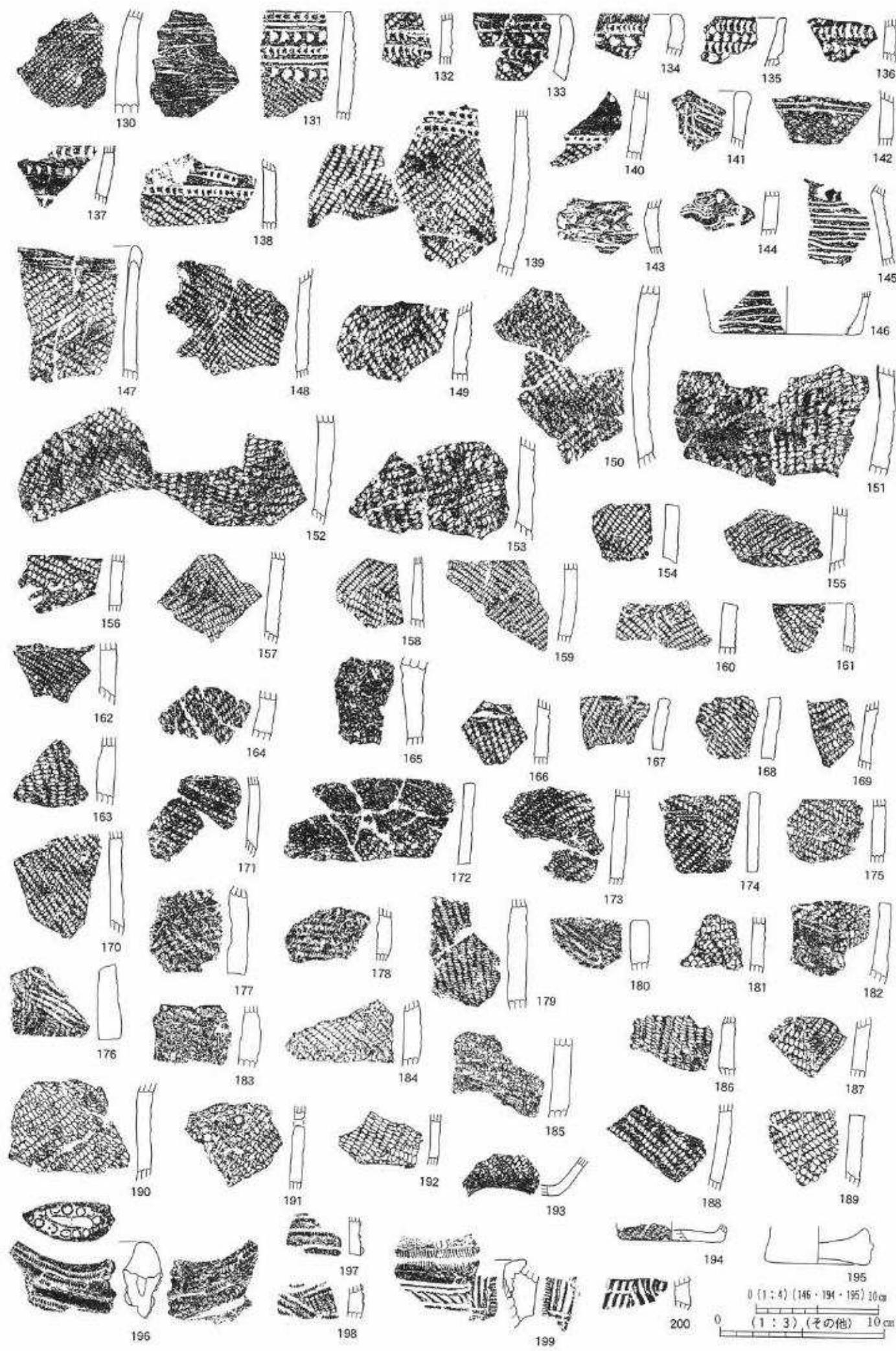


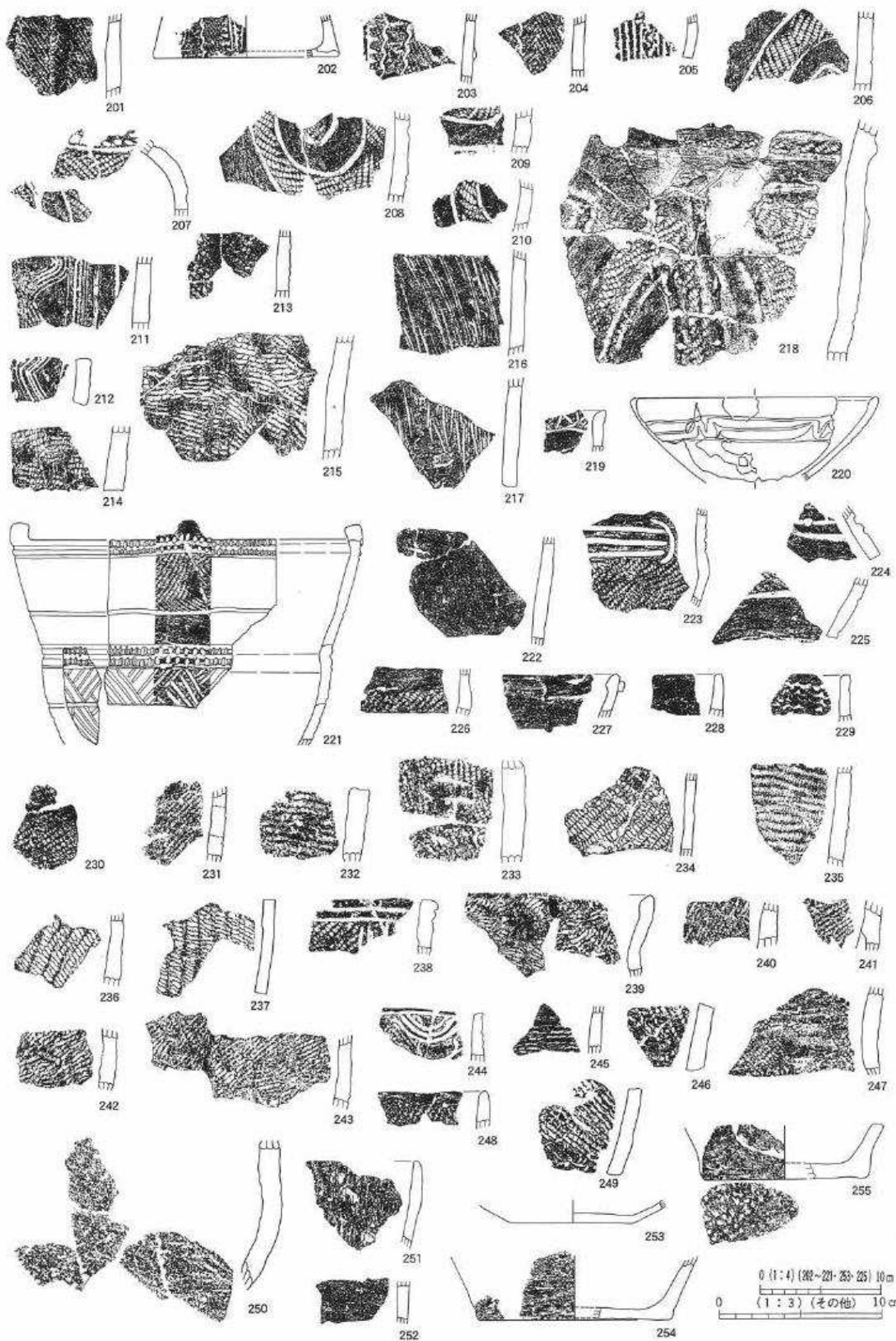


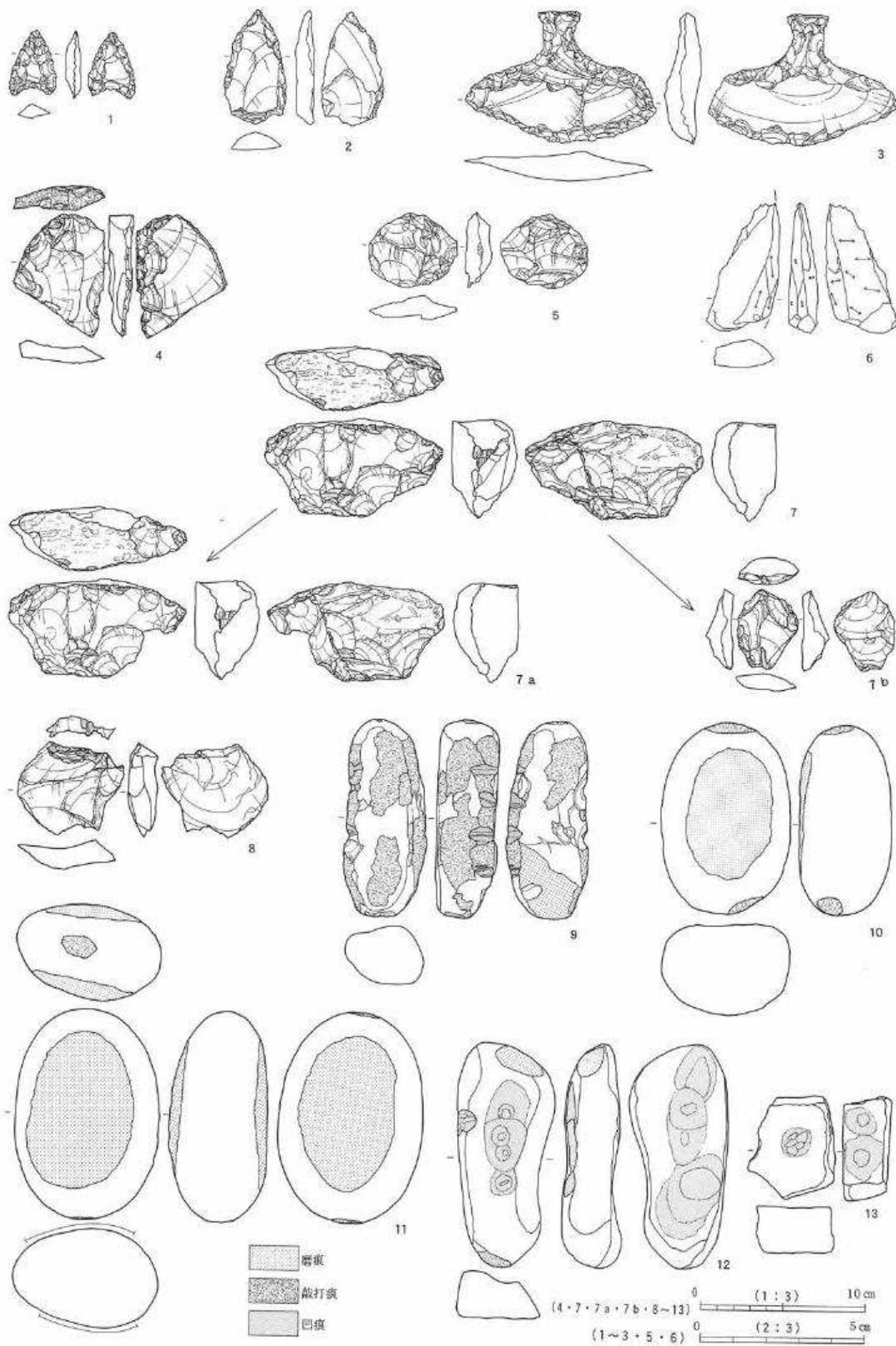
0 2 m

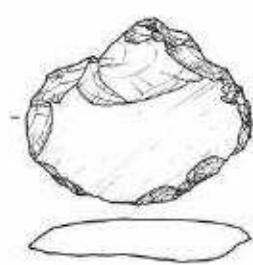
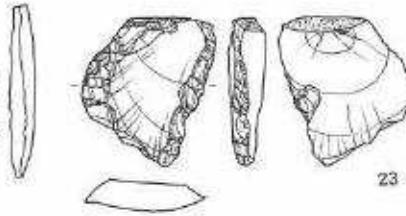
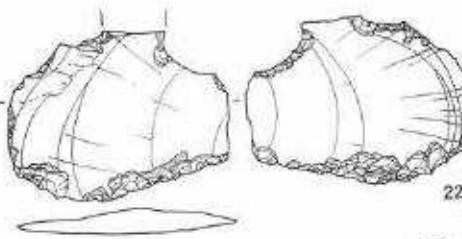
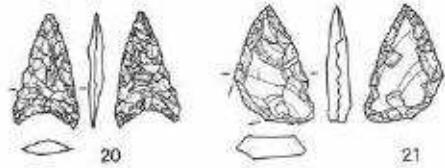
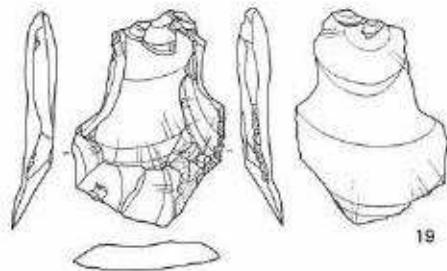
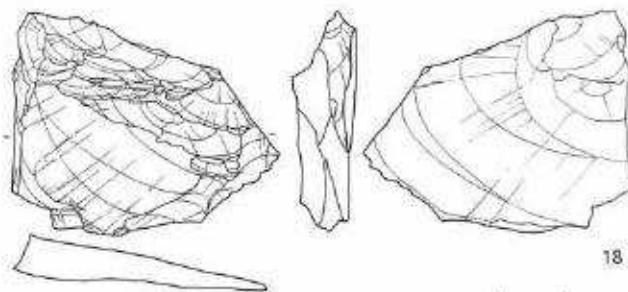
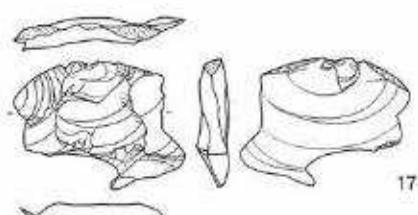
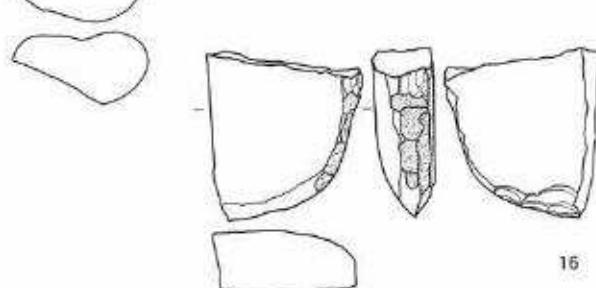
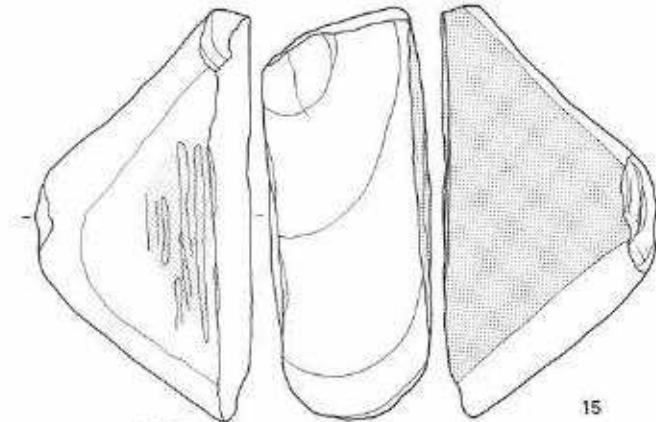
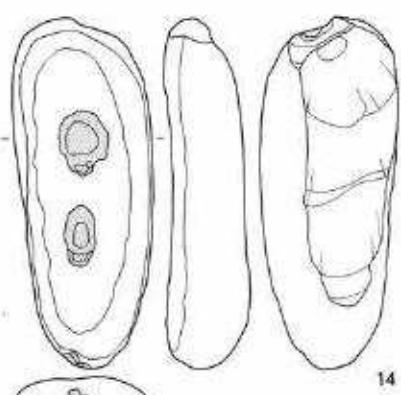








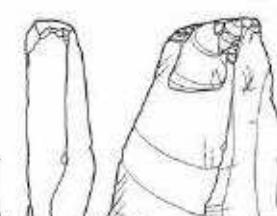
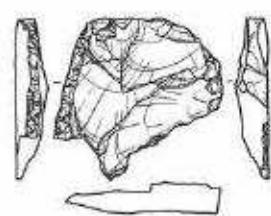




24

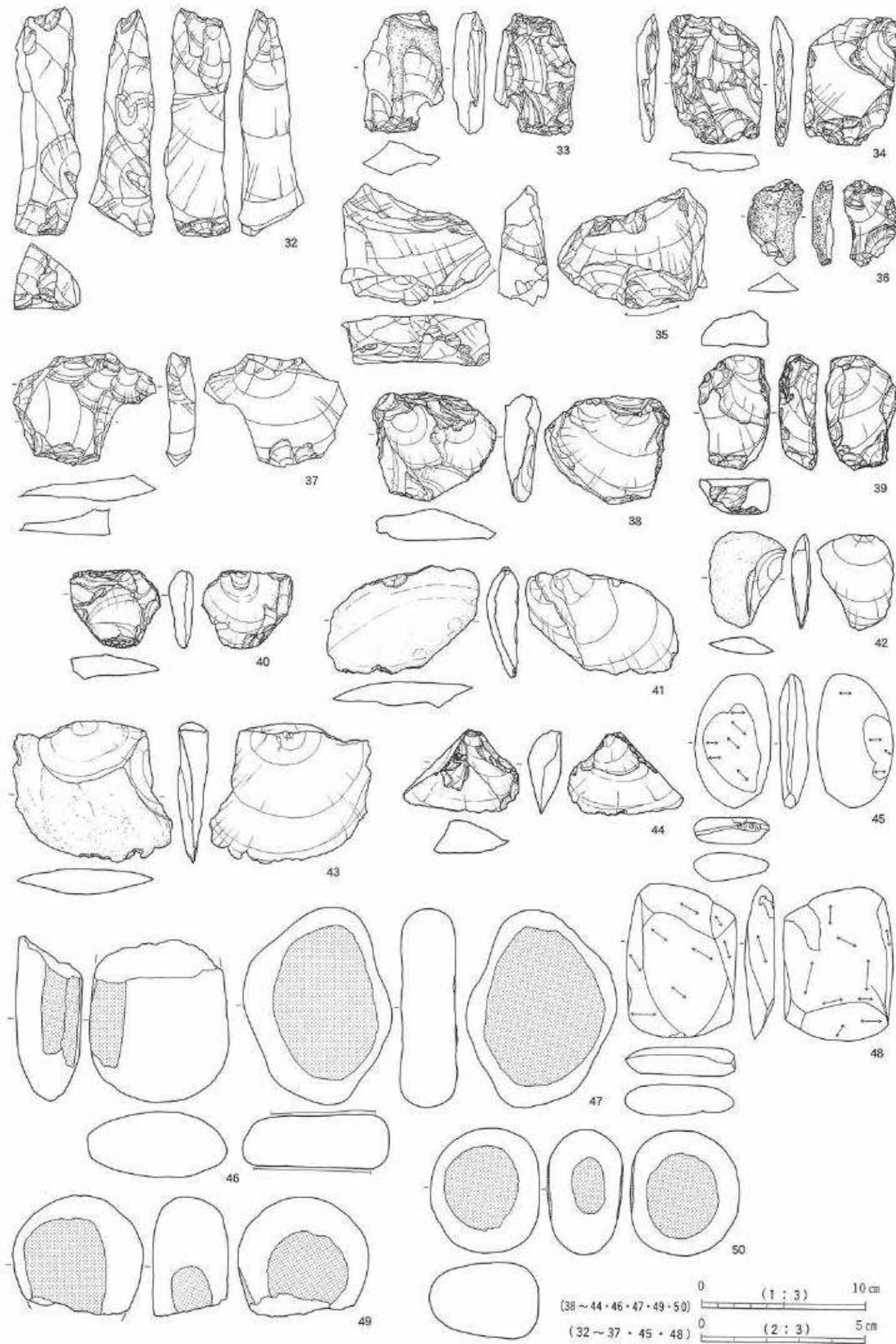
25

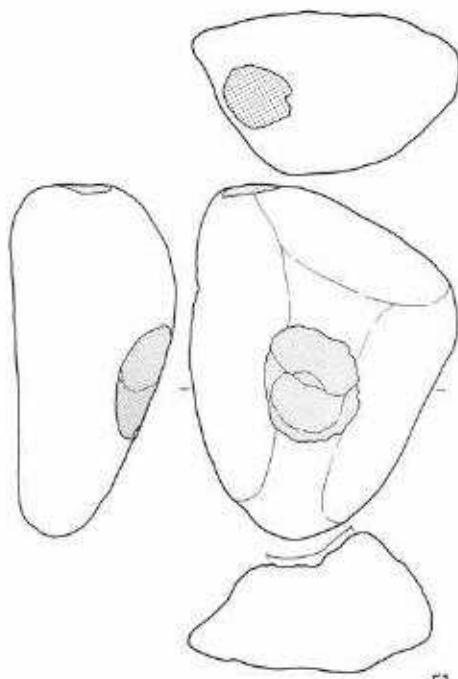
26



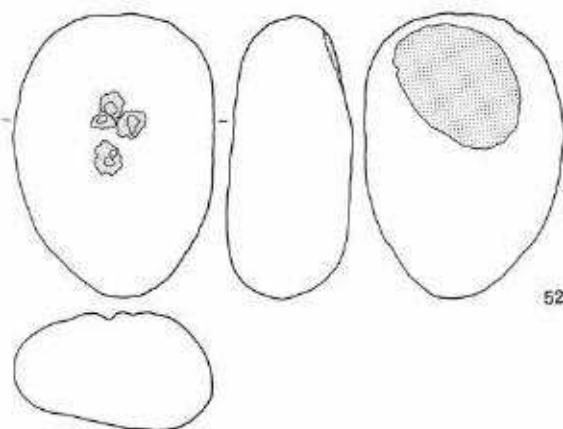
0 3:3:4:15:18:24:27:29:31 10 cm

0 (2:3)(17:19:20~23:28) 5 cm

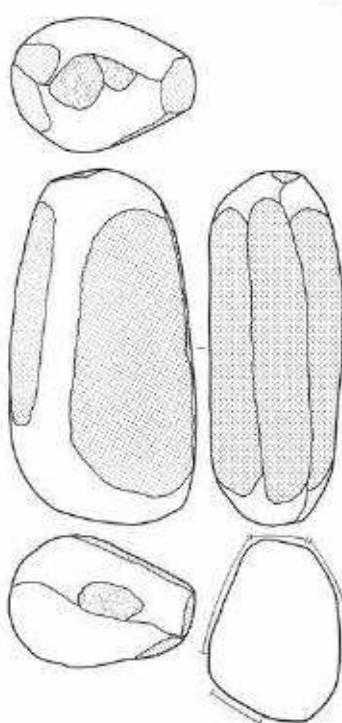




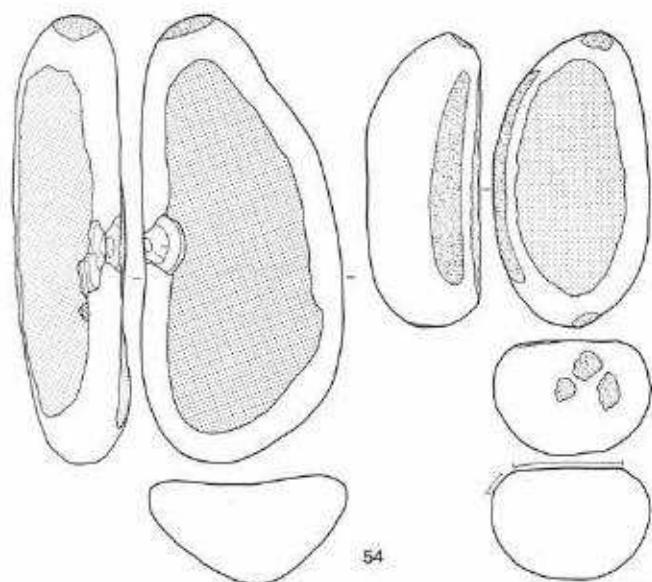
51



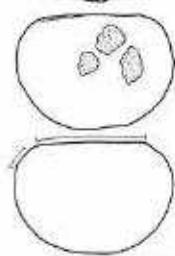
52



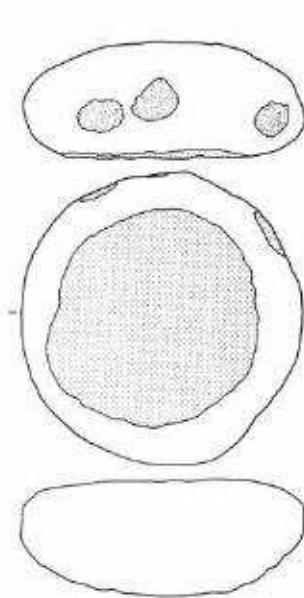
53



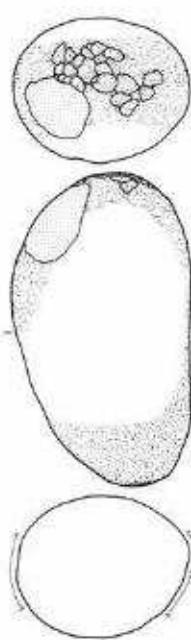
54



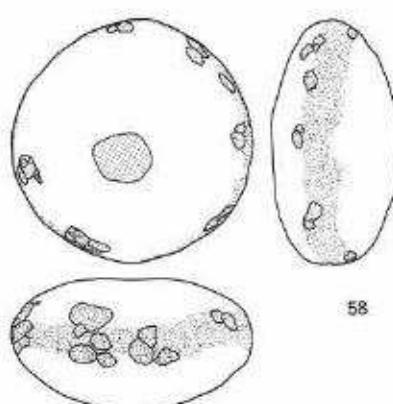
55



56

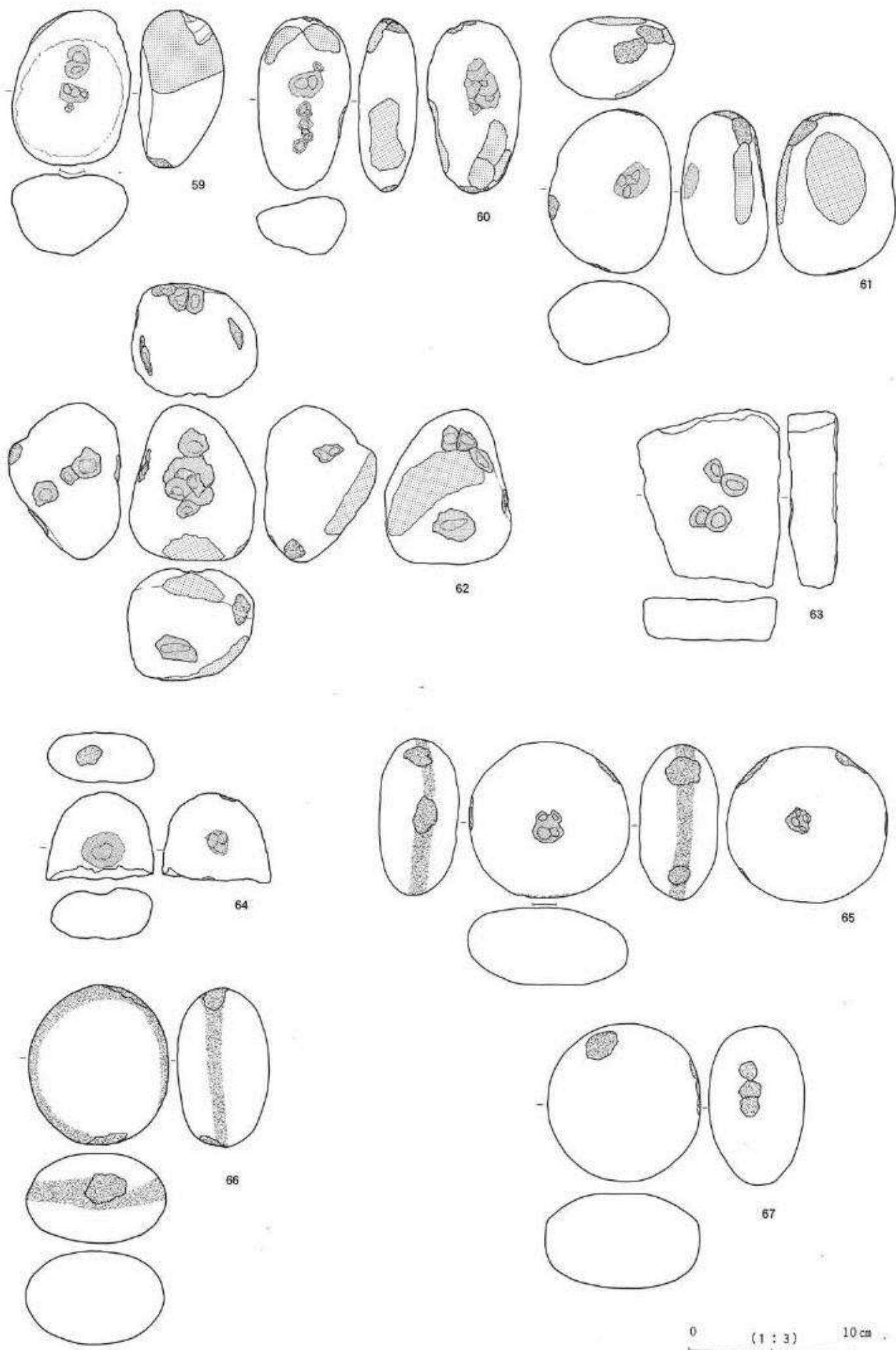


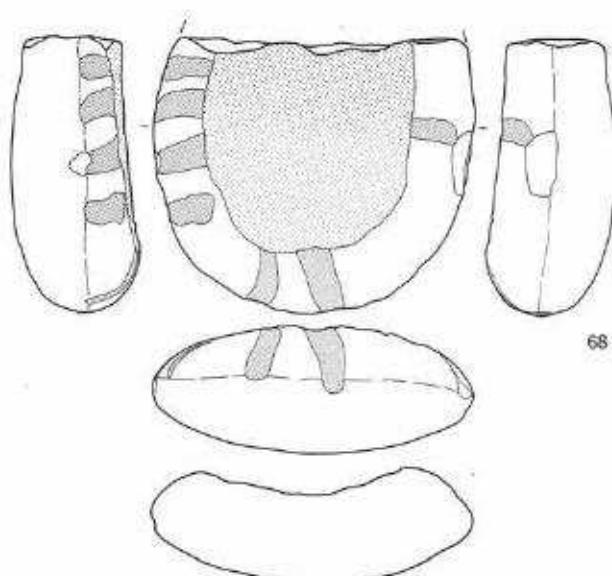
57



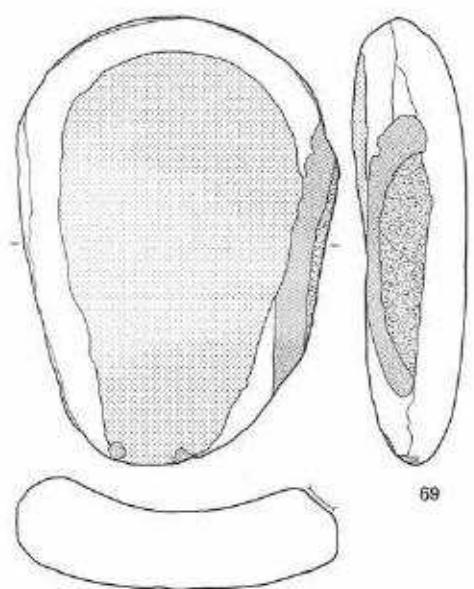
58

0 (1 : 3) 10 cm

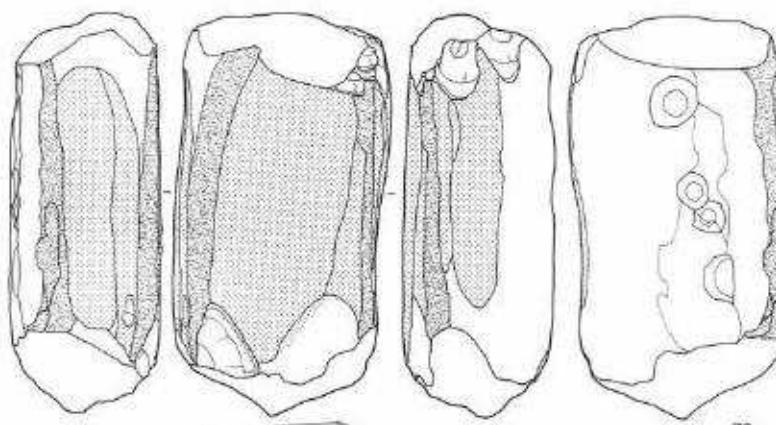




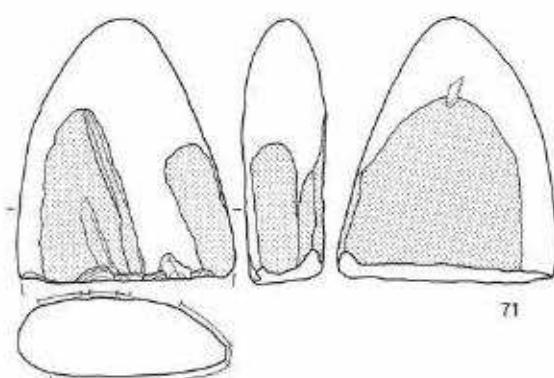
68



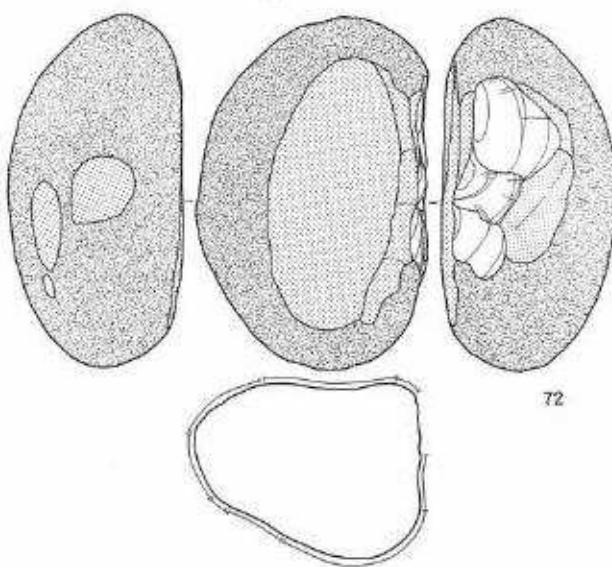
69



70

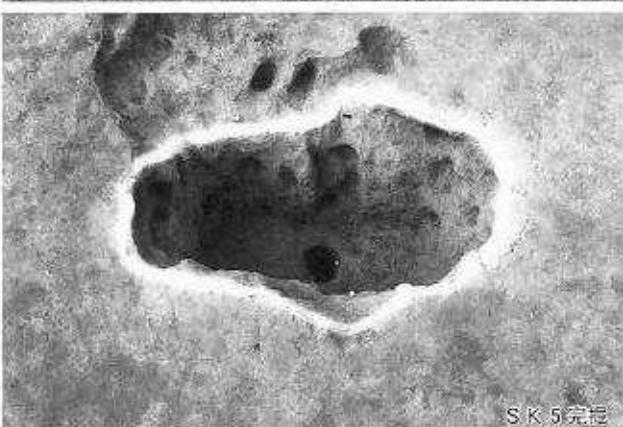
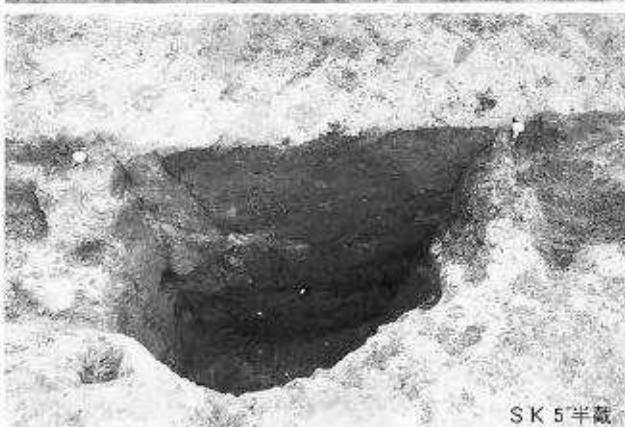


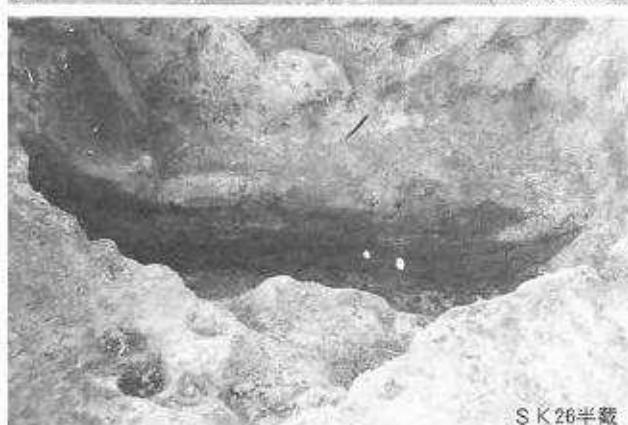
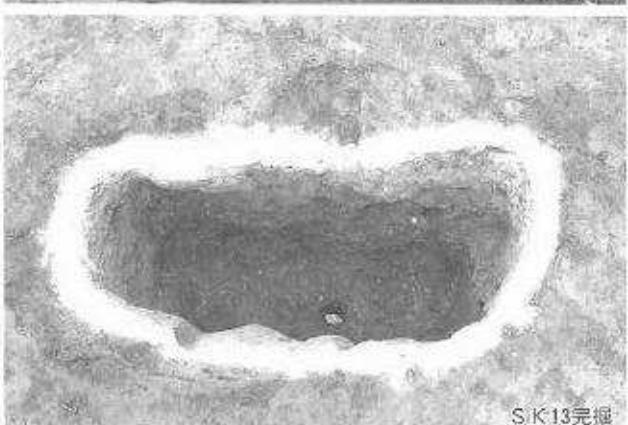
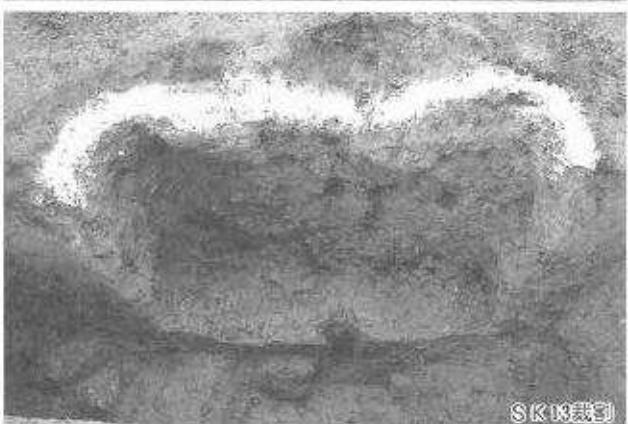
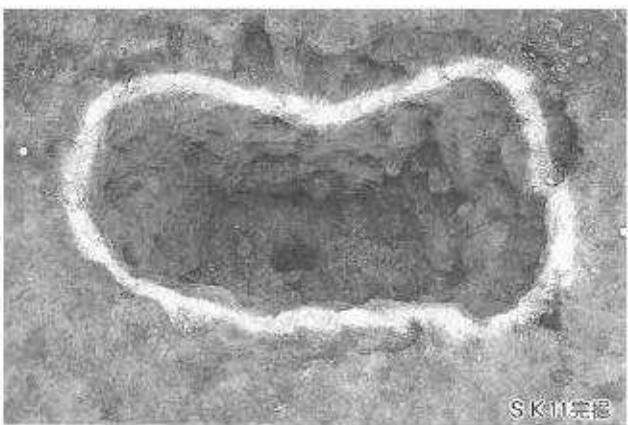
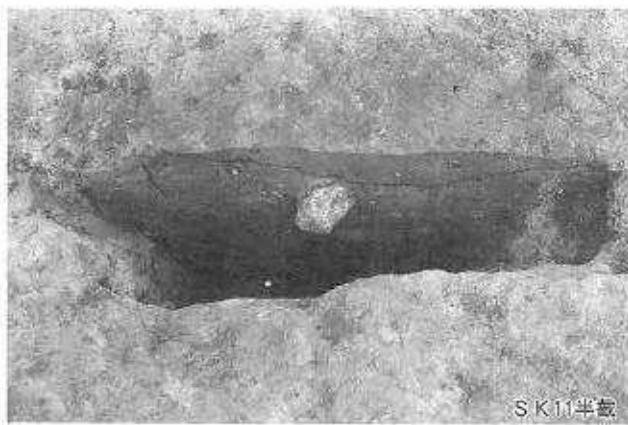
71



72

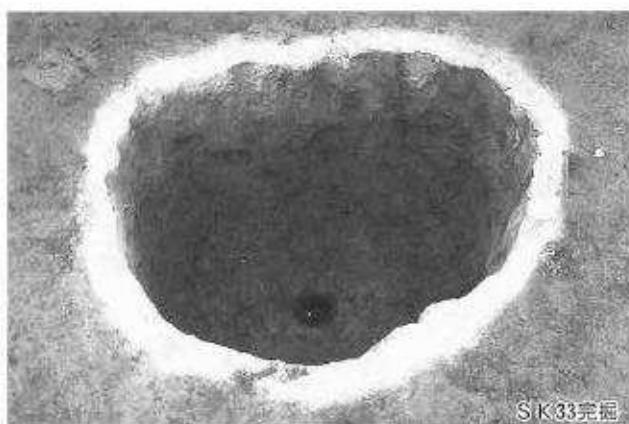
(71) (1 : 3) 10 cm
 (その他) (1 : 4) 15 cm







SK 33半掘



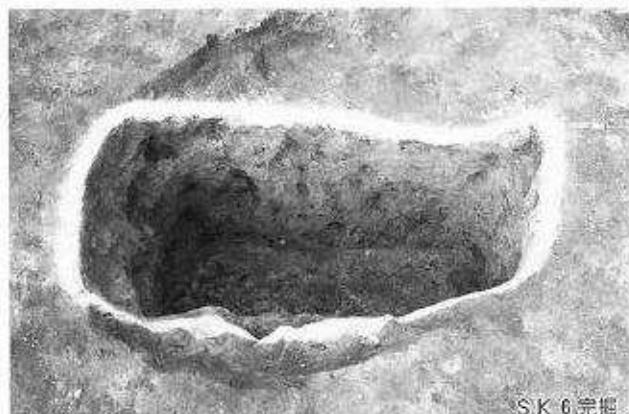
SK 33完掘

調査区全景
(南側から)

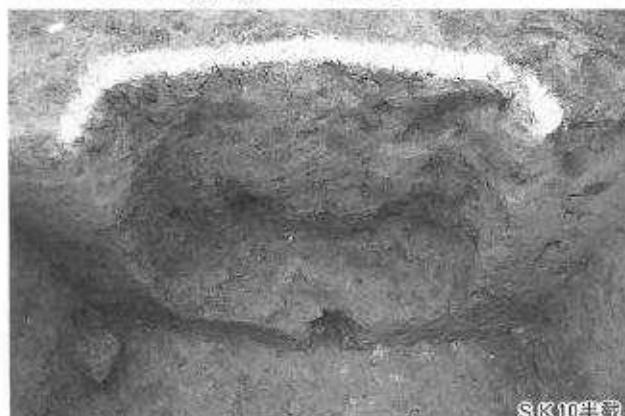
SK 3半掘



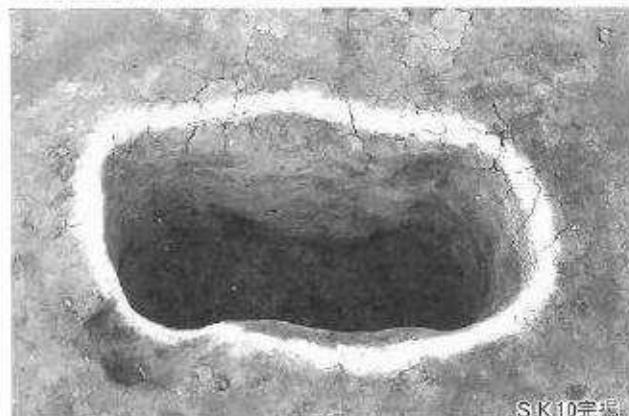
SK 6半掘



SK 6完掘



SK 10半掘



SK 10完掘



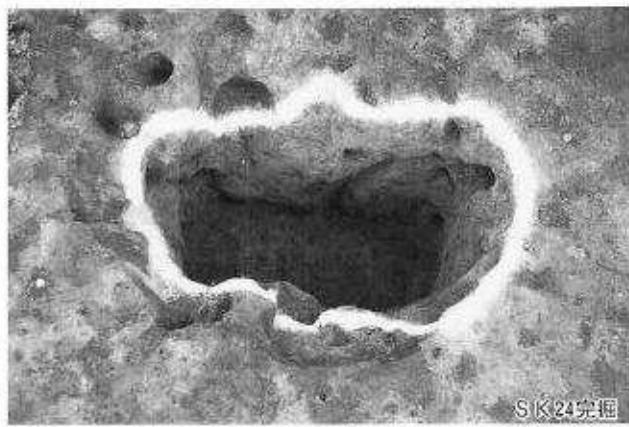
SK 12半掘



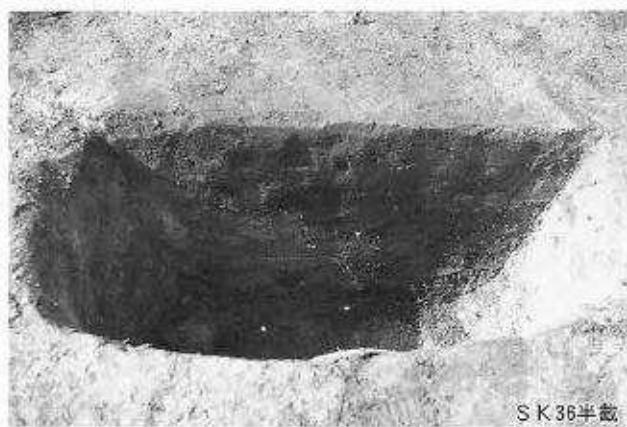
SK 12完掘



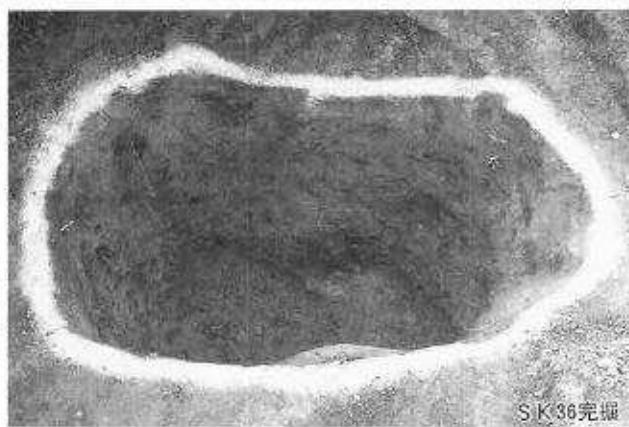
SK 24半断面



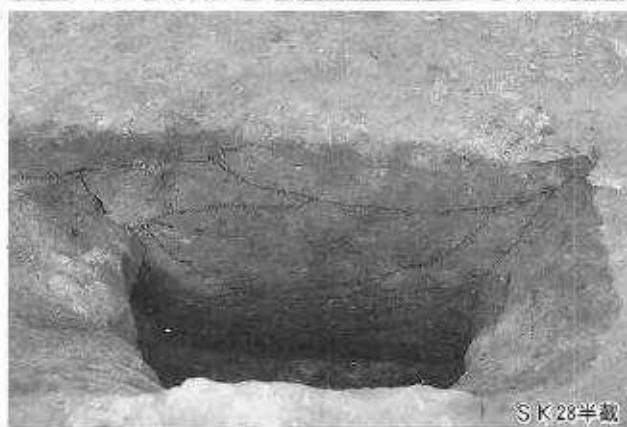
SK 24完掘



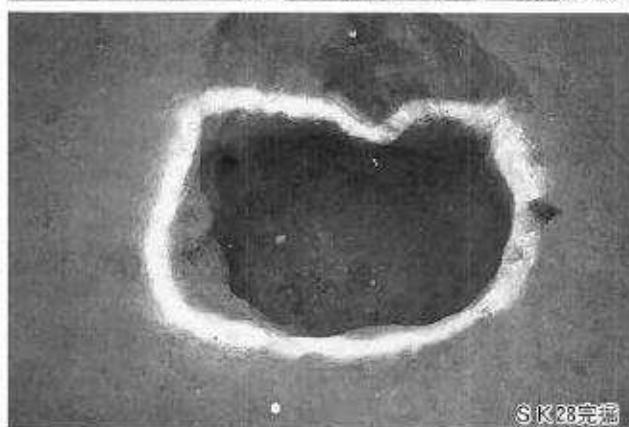
SK 36半断面



SK 36完掘



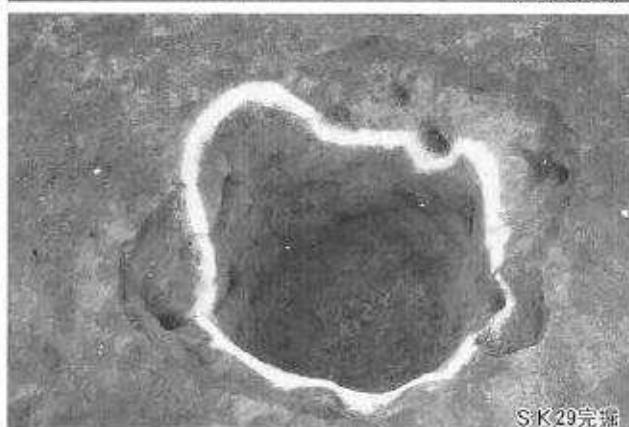
SK 28半断面



SK 28完掘



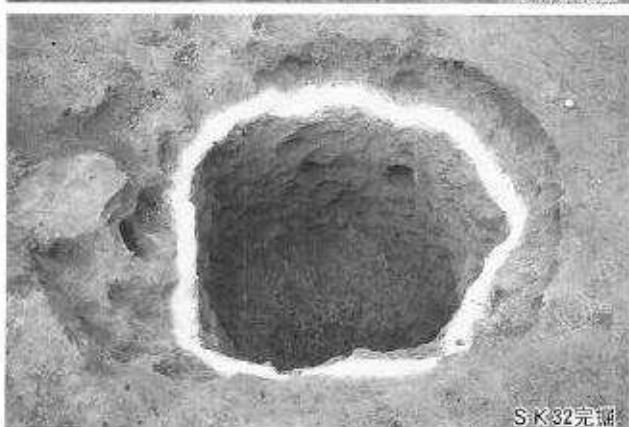
SK 29半断面



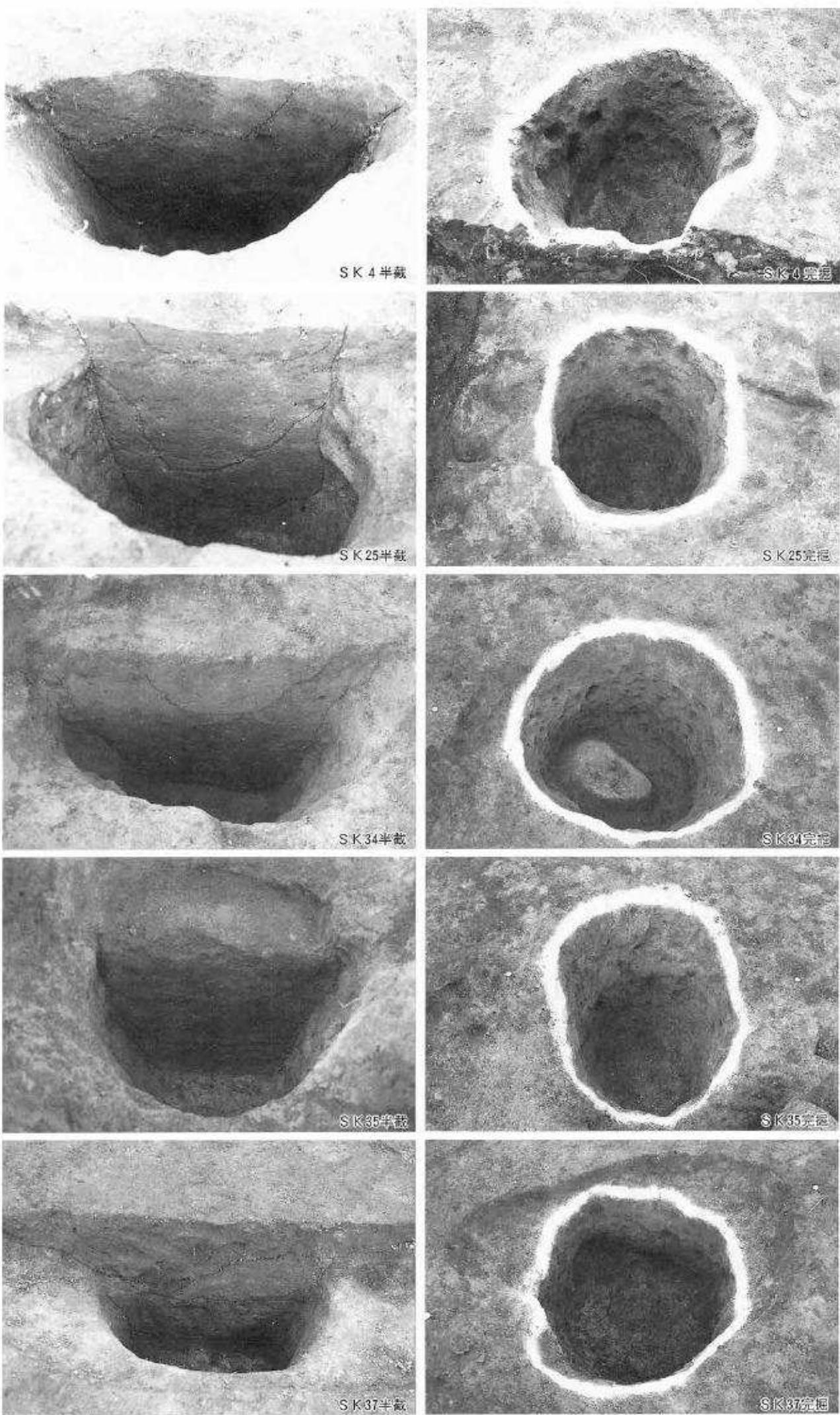
SK 29完掘

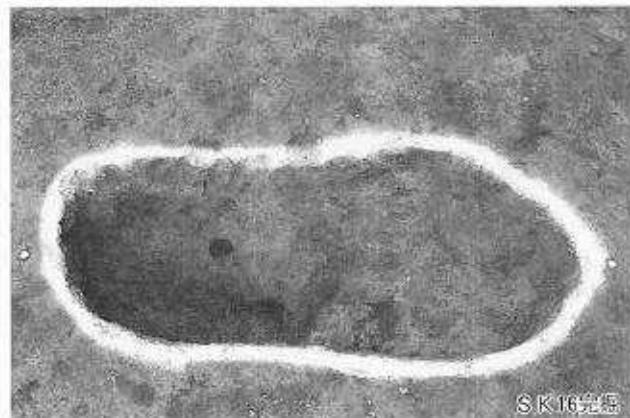
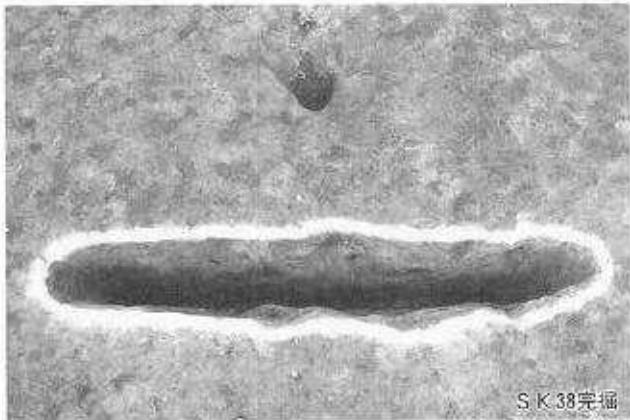


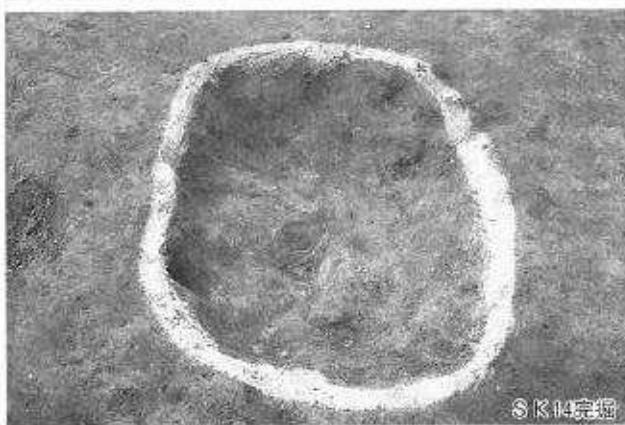
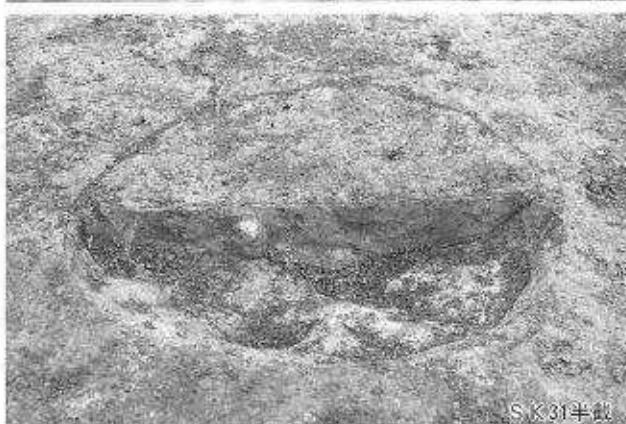
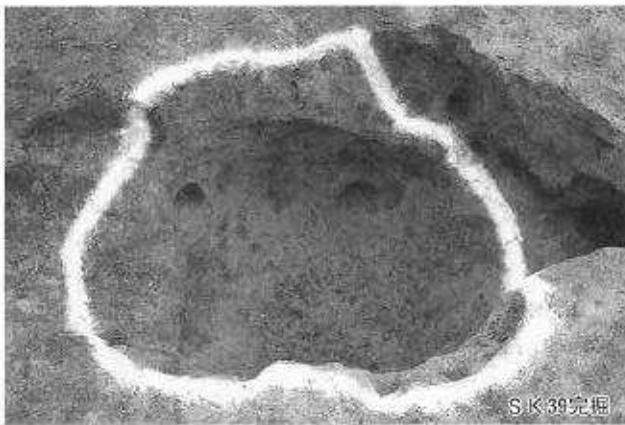
SK 32半断面

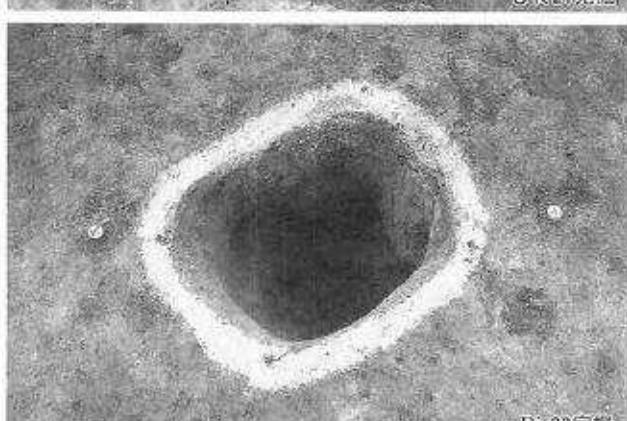
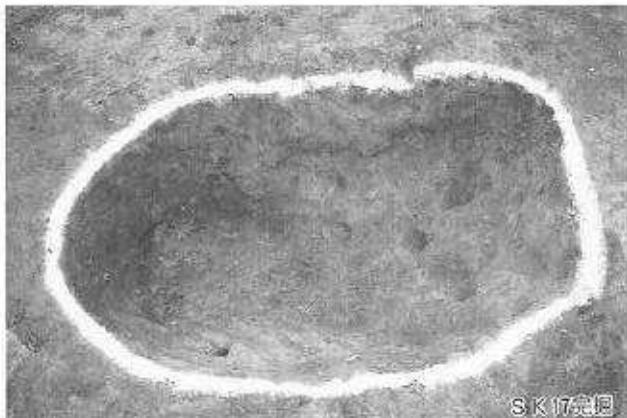


SK 32完掘







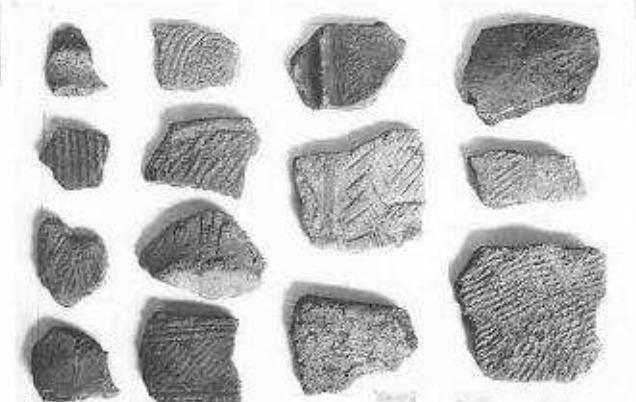
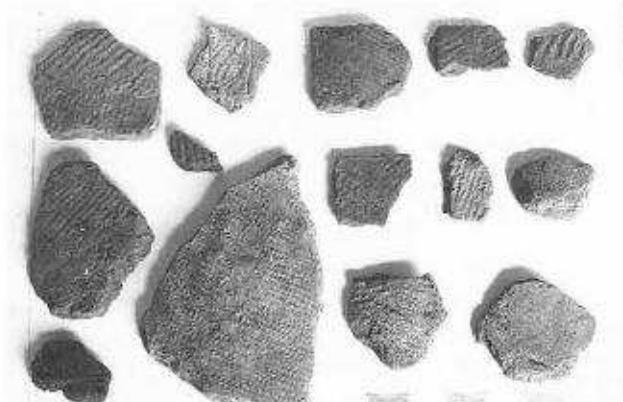




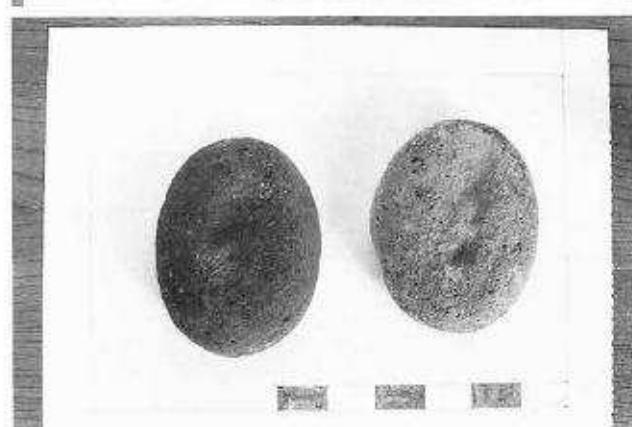
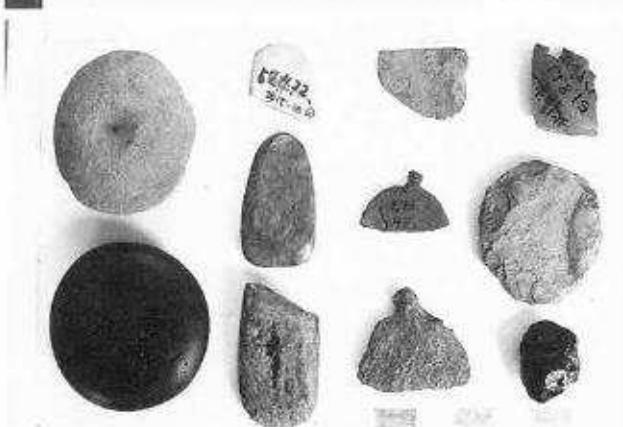
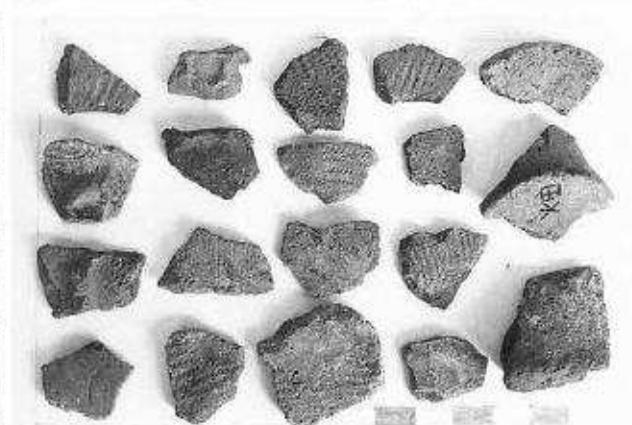
長峰遺跡
一次調査

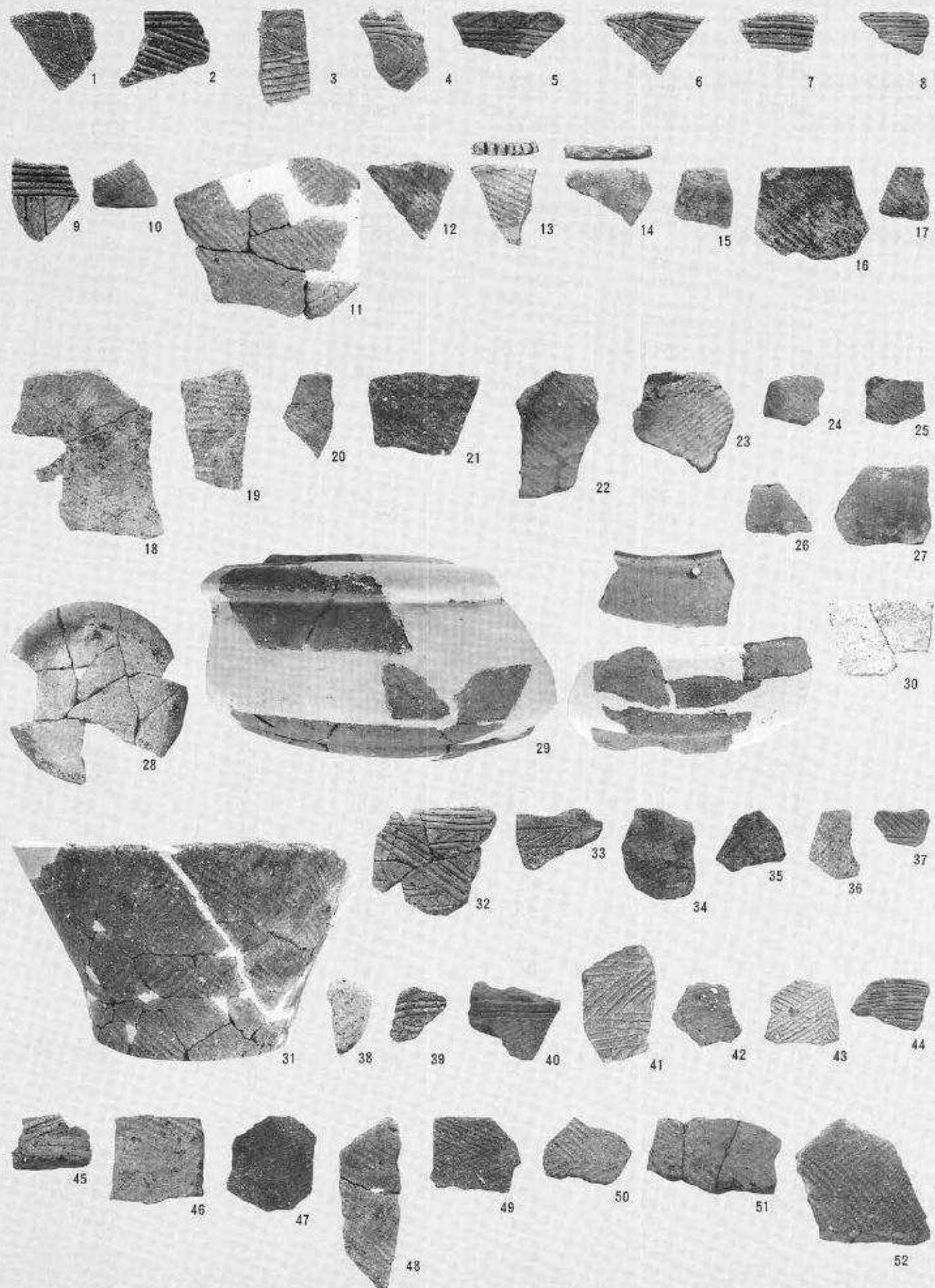


萩清水遺跡
近くの草木

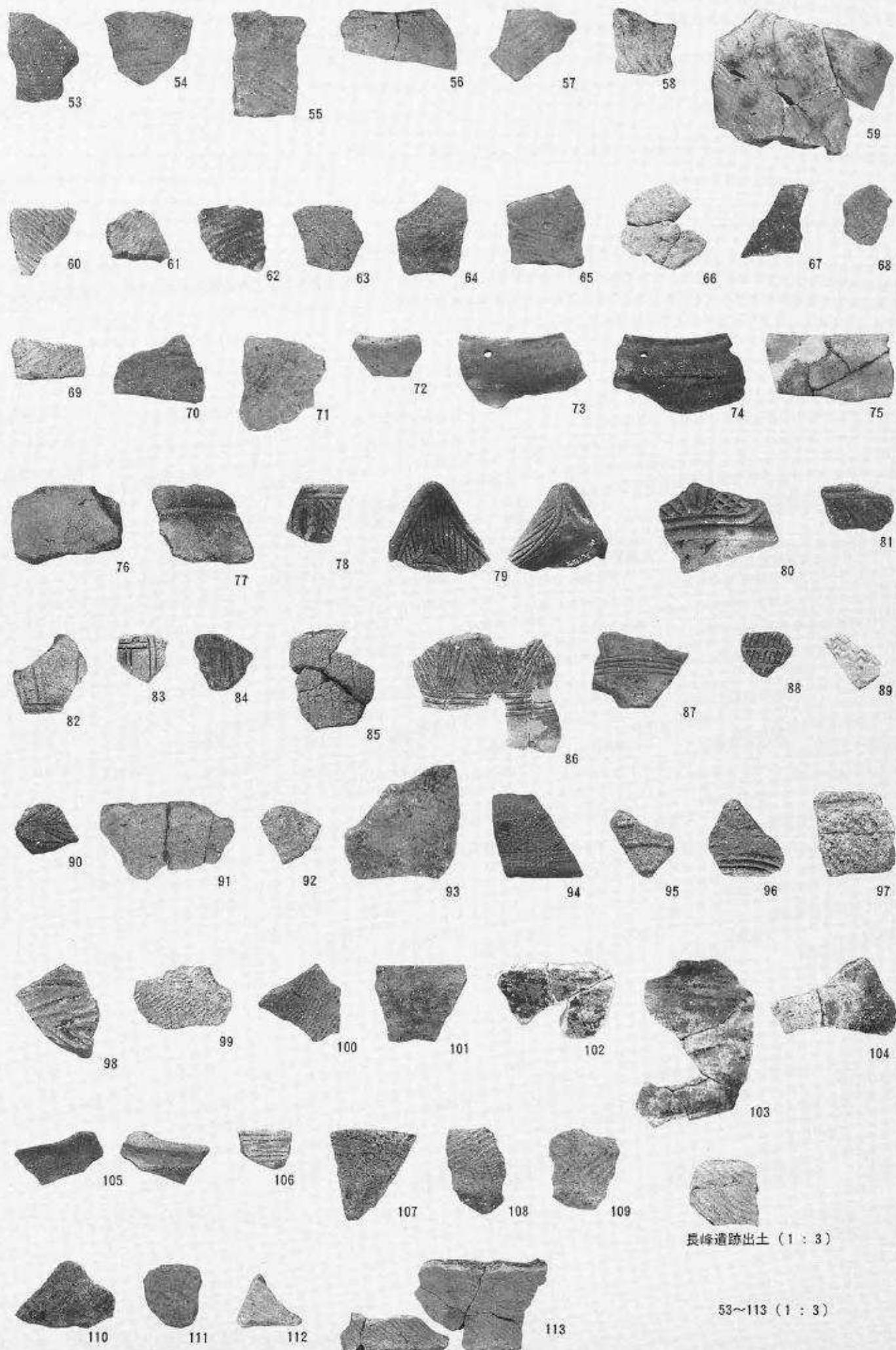


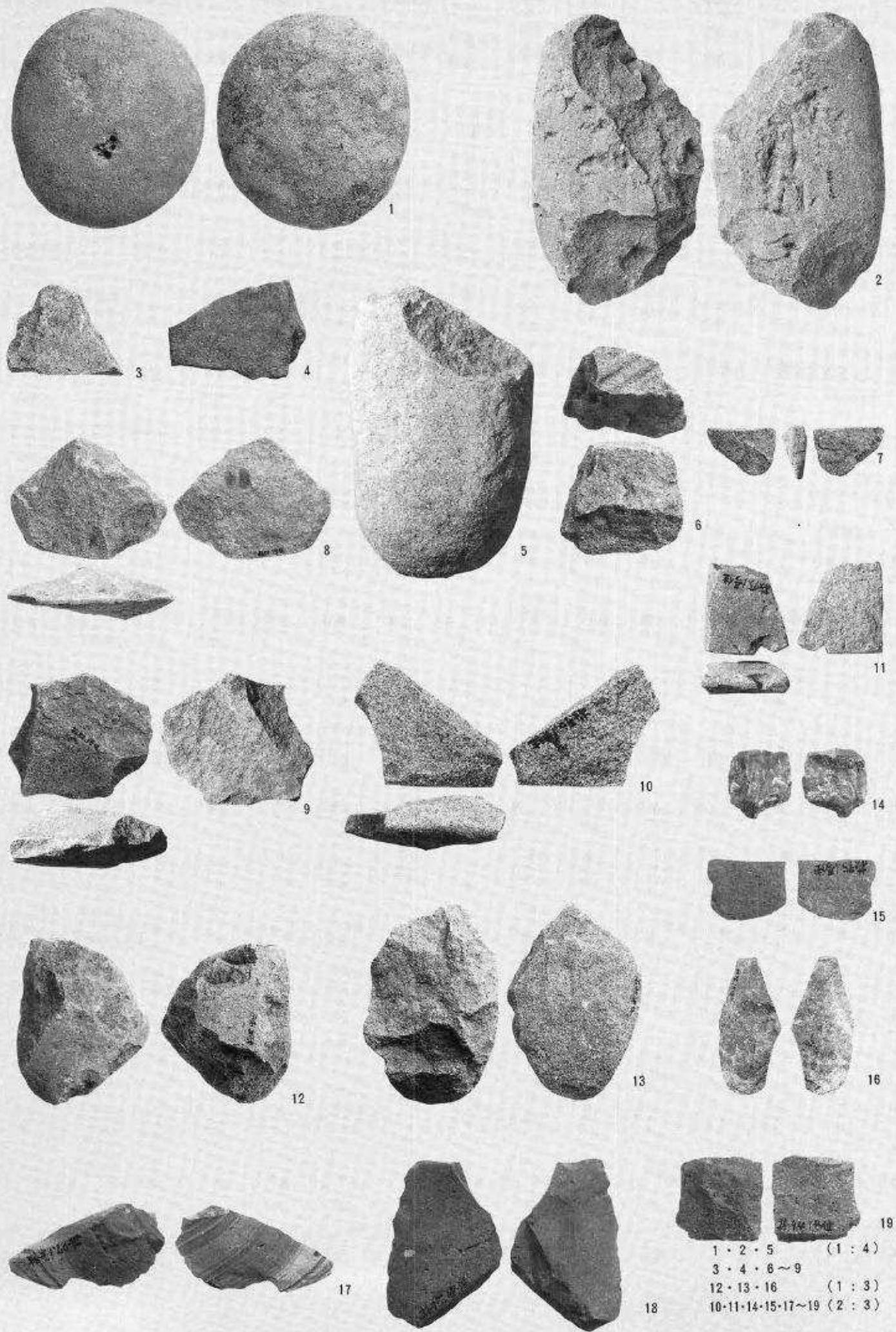
萩清水遺跡
表面採集品

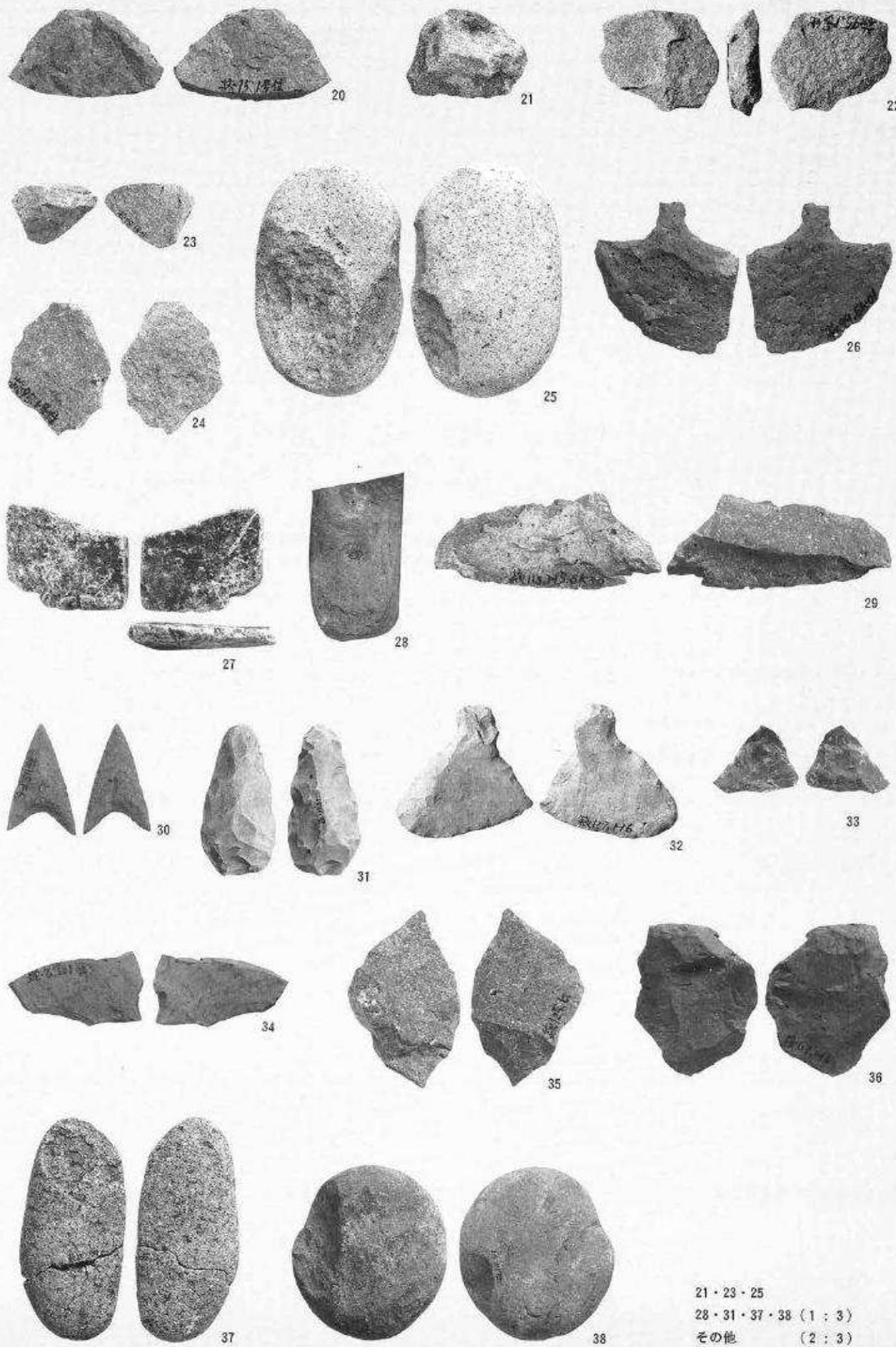




28・29・31 (1 : 4)
その他 (1 : 3)









S.K.7 土層



S.K.7 完掘



S.K.6 半掘



S.K.6 完掘



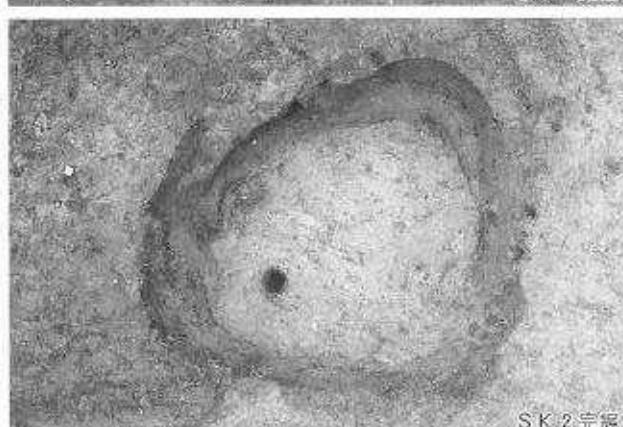
S.K.1 半掘



S.K.1 完掘



S.K.2 半掘



S.K.2 完掘



S.K.10 半掘



S.K.10 完掘



SK 11半掘



SK 12完掘



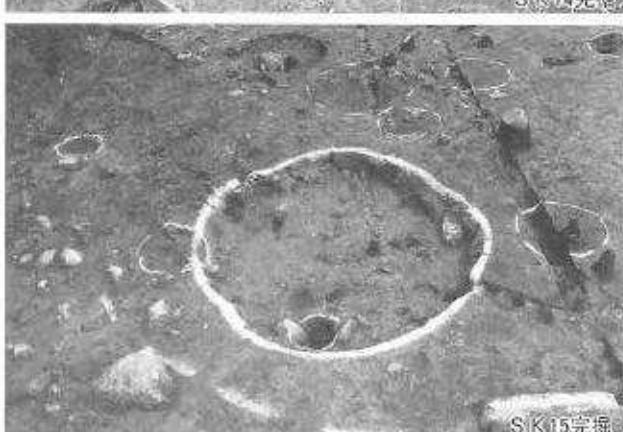
SK 14半掘



SK 14完掘



SK 15半掘



SK 15完掘



SK 5完掘



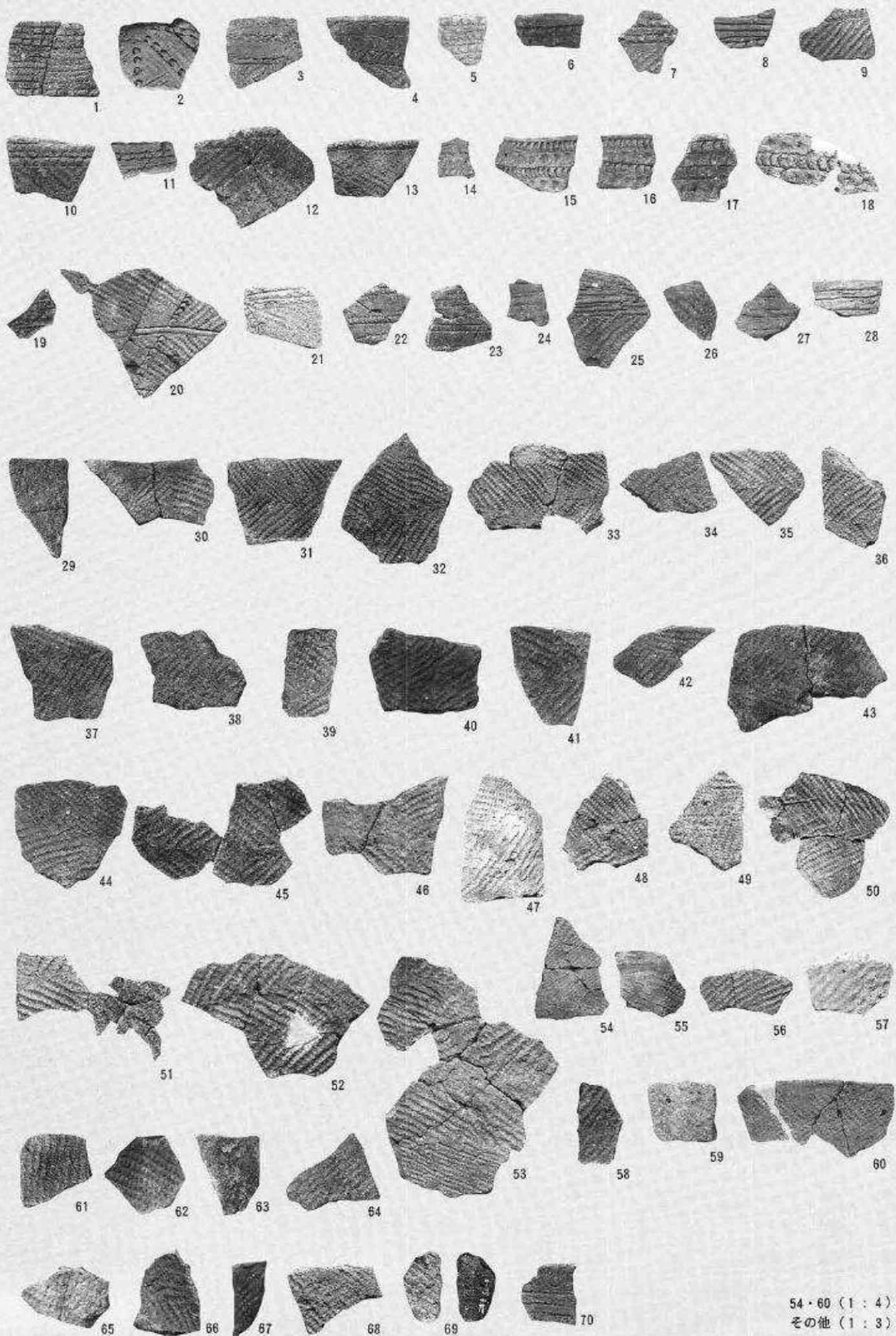
SK 13半掘



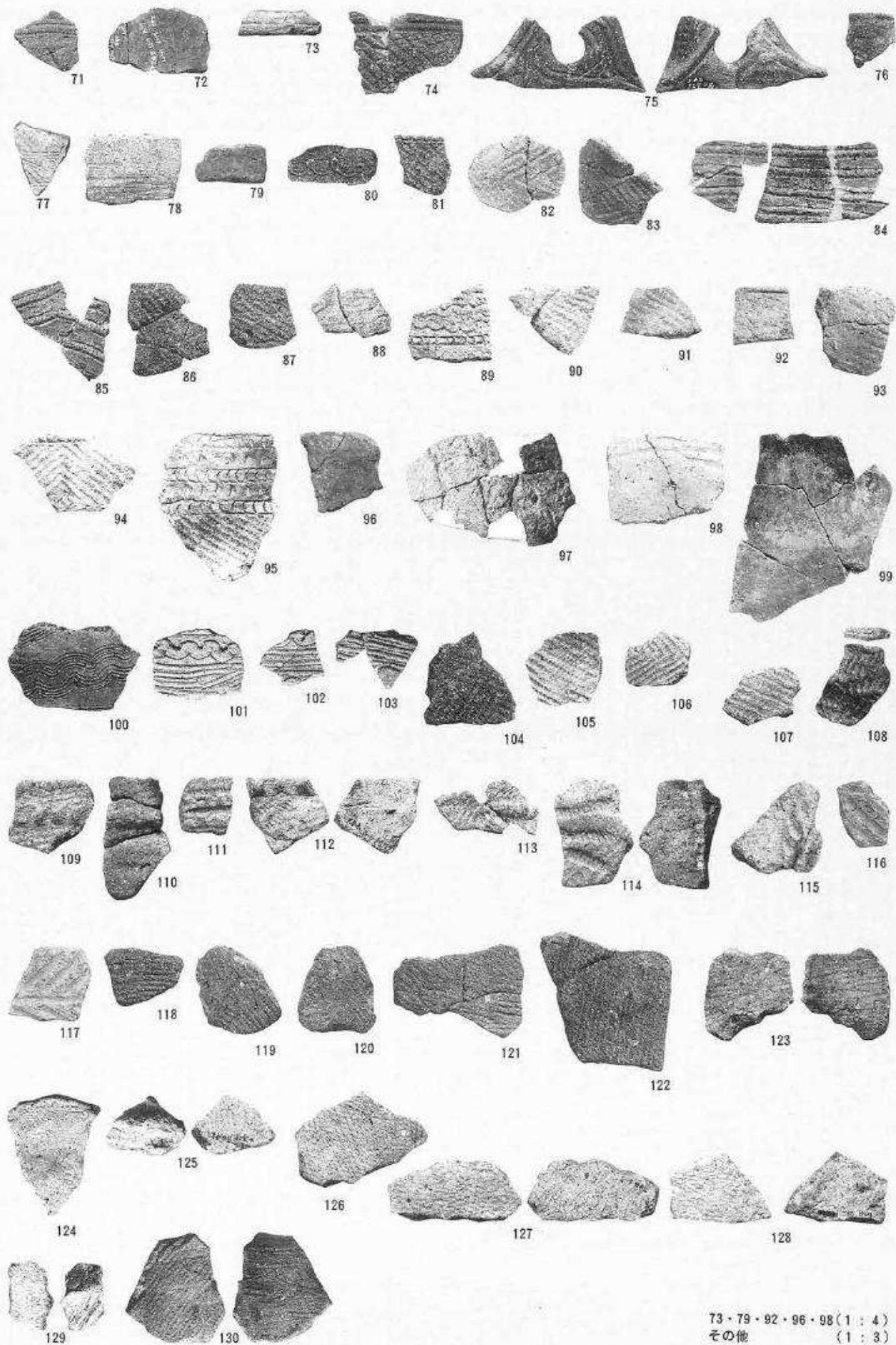
遺跡全景

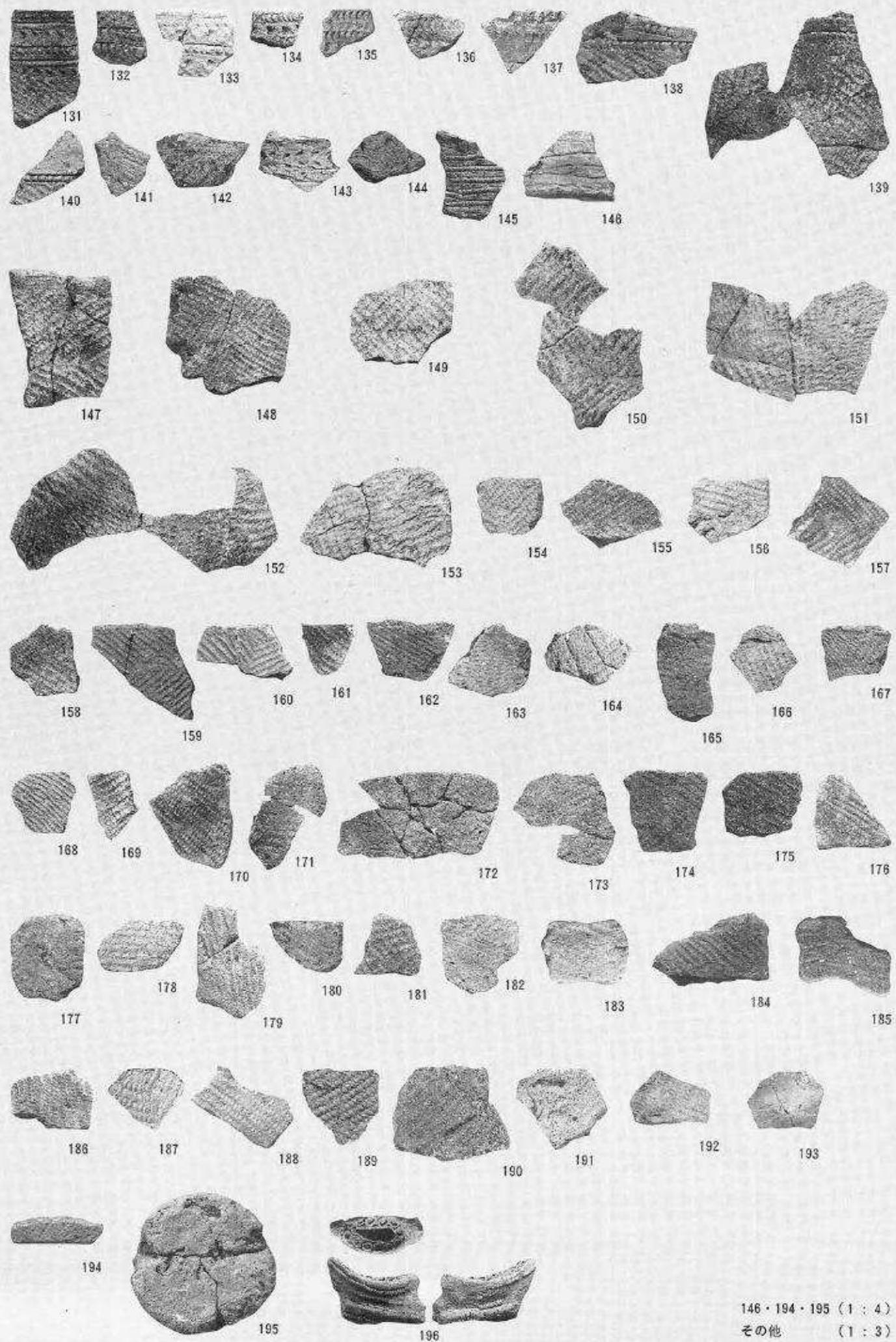


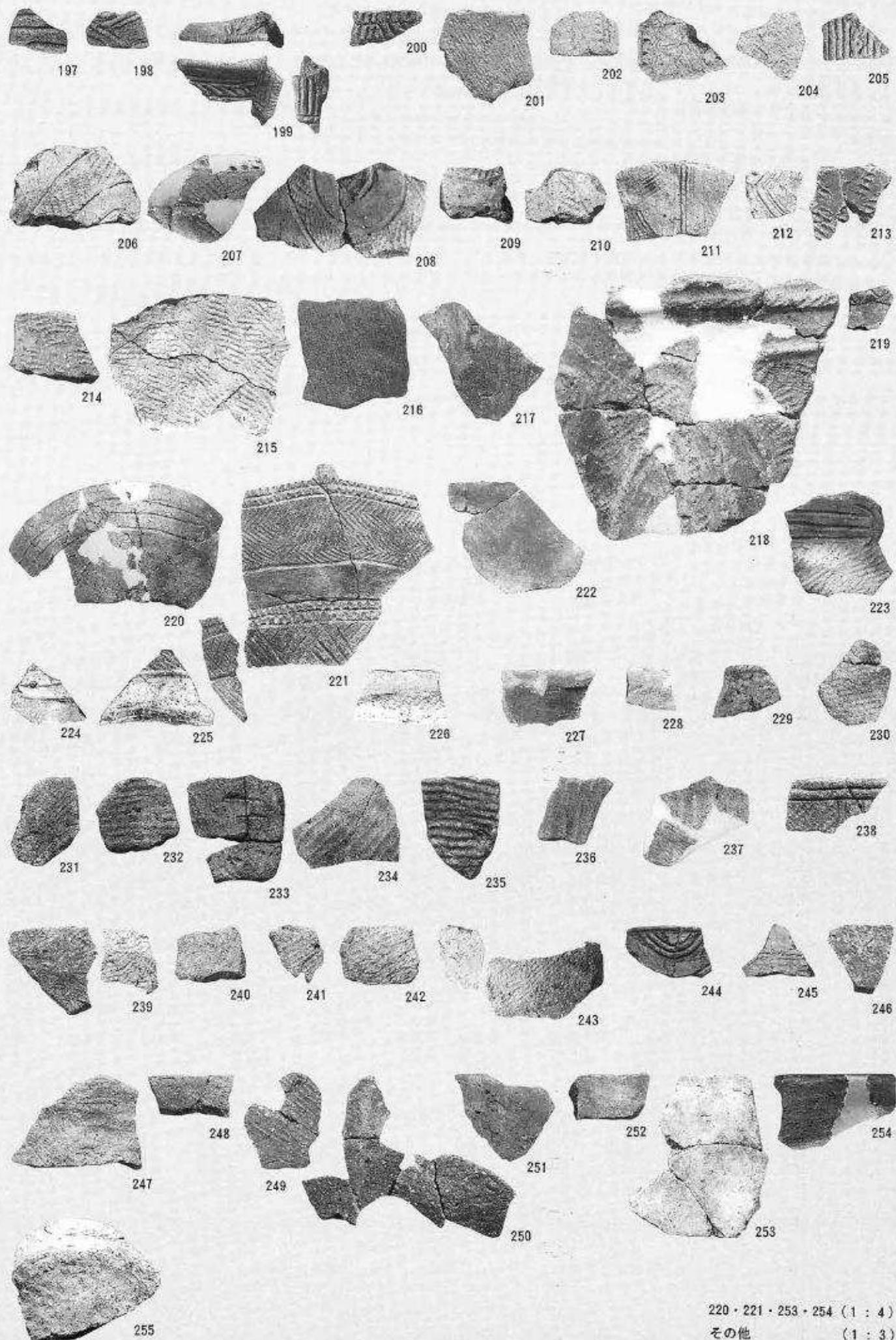
調査風景

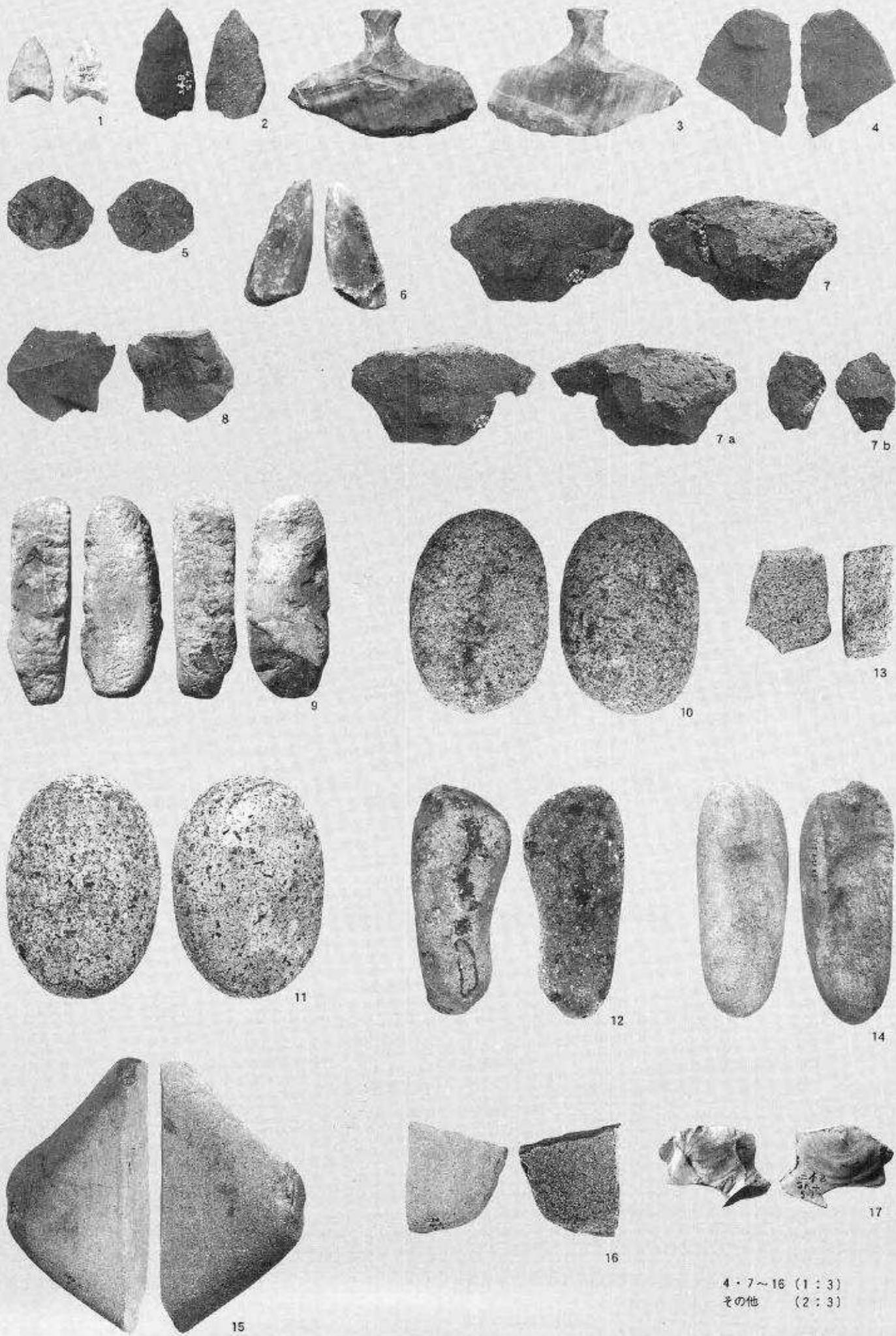


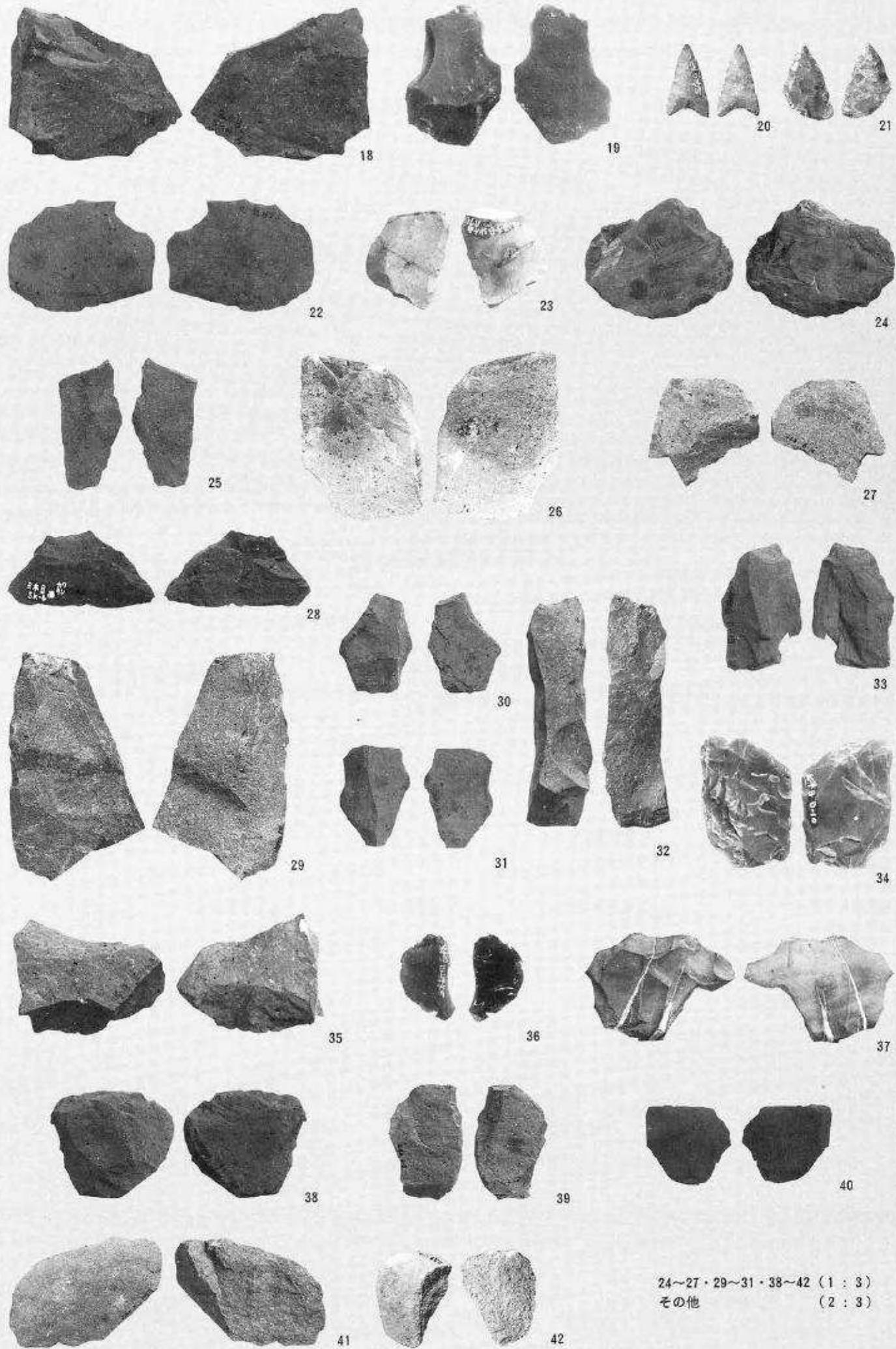
54・60 (1 : 4)
その他 (1 : 3)

73・79・82・96・98 (1 : 4)
その他 (1 : 3)









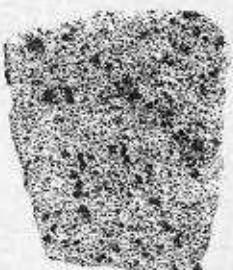




61



62



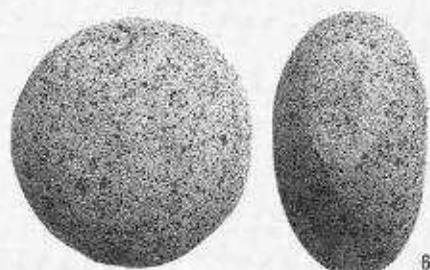
63



64



65



66



67



68



69



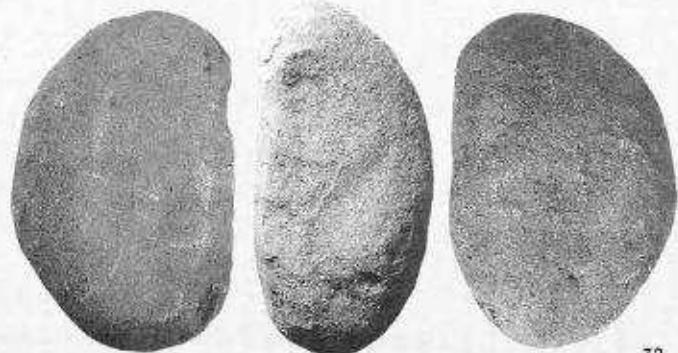
70



71



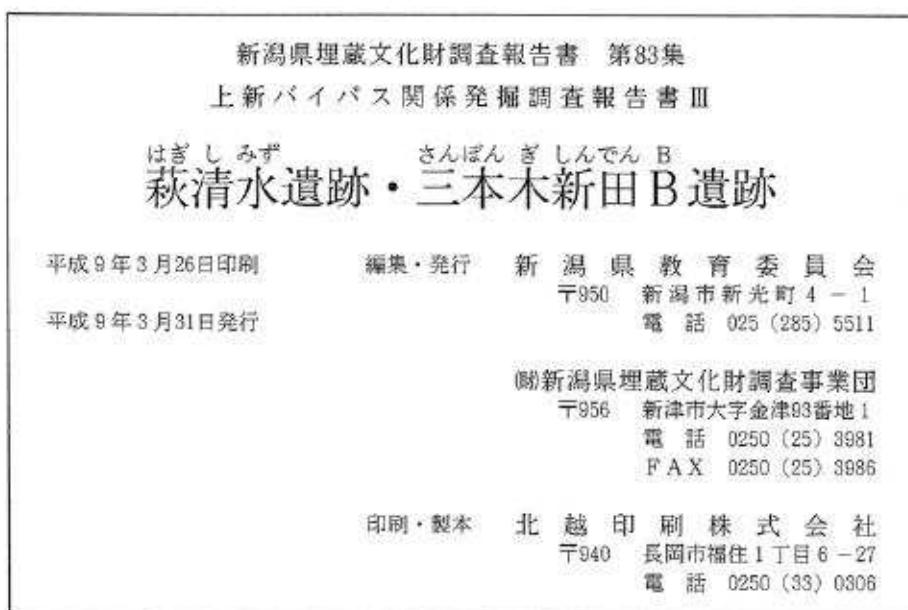
72



61～67・71 (1:3)
68～70・72 (1:4)

報告書抄録

ふりがな	はぎしみずいせき・さんぼんぎしんでん B いせき							
書名	萩清水遺跡・三本木新田B遺跡							
副書名	上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第83集							
編著者名	立木(土橋)由理子・寺崎裕助							
編集機関	財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL. 0250(25)3981							
発行年月日	1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
萩清水遺跡	新潟県新井市三本木 新田字萩清水9-1他	15217	336	37度 00分 21秒	138度 13分 56秒	一次調査 19860823~19860907 二次調査 19860908~19861017	4,000m ²	一般国道18号上 新バイパス建設 に伴う事前調査
三本木新田 B遺跡	新潟県新井市三本木 新田字長峯559他	15217	337	37度 00分 11秒	138度 13分 47秒	一次調査 19860827~19860926 二次調査 19870818~19871020	8,650m ²	同上
所収遺跡名	種別	主な遺構			主な遺物	特記事項		
萩清水遺跡	集落跡	住居跡1基(縄文前期) 陥穴状土坑22基(縄文前期)			縄文土器・石器	新井市教育委員会が同遺跡の連続部分を調査している		
三本木新田B 遺跡	集落跡	住居跡2(3?)基(縄文前期) 陥穴状土坑1基(縄文前期)			縄文土器・石器	なし		



新潟県埋蔵文化財調査報告書 第83集 『萩清水遺跡 三本木新田B遺跡』 正誤表追加 2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	三本木新田B遺跡 北隣	37度00分11秒	37度00分06秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書第83集 『萩清水遺跡 三本木新田B遺跡』

正 誤 表

頁	行	正	誤
32	2	遺物は <u>B群1類bの繩文土器</u> （図版16-94・95）、 <u>B群5類の繩文土器</u> （図版16-96）	遺物は <u>B群5類の繩文土器</u> （図版16-97）
32	6	B群5類土器（図版16-97）	B群5類土器（図版16-96）
34	19	e. SK <u>15</u>	e. SK <u>14</u>
34	21	f. SK <u>14</u>	f. SK <u>15</u>
35	5	16 <u>C</u>	16 <u>O</u>